
お兄ちゃんと先生とアイツの彼女！

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お兄ちゃんと先生とアイツの彼女！

【Nコード】

N7922L

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

自他共に認めるブラコンの舞。

高校入学を機に脱ブラコンして彼氏を作ろうと思っていたのに、周りには、猿みたいな痴漢男やかっこいいけど変な先生や粘着系の男ばかり。

私の青春、どうなっちゃうの！？

第1部 第1話

「舞^{まい}、早くしろよ！入学式に遅れるぞ！」
「ちょ、ちよつと待ってよ！」

一階から聞こえてきたお兄ちゃんの声に、私は部屋の中から叫んで答える。

今日は、高校の入学式。

初めて高校に行く日なのよ？
きちつとした格好したいじゃない？

私は鏡の中の自分を見る。

紺のブレザーに、白いブラウス、それと深い紅のネクタイ。
私立朝日ヶ丘高校の制服だ。

友達には「私立のくせに地味ね」って言われたけど、私はこのシン
プルな制服が好きだ。

シンプルだからこそ、きちつと着れば綺麗だし、
私は背が高く細いから（胸もないけど）、
チェックとか刺繍のある凝った制服より、こういう制服の方が似合
うと思う。

それに、この制服にはずっと憧れていた。

家から東京の端っこにある朝日ヶ丘高校までは電車で1時間以上かかる。

でも、わざわざそんな遠くの、しかもレベルの高い朝日ヶ丘を受験したいと言った私に、

両親は反対しなかった。

だって、お兄ちゃんもその卒業生で、ちゃんと第1志望の大学に合格したから。

だけど私が朝日ヶ丘を選んだ理由はそれだけじゃない。

ドンドン！

部屋の扉が荒々しく叩かれる。

この叩き方はお兄ちゃんだ。

「舞！父さんも母さんももう外で待ってるぞ！」

「はい」

よし！そろそろ行くか！

でも、部屋から出てきた私を見て、お兄ちゃんは顔をしかめた。

「・・・何そんなにめかし込んでるんだよ」

「どこが？」

制服は着崩したりしてないし、靴下だってちゃんと校則通りよ？
ピアスはもちろん、アクセだって一つもつけてないし。

「髪」

「・・・髪？」

バレたか。

実は昨日、ちよつとだけ染めてみた。

校則では禁止されているけど、「地毛です」と言い張れる程度だ。

「綺麗でしょ？本当は巻きたいとこだけど、初日からそれはやめとくわ」

そういう訳で、今日はツヤツヤのストレートだ。

お陰で髪は背中の真ん中くらいまである。

「初日だけじゃなくて、ずっとやめとけ」

お兄ちゃんはため息をついた。

何よ、何よ。

お兄ちゃんだって、派手系の女の人、好きなくせに。

ま、それは見た目だけの話みたいだけど。

私とお父さん、お母さん、それに久々に高校に行ってみたいと言うお兄ちゃんは、

揃って電車に乗り込んだ。

今日は入学式だけだから、遅めの時間の電車なのに結構混んでる。

「翔^{しょう}。舞の鞆、持ってあげなさい」
「なんで俺^{おれ}が・・・」

お兄ちゃんはブツクサ言いながらも私の鞆を持ってくれる。
どうせ持つなら、文句言わなきゃいいのに。

「・・・舞。何笑ってるんだよ」
「お兄ちゃんって彼女という時もこんな感じなのかなー、と思って」
「うるさい！」

あはは。彼女のこととなると、お兄ちゃんって弱いんだから。

私より8個も上の、もうすぐ24歳になるお兄ちゃんは、
見た目だけじゃなくって、頭もいいし、運動もできる。
口は悪いけど、結構優しかったりもする。

妹の私から見ても、まさに「少女漫画に出てくる男の子」って感じだ。

凄くモテるけど、付き合ってる女の子を家に連れて来ることなんて、一度もなかった。
ところが、高校1年の終わり頃、お兄ちゃんは突然家に「彼女」を連れてきた。

その人は、今までお兄ちゃんが付き合ってたどの女の人とも違うタイプの人だった。

お世辞にも「綺麗」とか「かわいい」ってタイプじゃない。
敢えて褒めるなら・・・「愛嬌がある」かな。
とにかくうちゃくて地味な感じの女の人。

でも、どう見てもお兄ちゃんの方が惚れ込んでいる。

彼女はそんなお兄ちゃんを、穏やかに見守っている感じだった。

初めは驚いたけど、

今ではすっかり、私だけではなくお父さんもお母さんも、「彼女派」だ。

そんな彼女が着ていた、朝日ヶ丘の制服。

私はずっと、それに憧れていた。

そして、ついに着れる日が来たんだ！

「舞、吊革持つてろよ。お前すぐに転ぶんだから」

「失礼ね。私、もう高校生よ。そんなしょっちゅう転ぶもんですか」

「もう」って言っても、今日からだけど。

「よく言うよ。ちょっと前までしょっちゅう転んで、パンツ丸出しで泣いてたくせに」

「い、いつの話してるのよ！そんなの小学生の時でしょ!？」

「小学6年生でもまだパンツ出してただろ。ワカメちゃん」
「・・・」

もう！これだから、お兄ちゃんは!!

そんなことじゃ、彼女に振られちゃうわよ!!

その時、カーブにさしかかった電車が大きく揺れた。

キャッ！

なんて、かわいい声を上げる間もなく・・・

私は床にひっくり返った。

しかもパンツ丸出し。

頭の上から、お兄ちゃんの盛大なため息が振ってきた・・・

第1部 第2話

私は慌ててスカートでパンツを隠した。

は、恥ずかしすぎる！

目で、お兄ちゃんに「助けてよ！」と訴えたけど・・・
赤の他人を決め込んでる。

お父さんとお母さんでさえ、助けてくれる様子はない。

酷い・・・

私は仕方なく一人で立ち上がった。

ああ・・・周りの人がみんな笑ってる・・・

私は吊革を持ち、周りから顔が見えないように下を向いた。

と、私のまん前に座っている男の人と目が合った。

その人は「なんだ、こいつ」と言わんばかりの呆れ顔。

しかも・・・その人は、真新しい朝日ヶ丘の制服を着ていた。

理事長や校長先生、それに来賓の挨拶。

それから新入生代表の挨拶と、在校生代表の歓迎の挨拶。

そして新1年生の各クラスの担任の紹介。

その全てを、私は聞いていなかった。

本当なら、担任の紹介なんて、絶対聞き逃したくないところだけど、今はそれどころじゃない。

なぜなら。

私は斜め前の男子生徒を見てため息をついた。

座ってるからわからないけど、身長は170半ばだろうか。まあ悪くない見た目だけど、どちらかと言えば子供っぽい。

って、見た目なんてどうでもいいんだって。

なんでこいつが・・・電車の中で私のパンツを見た痴漢男が、こんなに近くに座ってるんだ。

(痴漢男にも言い分はあるだろうけど)

入学式の席順はクラスごとだから、おそらく私と痴漢男は同じクラスなのだろう。

・・・最悪だ。

私がつめ息をつきまくっている間に、入学式は終わってしまった。

「舞！6クラスもあるのに、同じクラスなんてラッキーだね！」

入学式が行われた体育館を出ると、早速同じ中学の牧野茜が、まきのあかね私に声をかけてきた。

「ほんとねー。中学も3年間同じクラスだったのに・・・凄い腐れ縁」

「運命、って言うてよね」

茜は明るく笑った。

茜は、165センチと私よりちょっと小さい。

でも、中学時代にバトミントン部で鍛えていたせいか、がっしりしていて、

性格も男勝りだ。

そんなところが私と合うのか、なんとなく一緒にいることが多い。

「ラッキーと言えば！うちの担任、凄いイケメンだね！超ラッキーー！」

「担任？そうだったけ？」

「ちよつと。いくら舞でも、あれはかつこいいと認めざるを得ないでしょ？」

私の「イケメンの基準」はお兄ちゃんだ。

お兄ちゃんよりかつこければイケメンだし、かつこよくなければ、イケメンではない。

ちなみに芸能人とか以外で「この人、イケメンだ」と思ったことは一度もない。

それを知っている茜が、私でも認めざるを得ないと言っのだから、本当にイケメンなのかもしれない。

どちらにしろ見てなかったからなんとも言えないけど。

「・・・見てなかった？信じられない。あんなに体育館中がざわついたのに」

「そんなにかつこよかったの？」

「うん！ほら、教室行こう！HRで見れるよ！」

「あー。その前にオシッコ行ってくる」

「・・・なんてやる気ないのよ、舞」

薄情なことに茜は私を放置して、一人で教室へ行ってしまった。よっぽど「先生」とやらを早く近くで見たいらしい。

「先生」は逃げないし、担任なんだから、嫌でも毎日見ることになるのに。

やれやれ。

でも、あの茜が男の人のことであんなに盛り上がるのは珍しい。こりゃ、一度拝んでおいても損はないだろう。

それにもちろん、私だってイケメンは嫌いじゃない。

ちょっと小走りに廊下を進もうとした時。

カッーン・・

何かがブレザーの内ポケットから落ちた。

・・・携帯!!

慌てて戻り、携帯を取ろうとかがみ込んだけど、それより早く、私の向かいから手が伸びてきて、私の携帯を掴んだ。

「これ、お前のか？」

その人は私の携帯と私を見比べた。

制服を着ていない、ってことは、教師かな？
え？ちよつと待って。

まずい!!

私は焦った。

朝日ヶ丘は携帯が禁止されている。

うわ!

初日から怒られてる場合じゃない!!

だけどその先生は怒るでもなく、私の携帯ストラップをじーっと見た。

「なんだ、これ？随分年季の入ったストラップだな。まりもっこり？」

「ち、違います！まりもキティちゃんです！」

「えー？どう見ても、まりもっこりだろ」

「違いますって！」

なんで私がそんなもの付けるのよ！

確かに、薄汚れちゃって、顔も緑になってるけど！

それに、まりもを頭にかぶってるから・・・うん・・・まりもっこりに見えないこともない。

でも、もっこりしてないもん！（当たり前だ）

「ま、いや。お前、何組？名前は？」

うつ。

でもまさか、逃げる訳にもいかない。

「1年2組の・・・三浦舞です」

「お。俺のクラスか」

「え？」

その時、私は初めてその先生の顔をまともに見た。

・・・なるほど。

イケメンだ。

これは確かに認めざるを得ない。

「出身中学は？」

「え？あ、蕨^{わいじ}中学です」

「随分遠くだな。小学校は？」

しよ、小学校？

「えっと、野見山^{のみやま}小学校です。あ、でも、小学校3年までは蒼井^{あおい}小学校でした」

「ふーん。あ、そろそろ教室入らないとな。はい、携帯」

「え？」

「気をつけるよ。最近の携帯は繊細だから落としたりしたらバグるぞ」

先生は本気で心配しながら言ってる。

「・・・あの。怒らないんですか？」

「怒る？なんで？」

「だって、この学校、携帯禁止ですよね？」

先生は目を丸くした。

「え？そうなのか？初めて知ったぞ」

第1部 第3話

面白そうな先生だとは思っていたけど、

「面白そう」どころの騒ぎじゃなかった。

「入学式でも紹介されたけど、この1年2組の担任の本城真弥ほんじょうしんやだ。担当は数学。よろしくな」

信じられないくらいのイケメンっぷりに、教室中の視線が教壇の上に集まる。

そしてその視線は、先生の次の言葉を期待している。

けど。

「んじゃ、さっさとやること終わらせよーぜ。まずは始業式の日だけど、」

「えー!?!」

教室中からブーイングが起こった。

「なんだ？なんか文句あるか？」

「もうちょっと、自己紹介とかないのかよ!?!」

教室の真ん中辺りの男子が叫んだ。

みんなも同意するように「だよな、だよな」と頷く。

ちなみに私も同感だ。

「あのな。こっちは毎年毎年この時期に嫌になるほど自己紹介して

るんだ。いい加減飽きた」

・・・私達は初めてなんですけど。

「お前らのパパとママも体育館や校庭で待ってるだろ？無駄なことは省略しようぜ」

無駄なのか。

それでもまだ納得しない私達に、先生は呆れながら言った。

「んじゃ、俺はプリントとか配ってるから、聞きたいことあれば質問しろ。」

あ、でも、『彼女いるんですか？』は無しな。いるって答えても、いないって答えても後々面倒だから」

「・・・」

他の人ならいざ知らず、本城先生なら本当に「面倒」なことに巻き込まれるのだろう。

心底うんざりしている表情だ。

先生は早速プリント類を配り始めた。

教室の中はちよつと戸惑った空気が流れたけど、

どこにでも、そんなことをもろともしない奴っていうのはいるもので。

「歳は？」

「29」

嘘！？見えない！25くらいだと思ってた！

「趣味は？」

「バスケ。昔は昼休みに生徒とバスケしてたけど、もう体力勝負は卒業した。」

三十路のオジサンには、昼休みは職員室で茶をすするって言う大事な仕事があるから、誘うなよ」

「・・・。好きな食べ物は何？」

「梅昆布茶」

それ、食べ物ってゆーの？

「嫌いな食べ物は何？」

「バレンタインのチョコ」

「バレンタインのチョコ？じゃあ、普通のチョコは？」

「好き」

「・・・。何フェチ？」

「髪フェチ。俺に好かれたかったら間違っても染めたりパーマかけたりすんな」

・・・今日、黒に戻そう。

「好きな女のタイプは何？」

「受けを狙ってなくても素で面白い女」

「嫌いな女のタイプは何？」

「・・・」

それまでポンポン軽く答えてた先生の口が止まる。

そして、両目をちよつと細めて、嫌そうに言った。

「焼肉の最後一切れを俺が食ったからって、本気で怒る女」

・・・どうやら先生は、

素で面白くて髪が綺麗な彼女と、焼肉のことで喧嘩中らしい。

早く仲直りしてください。

「よし。これで配らなきゃいけないもんは、全部配ったな。じゃ、解散」

「ええ？なんか説明とかは！？」

「プリント読めばわかるだろ」

それはそうだけど。

みんながまた、「ええー！？」とか言つてると、

先生は「仕方ないなー」とか言いながら、でもちゃんと説明し始めた。

ほんと、変な先生だ。

でも面白い。

この1年は退屈せずに済みそうだ。

けど。

私は廊下側の席に目を移した。

そこにはあの痴漢男が。

あーあ、やっぱり同じクラスだ。

しかも、みんなが先生の言葉に反応良く笑ったり怒ったりしてるの

に、

痴漢男だけは、無表情に先生を眺めてるだけ。

感じ悪いったらない。

「まだちよつと時間があるな。よし、学級委員だけ決めとくか」

先生はそう言うと、教室中を見回し始めた。

え？そんな適当に決めちゃうの？

そりゃ、誰がいい？って聞かれても、どの生徒がどんな人かわかんないけど。

・・・あれ。なんか嫌な予感がするのは気のせい？

「じゃあ、女子は、」

・・・。。。

「三浦〓まりもつこり〓舞」

なんだ、そのミドルネーム。

私は口をパクパクしたけど、クラス中が大爆笑と拍手に包まれ、辞退できる雰囲気ではない。

「文句、ないよな？」

先生が、上から目線で私を見た。

つく。携帯なんてみんな持つてるでしょ!?

なんで私だけ、弱み握られてる感じになってるの!?

しかも先生、さっきまで携帯が校則違反だって知らなかったくせに
!!

ただ何にも言えない私を尻目に、先生は「男子はー」とやりだした。

はぁ・・・仕方ない。

「森田。お前、やれ」

「はぁ!?!」

不満全開の声が廊下側の席からした。

・・・おや?おやおや・・・?

「なんで、俺が!」

「うるさい。はい、これで学級委員はけってーい。じゃ、今度こそ解散!」

という訳で、本当にHRはお開きとなった。

つて、ちょっと待って!!!!!!

「森田」って・・・痴漢男じゃない!!!!!!

向こうも、私に気づいたらしく、こっちを見てげんなりしている。

ちょっと！げんなりしたいのはこっちの方よ！

ああ、もう……！！本当に最悪……！！！！

第1部 第4話

「舞！先生、どこだ！？」

「はへ〜？」

「・・・どうした。何かあったのか？」

私は校庭に出るなり、

私を待っていたお兄ちゃんに捕まった。

「ちょっと、ね。痴漢やらまりもっこりやら学級委員やら・・・」

「は？」

「ううん。なんでもない」

私は首を振った。

これからの1年を思うと、一気に憂鬱になる。

「それより、先生はどこだよ？」

「先生つて、本城先生？」

「ああ。俺の3年の時の担任なんだ。ちょっと挨拶したい」

「え？ええ！？そうなの！？」

お兄ちゃんもここに通っていたのだから、もちろんそんなことがあってもおかしくない。

けど実際に、お兄ちゃんの担任をしていた先生が、私の担任をするなんて、なんか不思議だ。

しかも、お兄ちゃんが卒業して、もう丸5年が過ぎている。

本城先生つて5年前もあんな感じだったんだろうか。

「面白い先生だろ？」
「・・・うん」

あんな感じだったらしい。

ちょうどその時、本城先生が下足室にひょつこりと現れた。
お兄ちゃんは私より早く先生を見つけ、「先生！」と校庭から叫んだ。

「ん？・・・あれ、お前・・・三浦か？」

先生は驚いた表情で、すぐに校庭に出てきた。

「はい。お久しぶりです」

「うわ、ほんとに三浦かよ？すげー久しぶりだな！」

「5年ぶりですね」

「そっか。もうそんなに経つか」

驚いた。

こんなニコニコしてるお兄ちゃんは珍しい。

お兄ちゃんは、よっぽど親しい人間にしか「素」を見せない。

お兄ちゃんの「素」って言うのは、つまり、私に対するような態度のことだ。

それ以外の人には、「100%優等生くん」モード。

ニコニコと愛想が良く、言葉遣いも丁寧であからさまに優しい。

ちょうど、今のお兄ちゃんがソレだ。

でも・・・なんかちょっといつもの「優等生くん」モードと違う。
先生に会えて本当に嬉しくてニコニコしてるみたい。

ほんと、こんなことは珍しい。

「って、あれ？じゃあ、こいつってお前の妹？」

先生は、お兄ちゃんの隣にいる私に気づき、更に驚いた顔になった。

「はい。よろしくお願いします」

「おお、すげー偶然だな！」

先生は私を見て笑った。

思わずドキッとしてしまうような笑顔だ。

「改めてよろしくな。まりもっこり」

・・・。

口がよければ、もっと素敵なのに。

そしてお兄ちゃんも目ざとく（耳ざとく？）それを聞き逃さない。

「まりもっこり？おい、舞、なんだそれ」

「うっ。えっと、ちょっとね」

「お前・・・朝のパンツ丸出しじゃ、まだ飽き足らないのか」

今度は先生が聞き逃さなかった。

「パンツ？なんだ、そりゃ。よし、お前は今日から、三浦〃まりも

っこりパンツ」舞、だ」

やーめてー」。

なんかそれ、凄くヤダ。

もはや心頭滅却を決め込んだ私を無視して、二人の会話は続く。

「三浦。お前、医学部だろ？もう医者になったのか？」

「まだまだですよ。来年国家試験です」

「そっかー。頑張れよ。医者になったら、安く診てくれよな」

「いいですよ。俺、産婦人科希望なんで、先生が結婚したら奥さんを見てあげます」

「・・・嫌だな、それは」

先生が本当に嫌そうに言う。

「そっいや、まだ飯島と付き合ってるのか？」

「はあ。まあ、一応」

「ちよっと待った！」

私は急に復活した。

「先生！今の『一応』は、『一応付き合ってる』じゃなくって『一応付き合ってもらってる』ですから！」

「あはは、そっか。三浦は相変わらず飯島の尻に敷かれてるんだな」

「・・・俺、尻に敷かれてました？」

今度はお兄ちゃんが本当に嫌そうな顔になる。

ふふん、ざまあみろ、よ。

「あ、そうか。先生はヒナちゃんのことも知ってるんですね？」

「ヒナちゃん？」

「飯島雛子いじまひなこさんです。お兄ちゃんの彼女」

先生は、「ああ」と言って笑った。

お兄ちゃんの彼女のヒナちゃんは、お兄ちゃんと高校の同級生だった。

当然、先生も知っているだろう。

ヒナちゃんは、もちろんお兄ちゃんと同じ23歳だけど、
どこからどう見ても私より年下にしか見えない。
だから昔から私は、彼女を「ヒナちゃん」と呼んでいる。

「あの三浦と飯島が23歳かー。俺も歳を取るわけだ」

「でも先生、全然変わってませんね」

「そうか？ すっかりオジサンだぞ。飯島は元気か？」

「元気は元気ですけど、仕事が大変みたいです」

「仕事？ 何やってるんだ？」

「保育園の先生です」

「・・・園児にまぎれそうだな」

「だから大変みたいです。よく園児にいじめられて泣いてます」

「・・・」

第1部 第5話

「じゃあ、舞ちゃんって本城先生のクラスなんだ!？」

「・・・うん」

「偶然だね!懐かしいな!。先生、元気そうだった？」

「・・・うん」

「面白い先生でしょ？」

「・・・うん」

「私、初めて本城先生を見たとき、『三浦君よりかつこいい人っているんだ!』ってビックリしちゃった」

「・・・うん」

「舞ちゃん？」

キラキラした純粋な目で、ヒナちゃんが私を覗き込む。

ダメ。やめて。

そんな顔して、私を見ないで。

「・・・ヒナちゃん」

「何？」

「・・・笑っていい？」

「・・・」

堪えきれず、私は噴出した。

「あははははは!!!ヒナちゃん、何、その顔!？」

「こ、これは・・・」

真っ赤になってほっぺをさするヒナちゃん。

そこには、赤いマジックペンで書かれたグルグルが。

「昨日、保育園のお昼寝の時間に、思わず子供達と一緒に寝ちゃって・・・」

で、起きたら、こうなってたの・・・」

どうやら、園児達のイタズラらしい。

ご丁寧に両方の頬に書かれている。

忍者ハットリ君を思い出さずにはいられない。

「どうして、洗わないの？」

「もちろん洗ったのよ。でも、これ、油性マジックで」
「・・・」

しばらくハットリ君を拝めそうだ。

それにしても、違和感がない。

まるで元々こういう顔だったみたい。

今日は、ヒナちゃんがお兄ちゃんに会いにうちにやってきたんだけど、

（この顔でよく電車に乗れたものだ）

お兄ちゃんが出掛けていてまだ帰っていない。

と、いうわけで、私の部屋で一緒にお菓子タイムだ。

「本城先生以外の、1年の先生って誰がいるの？」

「まだ、全員は覚えてないけど・・・あ、英語の杉崎先生って女の先生は、かなり面白いよ」

「杉崎先生？知らないなあ」

「本城先生いわく、熱血空回り系、だって。まさにそんな感じ。」

本城先生の方が後輩なのに、いつつも杉崎先生をいじめて遊んでる」

ヒナちゃんがポンッと手を打った。

「わかった！それ、坂本先生だ！坂本菜緒先生！結婚して苗字が変わったのかな？」

「あ、そうそう。杉崎菜緒って名前だった」

「うわあ、坂本先生、結婚したんだ！」

「子供もいるらしいよ」

「・・・子供？坂本先生に？どっちが子供か分かんなくなりそうね」

杉崎先生も、ヒナちゃんだけには言われたくないだろう。

「本城先生は？結婚したとは聞かないんだけど・・・」

「まだみたい。でも、素で面白くって焼肉好きで髪の毛の綺麗な彼女はいるらしいよ」

「あはは、何、その人。あ、でも、私の同級生にもそんな子いたなあ」

どんな子よ、それ。

私は、楽しそうに笑いながらプリンを頼張るヒナちゃんを見た。

今でこそ、こうやって本当の姉妹のように話しているけど、

初めてヒナちゃんと会った時は、こんなじゃなかった。

私は子供の頃、いわゆる「ブラコン」だった。

幼稚園の頃から、

当時すでに中学生のお兄ちゃんと一緒にいる色んな女の子に、よく

嫉妬していた。

そんな女の子達に負けたくなくて、子供ながらにお洒落したりして頑張っていたくらいだ。

だから、お兄ちゃんが本気らしいヒナちゃんを初めて家に連れてきた時、

小学校2年の私は滅茶苦茶不機嫌になり、あり得ないくらい失礼な態度を取った。

でも、ヒナちゃんはへこたれなかった。

なんとか私と打ち解けようと、毎日のようにうちに遊びに来た。お兄ちゃんがいなくても、遊びに来た。

そこには「彼氏の妹に好かれよう」という打算はなく、純粹に「三浦舞」という人間と仲良くなりたいたい、という気持ちだけがあった。

そして、私の方にもある転機が訪れた。

3年生になった時、同じクラスの男の子に初恋をしたのだ。

もちろん恋と言っても、小学生らしいかわいい片思いではあったけど、

私にとっては、お兄ちゃんを卒業する大きなきっかけとなった。

そんなこともあり、私とヒナちゃんは打ち解けることができた。

「でも、本城先生が結婚しちゃったら、なんか寂しいなー」

「ブラコンの舞ちゃんにそんなこと言わせるなんて、さすが本城先生ね」

「・・・私、もうブラコンじゃないもん」

「え？じゅうぶんブラコンだと思うけど」

げっ。そうなの？私ってまだブラコン？

「だって、舞ちゃん凄く綺麗なのに、彼氏いたことないでしょ？」

凄く綺麗かどうかはともかく、彼氏なんて生まれてこのかた、いたことがない。

「だって、お兄ちゃんよりかっこいい人がいないから」

私が悪いんじゃないもん。

「ほら。やっぱりブラコンだ」

ヒナちゃんが可笑しそうに笑う。

ちよつと待つて。

じゃあこのままだと私、お兄ちゃんよりかっこいい人が現れないと、彼氏ができないってこと！？

仮に、そんな人が現れたとしても、性格的に合うかわかんないし、相手が私のことを好きになるとも限らないし・・・。

あーあ。

本城先生が同級生だったらなー。
言うことないのに！

「お。ヒナ、もう来てたのか」

突然ノックも無しに、お兄ちゃんが部屋に入ってきた。

「三浦君。おかえりなさい」

「お兄ちゃん！ノックしてっていつも言ってるでしょ！」

私が着替えてそうな時間帯はノックしてくれるけど、

それ以外は私の部屋のドアなんて、あつてないようなもんだ。

「もう！私に一生彼氏ができなかったら、お兄ちゃんのせいだからね！」

「は？何、訳わかんないこと言ってる。ヒナ、ちょっと待ってるよ、着替えてくるから・・・」

お兄ちゃんはそう言いながら、部屋を出ようとして振り返った。

「ヒナ。どうしたんだ、その顔」

やっと気づいたか。

第1部 第6話

「まりもっこり」

「・・・」

「パンツ」

「・・・」

「三浦ジュニア」

「・・・はい」

この辺で妥協しておかないと、また凄い名前をつけられそうだ。
本城先生は満足気に頷いた。

「それと、森田。後で職員室に來い。学級委員の仕事、第一弾だ」

という訳で、お昼休み。

私は痴漢男と2人で職員室へ向かった。

「ちょっと待てよ。なんだよその、痴漢男って」

森田が不満そうな声を出す。

「私のパンツ、見たでしょ」

「はあ！？あんなもん見せられて、被害者はこっちだ！この、逆セク女！」

「な、なんですって！」

私はキッと森田を睨み上げた。

でも森田は全く気に留めず、ため息をつく。

「あーあ、何が悲しくてこんな女と廊下を歩かないといけねーんだ」
「それはこっちのセリフよ！」

だけど行き先も目的も同じだ。

私達は、険悪ムード満載で職員室の本城先生の席へ辿り着いた。
そしたらそこで、更に険悪度を増す仕事が待っていた。

「これ。配達してきて」
「は？」

森田が、本城先生に差し出された大きな封筒を受け取り、表を見る。

そこには、

『綾瀬学園高等部 宇喜多^{うきた} 先生様』

と言う宛名だけが書かれていた。
どうやらこの封筒を、その「宇喜多 先生様」に届けろって事らしい。

・・・あれ。

「郵送しろよ！」
「郵送してください！」

さすがに私と森田は同時に叫んだ。

って、森田。

先生になんて口の聞き方を。

「残念ながら、それはできないんだ。超重要書類で、郵送は禁じられている。

絶対に手渡しじゃなきゃ、どこのマフィアに奪われるかわかんねーからな」

「・・・なんだそれ」

森田はため息をついた。

すでに諦めモードだ。

でも気持ちは分かる。

この数週間、本城先生を見ていてわかったけど、

先生は本当に口が上手い。

なんだかんだ言って、結局先生の言われた通りにしてしまう。

しかも、「嫌々」ではなく、何故か先生の言われた通りにしたくなってしまうのだ。

現に、2組に茶髪は一人もない。

私ももう真っ黒だ。

唯一、先生に不遜な態度を取っているのがこの森田。
まあ髪は黒いけど。

「冗談はさておき」

やっぱり冗談だったんですね。

「この中に入っている書類の質問に、すぐに答えてもらいたいんだ。だから今日中に持つて行って、答えも聞いてきてくれ」

「えー？」

「答えは、明日俺に教えてくれればいい」

「・・・もしかしてラブレターとか？」

「当たらずとも遠からず、ってとこだな」

「自分で持つていけよ！」

「自分で持つていってください！」

また私と森田がハモる。

「お。なんだお前ら、仲良しこよしだな。じゃ、頼んだぞ」

何を言ってもサラツとかわす本城先生に疲れたのか、森田は早々に退散して行った。

でも、私はそのまま残った。

「なんだ、三浦。なんか用か？」

「はい・・・ちよつとご相談が」

「相談？」

「私、もしかしたら一生彼氏ができないかもしれません。」

お兄ちゃんよりかっこいい人じゃないとダメみたいなんです」

「ほー。でもお前の兄貴は意外と腹黒だぞ」

お。よく分かつてるじゃん。

「森田くらいで我慢しとけよ」

「死んでやです。先生、弟とかいませんか？よかったら紹介してくだ

さい」

私は半分冗談・半分本気で言ってみた。
けど！

「弟？ああ、いるぞ」

「え？何歳ですか？」

「19歳」

うわ！ナイス！

「大学生ですか！？」

「ああ。H大の2年だ」

「H大！？」

あのレベルの高い！？

「弁護士になるために、司法試験目指して頑張ってるらしい」

先生の弟。

つまり、イケメン。

H大の学生。

弁護士の卵。

なんたる高スペック！！！！！！

「紹介してください！」

「あいつはダメだ。未婚の父だからな」

・・・なんだそれは。

女に子供を押し付けられて、逃げられたとか？

せつかくのいい物件を目の前にしながら、私はがっかりして教室へ戻った。

「舞。先生の用事って何だったの？」

茜が早速私に詰め寄る。

なんだ、なんだ？

茜、本気で先生に参っちゃったの？

「別に。ただのパシリ。森田と一緒に、なんかをどっかに届けろ、だつて」

「・・・何、その『なんかをどっかに』って。大丈夫？」

「森田が分かつてるでしょ」

てゆうか、別に森田と2人で行かなくてもいいんじゃない？
森田一人で行けばいいじゃん。

「・・・ねえ、私が代わってあげようか？」

「へ？」

見ると、茜が真っ赤だ。

・・・え？ええ？

「ちょっと、茜・・・。森田はダメよ。あんな痴漢」

「痴漢、って、転んだ舞のパンツ見ちゃっただけでしょ」

「そうだけど！やめといた方が絶対いいって！」

「どうして？」

「どうして、って・・・」

そう言われても困るけど。

だってなんか、感じ悪いんだもん！

「舞は相変わらずね。そんなんじゃないってまでも彼氏できないよ？」

「大きなお世話よ。私だって、好きな人の1人や2人、」

「いるの？」

「・・・いない」

茜はため息をついた。

「全く。恋とかしたことないの？」

「恋ぐらいしたことあるわよ！」

「そうなの？中学の時、そんなの一言も言わなかったじゃない。いつも『お兄ちゃん、お兄ちゃん』ばかりで」

やっぱり私はブラコンらしい。

「小学校の時よ。あまゝい初恋してたんだから！」

「小学校、ね。その初恋はどうなったの？」

「どうも。小学校4年に上がる時に、私が転校しちゃってそれっきり」

別に遠くに引っ越した訳じゃない。

ちやうど一軒家を買ったから、マンションから引っ越しただけなん

だけど、

小学校の学区は変わってしまったのだ。

「今頃どこで何してるのかなあ、雲雀乃谷君・・・」

「・・・は？なんて？」

「ヒ・バ・リ・ノ・ダ・ニ・君」

「ひ、雲雀乃谷ひばりのだに・・・変わった名前ね」

「まーね」

そういえば、

小学校はみんな仲が良くて、下の名前で呼び合ってたけど、雲雀乃谷君だけは苗字のインパクトが強すぎて、みんなから苗字で呼ばれていたっけ。

私は携帯を取り出して、茜に見せた。

「ほら、これ」

「・・・まりもっこり？」

「だから違うつて。まりもキティちゃん。雲雀乃谷君にもらったの」

「へー。両思いだったんだ」

「ううん。なんか、知り合いのお姉さんに貰ったらいいんだけど、自分はいらなからってくれただけ」

でも、凄く嬉しかった。

だから今もこうして携帯につけて持ち歩いてる。

気持ちを伝えることもなく終わった、私の初恋。

あんな甘い気持ちになれる日は、また訪れるのかな・・・？

第1部 第7話

別に、いいじゃない。

要は封筒を宇喜多先生つて人に届けて、

なんかよくわかんないけど、「答え」を聞いてきたらいいんでしょう？

森田1人で行けばいいじゃない。

まあ、妥協して、私1人で行ってもいい。

もしくは、森田と茜の2人で行くとか。

「はあ」

「なんだよ？」

「・・・別に」

何故か私は森田と2人、

朝日ヶ丘から電車で30分ほどの綾瀬学園へ向かっていた。

茜は結局、今日はどうしても外せない用事があるらしい。

私は私で、初めての学級委員の仕事(?)なのに、森田1人に押し付けることに気が引けた。

「私1人で行くって言ったじゃない。どうしてついてくるのよ」

「ついて来てる訳じゃねーよ。でも、俺だけ行かなかったって先生に知られたら、また何言われるか」

それはそうかもしれない。

それに結果的にはこれで正解だった。

だって、私、綾瀬学園なんてどこにあるのか知らない。

だけど森田は知っているようで、結局私が「ついて来てる」状態だ。

「ちょっと。お尻触らないでよね」

「触ってねーだろ！」

「これだから痴漢は・・・」

「痴漢じゃない！」

そんなこんなで辿り着いた綾瀬学園は、

まだできて数年なのであろう、新しくて綺麗な小中高一貫の私立校。制服は深い緑のブレザーにチェックのスカート。

うーん。

私の着ている制服が、ますますシンプルに見える。

てゆーか、森田。

どうしてこんな学校の場所を知ってるんだろう。

ここに彼女でもいるんだろうか。

それはさておき、意外なことに、

森田は校内のどこを歩いても女子生徒から大注目の的だった。

何？森田はそんなかつこいいの？

それとも、ここのとほ違う制服のオスは誰でも注目を集めるの？

どちらにしろ、森田は激しく居心地が悪そうだ。

「くそっ・・・」

「ほら、見られてるわよ。手でも振ってあげなさいよ」
「アホか」

愛想のない奴ね。

サルでももうちょっと愛想いいわよ？

そして、もう一つ意外なことが。

「あら。わざわざこれをお届けに来てくれたの？」

「・・・はい」

「ありがとう。ちょっと待ってね」

封筒に「宇喜多先生様」なんて書いてあるから、

なんとなく年の行った先生かと思っていたら、なんと若い女の先生だった。

せいぜい、30半ばってところかな。

宇喜多先生は、封筒の中からA4サイズの紙と、小さなメモ用紙を取り出し、

メモ用紙から目を通し始めた。

物凄い美人って訳ではないけど、どこことなく目を引く女の人だ、と思った。

まず印象的なのは、綺麗な黒髪。

そして、ちょっとツンとした顔立ち。

でも話してみると、優しそうな人だ。

宇喜多先生はメモを読んで、少し目を見開くと、今度は森田と私を交互に見て・・・またメモに視線を戻し、一人で笑いを堪えている。

・・・なんだろう。

なんか、1人芝居してるみたいで面白いな。

その時。

閃いた。

こついうのを、「点と点が線で繋がる」と言うのだろう。

本城先生の彼女は、素で面白くて髪 of 綺麗な人らしい。

そして、この封筒の中身を「ラブレター」に「当たらずとも遠からず」と言っていた。

まさか！

「あの！」

「なに？」

「宇喜多先生って、焼肉好きですか！？」

「へ？」

宇喜多先生がポカンとする。

森田は「何言ってたんだ！」と言う非難の視線を私に送ってきたけど、無視した。

「えっ、まあ・・・好き、だけど？」

やっぱり!!

宇喜多先生は首をかしげながら、今度はA4の紙に目を向ける。
そして・・・

その左手の薬指にはシルバーの指輪が。

え？結婚してる、の？

ちよつと待つて。待つてよ・・・
考える、舞。

先生の彼女は、この宇喜多先生らしい。
でも、宇喜多先生は結婚している。

しかも「宇喜多」って苗字だ。

ってことは、宇喜多先生の旦那さんは、本城先生じゃない。

つまり、それって・・・

浮気！？

「おい」

「・・・」

「おい！」

「・・・え？」

呆然としていると、森田に脇をつつかれ、私は我に返った。

「何、ボーっとしてるんだよ」

森田が小声で私を責める。

「いや、その浮気が焼肉で、その、あの」

意味不明なことを言う私を見て、森田は眉をひそめ、宇喜多先生は明るく笑った。

「2人とも、わざわざありがとう。あなた達の先生には『行きます』って答えておいて」

「行きます」！？

それって、もしかして、密会の約束！？

ああ・・・まさかまさか・・・でも、それ以外考えられない！

本城せんせい！！

第1部 第8話

「あああ」

「三浦。お前さっきから変だぞ。いつも変だけど」

「ほつといてよ！これが黙っていられますか！」

「はあ？」

綾瀬学園から駅までの帰り道。

森田はもはや私を変態扱いだ。

痴漢の分際で生意気な。

「ねえ、さっきの宇喜多先生と本城先生って、」

「あ。三浦。お前、焼肉好きなのか？」

「え？まあ、人並みには」

「じゃあ、あそこで夕飯食ってかね？」

「はあ？」

と思ったけど、森田が指さす先の「焼肉バイキング ぎゅうぎゅう
牧場」という看板と、

辺りに立ち込める美味しそうな匂いに私のお腹は勢いよく合奏を始めた。

「・・・色気なさすぎ」

「うるさい！森田の前でなんて、もったいなくて色気なんか出せない！」

「まー、初めっからないもんは出せないわな」

「・・・」

「どうする？あそこ、バイキングの割りに美味しいぞ」

やっぱりこの辺りのことをよく知っている。
本当に綾瀬学園に彼女がいるのかもしれない。
これは、茜に報告しとく必要があるわ。

それはともかく。

「・・・いくら？」

「2500円」

高！でも、焼肉のバイキングにしては安いかな？

「高校生以下は学割があって1650円」

「も、もう一声」

「フリードリンク付き」

「ううう」

焼肉・・・

フリードリンク・・・

だけど1650円はやっぱり高い。

でも、お腹はすいてる・・・

が、私以上に森田はお腹がすいてたらしい。

「しゃーないなあ。じゃあ、俺が2000円、三浦が1300円。
これどうだ」

「のった！」

という訳で、何故だか私は森田と一緒に焼肉をつつくことになった。

「三浦！それまだ網に乗せんな！」

「何言ってるのよ！？焼肉屋に来てるんだから、カルビ食べずにど
うするのよ！」

「まずは牛タンだろ！」

「信じられない！牛タンって、牛の舌なのよ！？そんな気持ち悪い
もの食べられない！」

「はあ！？牛タンは焼肉の王様だぞ！」

「カルビが王様に決まってるでしょー！！」

まあ、この2人で焼肉なんて、最初っから無理があった。

でも、ここは譲れない。

私は森田の隙を見て、網にカルビを置いた。

「うわ、信じらんねー・・・くそ、こっちは俺の陣地だかな。入
ってくんないよ！」

森田が網の中心に見えない線を引く。

「そっちこそ！私の陣地を侵さないでよ！」

「あーあ。せつかくのタンにカルビの匂いがつく・・・」

「男のくせに女々しいわね。・・・あれ。私、今、何食べた？なん
か美味しいものが口の中に・・・」

「それ！俺の陣地のタンだ！取るなよ！」

「何よ、バイキングなんだからいいでしょ。タンって意外と美味し
いね」

「・・・」

森田はため息をつきながら、私に透明の液体が入った入れ物を差し出した。

「タンはレモン汁で食うんだよ。タレで食うな、もったいない」
「へ」

言われたとおり、今度はレモン汁で頂いてみる。
おお、さっぱりしてて美味しい！

「な。うまいだろ？」
「うん！このコリコリした感触がたまらない！」
「んじゃ、もう一皿頼もうぜ」

こうして私達は打ち解けて、和気あいあいと焼肉を楽しんだ・・・
って訳はなく、
とにかく制限時間内に食べまくろうと、この後ほとんど会話なく食事に集中した。
ようやく2人が「うまい！」とか「これ頼んで！」とか意外の言葉を口にしたのは、制限時間残り15分。
デザートゾーンに突入した頃だった。

「はあ。このバニラアイス、最高」
「・・・まだ食うのか。凄い食欲だな」
「森田ほどは食べてないでしょ」
「当たり前だろ。お前一応女なんだし。それでも女子の平均を遥かに上回った量、食ってんぞ」

そうでしたっけ？

そう言う森田も、二つ目のアイスを美味しそうに頬張る。
こんな機嫌のいい森田は初めてだ。

いや、森田は学校でも友達という時はこんな感じなんだけど、私という時は、なんかいつつも怒ってる気がする（私が悪い、という意見は置いて）。

そうそう。そう言えば、本城先生という時の森田も不機嫌だ。
あんなに人気がある先生なのに、森田は苦手らしい。

「そっぴや、先生がお前のこと『三浦ジュニア』とか言ってたけど、あれなんのことだ？」

「ああ。私のお兄ちゃんも昔、朝日ヶ丘に通ってた、先生の生徒だったの」

「え？そっぴなのか？何年前の話？」

「えーっと。お兄ちゃんが高3の時の担任ってたから・・・

5、6年前、かな」

「5、6年前・・・」

森田が腕組みをして何やら考え込んでいる。

「森田。あんた、そーゆーの似合わないよ？どっちかってゆーと、猿山のサル・・・」

「うるさい」

第1部 第9話

「くせつ」

「・・・」

「どこのおヤジだ、お前」

「・・・」

「あーくさっ！ってゆーか、いい匂いだな。あー腹減る」

どっちなのよ。

せっかく口の悪い森田から開放(?) されて家に帰ってきたら、もつと口の悪い男が待ち構えていた。

「高1のくせに、焼肉デートかよ」

「うるさいな！。お兄ちゃんだってヒナちゃんと焼肉くらい行くでしょ」

「今はな。でも高1の時なんて、質素なもんだったぞ。立ち食い蕎麦とか」

質素過ぎないか。

「あんな指輪をプレゼントしたくせに？」

「！」

たちまちお兄ちゃんの顔が赤くなる。
ぷぷぷ。

あー、いい気味！

ヒナちゃんが「サイズが合わないから、指にはつけられないんだ」と言って、

ネックレスにしている首につけている指輪。

高1のホワイトデーに、お兄ちゃんからもらったそうさ。

アノお兄ちゃんが女の子に指輪をプレゼントするっただけでも、私は天地がひっくり返るほど驚いたけど、その指輪自体にも驚いた。

小鳥がデザインされているその指輪には、小さいけど本物のヒナちゃんの誕生石が埋め込まれていて、決して安くはなさそうさ。

ヒナちゃんは、私に言われるまで気づかなかったみたいだけど。

『どうしよう・・・こんな高い物、もらえないよ』

『もらえない、ってもう何年も前にもらったんでしょ？』

『う、うん・・・』

『しかも小鳥のデザインなんて。お兄ちゃんてばキザなことするね』

『え？どうして？小鳥がキザなの？』

『どうしてって。この小鳥、雛子、って意味でしょ？』

『・・・え？』

『ヒナちゃん・・・気づいてなかったの？』

『・・・』

この時ばかりは、お兄ちゃんに同情したものだ。

「と、とにかく！遅くなるなら電話くらい入れろよ」

「お母さんには、夕ご飯いらないうってメールしたもん」

「俺にもしろ」

「なんで？」

「なんで、って・・・」

お兄ちゃんがムツとする。

なんでそんな機嫌悪いのよ。

茜と遅くまで遊んでたって、全然何も言わないし、

「迎えに来て」って言ったら、ブツブツ言いながらも車で来てくれるのに。

「・・・本当にデートだったのかよ？」

「はい？」

男と女で焼肉を食べることをデートと呼ぶなら答えは「YES」だ。

まあ、男ってゆーより、オスに近いけど。

「まーね」

「・・・」

「私だって、デートくらいするわよ。もう高1なんだから」

私はわざと肩をそびやかして言ってやった。
が。

「・・・」

お兄ちゃんはそのまま何も言わずに部屋に入って行ってしまった。

おや？

おやおや？

これってもしかして、ヤキモチ？

お兄ちゃん、私に彼氏ができたと思って妬いてるの？

・・・。

「うへへへ」

「舞。何１人でうへうへ言ってるの。早くお風呂に入りなさい。
あと、制服！ファブリーズしときなさいよ！」

どこのCMの母親だ。

「先生！昨日、ちゃんと森田とふ・た・りで、綾瀬学園に行ってきた！」

「そ、そうか。ありがとう・・・」

森田との焼肉「デート」の翌日。

ちゃんと私も行ったんだぞ！と言うことをアピールしつつ、

私は本城先生に、宇喜多先生からの「答え」を伝えに行った。

ちなみに森田は、「昼休みはバスケだ」とほざいて体育館へ行ってしまった。

「先生。本当にバスケしないんですか？」

「おー。誘いに来てくれたけどな。俺はコレだ」

そう言つて、先生が持ち上げたのは湯飲み。
中からは梅昆布茶のいい香りが。
本当に茶をすすってるらしい。

「・・・まだ20代でしょ、先生」

「梅昆布茶つてうまいんだぞ」

知ってます。

「それに20代つつつても、22歳と29歳じゃ、赤ん坊と大人ほど差がある」

ないない。

「バスケはバリバリ22歳の新米教師に押し付けた」

「・・・」

なるほど。

そう言えば、森田達は1組の新米男性教師・葉山先生と一緒にバスケをやっている。

本城先生はたぶん、あえて葉山先生にそうするように言つたんだ。
そしたら、葉山先生はすぐに生徒と打ち解けられる。

現に、森田なんて、担任の本城先生より葉山先生と一緒にいる方が
楽しそうだ。

「いけない。肝心の用を忘れるとこでした。宇喜多先生は、『行きます』だそうです」

「お。そっか。それはよかった。ありがとな、助かったよ」

「・・・先生」

私は声を低くした。

「宇喜多先生って、もしかして、本城先生の・・・」

私がそう言つと、本城先生がサツと赤くなつた。

おおお。

先生でもこんな顔するんだ！

「お、お前・・・それ・・・宇喜多先生に聞いたのか？」

「女の勘です」

「・・・なんてはた迷惑な勘してやがるんだ。絶対誰にも言つなよ」

「えー。じゃあ口止め料に焼肉おごってください」

「昨日、食つたろ」

え？どうして知ってるの？

「もうちよつとちゃんと、制服をファブリーズしろ」

「・・・・・・・・・・」

第1部 第10話

学食のカレーを一口食べて、私は顔をしかめた。

「まずい？私、ここのカレー好きだけど」

茜が不思議そうに訊ねる。

ちなみに茜はピラフだ。

「別にまずくないけど」

私はそう言っで、水を飲んだ。

まずい訳じゃない。

けど、辛過ぎる。

カレーだから当たり前かもしれないけど、私はもうちょっとマイルドな方がいい。

もったいないから、もちろん食べるけど。

その時、急に2組の男子が数人、私達の近くの席にお盆を持ってやってきた。

その中には森田もいる。

「なあ、今度の日曜暇？」

そう声をかけてきたのは、粘着系男子・天野。

私と茜、それに一緒にご飯を食べてる畑中世羅・荻野友香が顔を見合わせた。

「図書館で中間テストの勉強するんだけど、一緒にしない？で、その後、夕飯食おうぜ」

・・・。

なんて色気のないお誘いだろう。

素っ気無くパスしたいところだけど、

私以外の3人の女子は何故か乗り気だ。

あ、そっか。

茜は森田がいるから、行きたいんだ？

どうやら世羅と友香もそうらしい。

意外と人気あるんだなあ。

「・・・サルのくせに・・・」

「三浦。なんか言ったか？」

「別に」

なんて耳がいいんだ、森田。

私は行かないから茜達だけ行つてきなよ、と言おうと思ったら、

私の隣に座った森田が、突然私のカレーの中に半熟卵を投入してきた。

どうやら、自分のハンバーグの上にあった卵らしい。

「何するのよ」

「俺、卵嫌いだからやる」

そして小声で付け加えた。

「その代わり、日曜参加しろ」
「は？なんで？」

森田が天野の方をチラッと見る。

「・・・嫌よ。私、粘着系って趣味じゃない」

ちなみにサルも趣味じゃない。

「しかも、『その代わり』って、何よ。森田は自分の嫌いな卵を私に押し付けただけでしょ」

「そう言いつつ、もうカレーと混ぜて食ってるだろ。交渉成立だ」

むむむ。

人の弱味につけこんで！卑怯者！

私はムスっとしながら、いい感じにマイルドになったカレーを頼張った。

って、森田。

なんで嫌いな卵が乗ってる「半熟卵つきハンバーグ」を敢えて注文したのよ。

よくわからない。

さすがサル。

「森田君たちとデートできるなんて超ラッキー！」

「ふーん」

「ねえ、これとこれ、どっちがいいと思う？」

「どっちでもいいーんじゃない？」

「・・・舞。もうちょっと真剣に考えてよ」

その日の放課後、

「日曜に来ていく服を買う！」と意味不明なやる気を出してる茜に引っ張られて、

私は原宿へやってきた。

だいたい、原宿って好きじゃないのよね。

人多いし、車多いし。

どのお店もギョウギョウしてて、とにかく疲れる。

「・・・舞ってほんと、冷めてるよね」

「本城先生も日曜来てくれるなら頑張るけどね。あ、弟でもいいけど」

「は？」

「なんでもない。あ。あの吊るしてるワンピースは？」

ハイウエストのかわいらしいデザインのワンピース。

素足でもストッキングでもいいけそうだ。

でも、茜はため息をついた。

「私があんなかわいいの、着れる訳ないじゃん。舞じゃあるまいし。いいよね、舞は。なんでも似合うから」

「・・・」

うーん。

確かに、太ってはないけど、がっちり系の茜にはちょっと似合わないかもしれない。

私も、あんなの着たことないけど。

好きな男の子とデートする時って、ああいつの着るものなのかな？
そしたら、男の子も喜ぶのかな？

「ねえ。私は着れないけど、舞は似合うと思うよ？着てみたら？」

着れないと言いつつ、かわいいものには目のない茜。
私で着せ替え人形してやろうと、目が輝いてる。

でもまあ、私も嫌いじゃない。
着てみるか。

「・・・どう？」

「お！いいんじゃない？はい、お買い上げー」

「おいおい」

だけど、鏡の中の自分は思ってたよりいけてる。
黙っていれば、どこぞのお嬢様だ。

「黙っていれば、ね」

「うるさいな、茜。って、これいくら？」

「6千円」

「6千円かー」

彼氏がいればお買い上げな値段だ。
でも、今の私には必要ない。

「必要な時が来るかもしれないから、買っときなよ。
てゆうか、その服が無駄にならないように、さっさと脱ブラコンし
て彼氏見つけなさい」
「・・・」

やっぱり私ってブラコン？

・・・違うもん！

「見てなさい！近々この服を着て、彼氏とデートしてやるんだから
！」

「日曜に着たらいいじゃん」

「サルやら粘着やらしいのに、もったいない！」

「サル？粘着？」

「森田と天野」

「・・・あのね」

茜が眉をひそめる。

でも、すぐに「あ！」と声を上げた。

「森田君、サルなんかじゃないよ！すごい、頭いいんだから！入試、
一番だったって噂だよ？」

「一番？そんな訳ないじゃん」

朝日ヶ丘高校では、入試で一番だった生徒が入学式で新入生代表の
挨拶をするのが通例だ。

誰が挨拶したのか忘れたけど（ってゆうか、聞いてなかったけど）、
入学式の間じゅう、森田は一度も席を立たなかった。
間違いない。だって私、ずっと森田を睨んでたもん。

「なんでも、学校関係者に血縁者がいるんだって。それで敢えて選ばれなかったらしいよ」

なるほど。それなら納得がいく。

でも、「森田」なんて教師、いないけどなあ？

「教師とは限らないんじゃない？ 案外、理事長、とか」

「理事長ってなんて名前だっけ？」

「さあ？」

うーん。

思い出せない。「森田」じゃなかったと思うけど。

それは置いとくとして、確かに森田は頭がいい。

特に数学なんて、多分学年で一番できるんじゃないかな。

「ま、サルって結構頭いいから。人間の中にも、サルよりバカな奴いるし」

「あんたはどうなのよ、舞。今度の中間、早速赤点なんて取らないですよ？ 中1の時みたいに」

なんの話でしたっけ???

第1部 第11話

日曜日。

私は、この前茜と一緒に買ったワンピースではなく、Ｔシャツとジーパンという、

なんとも色気無い格好で家を出た。

行き先も図書館と色気がないんだからピッタリだ。

お陰でお兄ちゃんも前みたいに妬いたりしてくれなかったけど。

ちえつ。

だけど、待ち合わせ場所である図書館の入り口で、さすがの私も後悔した。

「みんな、気合入れすぎ。勉強しにきたんでしょ」
「そうだけどー」

私服はパンツスタイルが多い茜も、今日はスカート。

世羅と友香は元々かわいい格好が好きだけど、

今日はヘアスタイルまで揺る巻きでビシッと決まってる。

でも決まってるのは女子だけじゃない。

普段はブレザー姿の男子も私服になると急に大人びて見える。

天野もお洒落なカッターシャツにサマーブーツで、黙っていれば中々カッコいい。

が。

私と同じく気合入れなさ過ぎな男子が約一名。
違った、約一匹。

「上野動物園はあつちよ、森田」

「三浦も一緒に行こーぜ。お前はチンパンジーのオリだ」
「・・・」

でも、さすがに私も森田も中間テスト1週間前にのんびりと動物園のオリに入っているわけにはいかない。
仕方なくみんなでゾロゾロと図書館に入り、席につく。

ところが、私は一番端の壁際で大人しく勉強しようと思ったのに、
天野が隙なく私の隣に座ろうとした。

茜！助けて！こっち来て！

そう心の中で叫んだけど、
薄情者の茜は、なんか男子達としゃべってるし。

ふと目をやると、天野の後ろに森田が見えた。

「サル！じゃなかった、森田！ちよつと数学教えなさいよ！！」

「・・・それが人にモノを頼む態度かよ・・・」

森田は呆れながら、でもなんとか天野より先に私の隣に座ってくれた。

「チンパンジーなんか横にいたら、勉強できねー」

「そうね。図書館なんて、サルとチンパンジーの来る所じゃないわよね」

「・・・」

「はい。これとこれ。教えて。あんた、数学得意でしょ？」

「これとこれ、って。昨日、授業で先生が説明してただろ」

「寝てたもん」

だって、本城先生の数学じゃなかったから。

本城先生は数学？の担当だけど、昨日は数学Aで他の先生だったのだ。

「誰の授業でも聞いとけよ」

「過去は振り返らない！ほら、教えて」

「へえへえ」

私と森田は、教科書の上に頭を寄せた。

森田が小声で説明を始める。

テスト範囲だから、私も一応マジメに聞いてみる。

「ふんふん、なるほど。そーゆーことか」

「わかったか？」

「なんとなく」

「・・・」

いや。正直、よく分かった。

森田って本当に頭いいのね。

それに教え方が上手。

なんか、本城先生の教え方と似ている。

その時、また私の頭の中で、点と点が線で繋がった。
もしかして、学校にいる森田の血縁者って本城先生！？

・・・違うか。顔が似てなさすぎる。
片やモデル、片やサルだもんね。

それから私はしばらく黙って勉強してたけど、また分からないところが出てきて、
無意識にシャーペンでノートをトントントンと叩いた。

・・・いけない！

慌てて叩くのをやめる。

これ、分からない問題がある時の私の癖らしい。
お兄ちゃんに勉強を見てもらっている時に指摘された。

うるさい場所ならいいけど、静かなところだったら響くからやめろ
って言われたんだっけ。

そう思っで、私がシャーペンを持ち直した時、森田がまた小声で声をかけてきた。

「なんだよ。またわかんねーのかよ」

「・・・うん。英語の長文だけ」

「どれ？」

森田は私の手から英語の教科書を取り上げると、しばらく真剣にそ

れを読み、

長文の途中にスラッシュを入れた。

「ここ。このwhichは関係代名詞で、主語みたくなってる」

「おー・・・関係代名詞ってなんだっけ？」

「・・・お前、明日から居残れ。勉強だ」

なんでやねん。

そう突っ込む前に私のお腹が鳴った。

「・・・」

「休憩時間だって」

「・・・」

「ほら、3時ピッタリ」

「・・・すごい腹時計だな」

携帯の時計を見ながら森田がため息をついた。

「ねえ、そう言えば、森田って朝日ヶ丘に親戚か何かがいるの？」

図書館を出たところの自販機でジュースを買って、
私と森田は図書館の入り口の階段に座った。

「え？いないけど」

「じゃあアレはガセネタだったんだ」

「アレ？」

「うん。森田が入試トップだったのに、血縁者が学校にいるから入学式で新入生代表やらなかったって噂」

「あー。半分本当」

「半分？」

森田がジュースを一口飲んだ。

「俺の父さん、昔、朝日ヶ丘で教師やってたんだ。今は別の学校に勤めてるけど」

「え？そうなんだ」

「うん。で、無難につてことで、俺は外された」

「ふーん、そっか。残念だったね」

「え？」

「代表やってたら、自分の縄張りをもっとしっかり持てたのに。サルには死活問題でしょ」

「あのな」

森田は苦笑いしながら立ち上がり、ジュースの缶をポンとゴミ箱に放り投げた。

「さ、勉強の続きやろうぜ。天野が夕飯は焼肉行きたいって言うたし」

「・・・」

またファブファブしまくらなきやいけなさそうだ。

第1部 第12話

昼休み。

私は不機嫌な顔で体育館の壁にもたれていた。

隣には、目をキラキラさせている、茜と世羅と友香と・・・その他女子多数。

バスケをやつてる男子を見学に来たのだ。
もちろん私はただの付き添い。

「はあ。やっぱり森田君、かつこいい・・・」

「どこが？」

「舞はすぐにお兄さんと比べるから。でも森田君、舞のお兄さんと比べても見劣りしないと思うけど？」

「するに決まつてるでしょ！」

全く！あばたまえくぼ、とは、よく言つたもんだ！

「前、図書館に行った時の私服姿もかつこよかったし」

「ただのＴシャツとジーパンじゃん」

「シンプルな格好だからこそ、素材の良さが引き立つのよ」

ほー。

ほーほけきよ。

「舞も同じような格好だったじゃない。ま、舞も素材はいいけどね。ちよつと色気なさすぎ」

「森田も色気なんかないでしょ！」

「えー？あるわよ。かわいらしい顔してるけど、結構男っぽいところあるし」

「サルっぽい、の間違いでしょ」

色気ないと言われ続けて早16年。

いい加減諦めの境地だけど、

サルでオスの森田より色気ないと言われると、さすがに若干ショックだ。

私は、ちょうどボールを取った森田を見た。

他の男子と比べれば確にかっこいいかもしれないけど、お兄ちゃんには到底かなわない。

もちろん、本城先生にはもったかなわない。

そうそう、「先生」と言えば。

今度は、森田の少し前で森田をガードしている葉山先生を見ている。葉山先生は、私達と一緒にこの4月に朝日ヶ丘に来た大学出たての新米先生。

本城先生ぐらい、とはさすがに行かないにしても、かっこいい先生だ。

男子じゃなくて、葉山先生を見学に来ている女子も多い。

かつては本城先生もあんな風にバスケットをやっていたらしいけど、その当時はもっとギャラリーが多かったことだろう。

「ねえ、茜。森田じゃなくて、葉山先生にしといたら？」

すると、何故か茜がニヤニヤして私の方を見た。

「何？森田君には手を出さないで欲しい？」

「なんでそーなるの。てゆーか、どうして面白そうな顔してるの」「舞と森田君って、お似合いだと思うから」

そりゃ、サルとチンパンジーですから。
って、なんでだ。

「茜は嫌じゃないの？」

「うーん。羨ましいいな、とは思っけど。森田君と私じゃどう考えても釣り合わないもん。」

舞と森田君だったら、見た目にもお似合いだし、2人が話してるの聞いとると面白いし」

「・・・」

もちろん、私にも森田にもそんなつもりはない。
だけど、なんか悲しくなってきた。

茜はいつも、「私なんて」ってスタンスだ。

自分にコンプレックスがあるらしく、恋愛にも消極的。

私に「色気がない！」とか言うけど、茜は色気を隠そうとしている。

だから、男子のことでこんなに騒いでる茜は珍しい。

そのくせ、私に「森田君とお似合い」とか言う。

本当は自分が「お似合い」になりたいけど、なれないと諦めてるんだ。

「茜。森田に告ってみたら？」

「そんな！できるわけないでしょ！私なんか絶対振られるから、今のままの方がいい」

「ほら、また『私なんか』」

「え？」

「やってみないとわかんないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「なんなら私が代わりに伝えてあげようか？」

「や、やめて！絶対ダメ！」

茜が私の両肩を掴んでガクガクと揺さぶる。

「あうあうあう・・・」

「お願い！お節介なことしないでよ！」

「わ、わかったから・・・あうあう・・・やめて」

「言うなら自分で言うから！」

「はあ。はいはい。頑張つてよね」

「う、うん」

茜はもじもじと赤くなって俯いた。

茜、結構かわいいと思うんだけどなあ。

どうしてもっと自信持たないんだろう。

そう言えば、ヒナちゃんも昔そうだったらしい。

自分に自信がなくて、お兄ちゃんが自分のことを好きだなんて信じられなかったと言う。

それは今もそうかな。よく、「私になんか三浦君はもったいない」って言ってるもん。

もう7年以上も付き合ってるのに。

そりゃ、お兄ちゃんはモテる。

彼女がいるとかいないとか関係なく、モテる。ヒナちゃんが不安になるのも仕方ないだろう。

でも、ヒナちゃんと付き合いだしてから、お兄ちゃんは一度だって、ヒナちゃん以外の女の人を見てないのに。

それでも不安だなんて、恋って厄介だ。

私は携帯を取り出し、ストラップ代わりにしているキーホルダーを見た。

まりもっこり・・・じゃなくて、まりもキティちゃんだ。

もし私が転校していなければ、私は雲雀乃谷君と本物の恋をしてたのかな？

恋って厄介だ。

でも、憧れる。

恋に恋してしまう。

私にもいつか、本物の恋が訪れるのかな？

第1部 第13話

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

ち、沈黙が痛い。

私とお父さんとお母さんは、顔を見合わせた。
そして、目と唇だけで音の無い会話をする。

『翔のやつ、どうしたんだ？』

『ヒナちゃんと喧嘩したみたいなの』

『喧嘩？』

お兄ちゃんとヒナちゃんの喧嘩なんて日常茶飯事だ。

原因の99%は、ヒナちゃんが、男心、というか、お兄ちゃん心の
分からないことをしでかし、

お兄ちゃんを怒らせることにある。

だから、喧嘩ってゆーか、お兄ちゃんが一方的に怒ってることがほとん
ど。

私からすれば、「そんなことで怒っちゃダメよ」と思っていることが半分、
「ヒナちゃん、ちょっとそれは酷いよ・・・」と思うことが半分。

で、すぐに仲直りする。

だけど今回はなんかちょっとお兄ちゃんの様子が違う。

怒ってるっていうより、元気がない。

「ごちそうさま」

お兄ちゃんはさっさと夕ご飯を食べ終わると、自分の部屋へ戻って行った。

まあ、放っておいても大丈夫だろうけど、

お兄ちゃんとヒナちゃんが具体的にどんなことでどんな喧嘩をするのかちよつと興味がある。

最近「恋」って物に、少し関心が出てきたからかな。

私は思い切って、お兄ちゃんを追いかけてみた。

「お兄ちゃん。入るよ」

「・・・なんだよ」

お兄ちゃんはベッドの上で仰向けになり、大学の教科書を読んでいた。

来年国家試験だから、のんびりしてられないのだろう。

「ヒナちゃんと喧嘩したの？どうして？」

「お前、もうちよつとデリカシーのある聞き方できないのかよ」

「ヒナ様とどういう喧嘩をなさったんですの？」

「・・・もったいない」

お兄ちゃんのため息をつきながらベッドから起き上がった。

「・・・」

「何よ。教えてくれるために起き上がったんじゃないの？さっさと吐いて」

「お前な」

それからまたしばらく、お兄ちゃんは口を開きたがらなかったけど、聞くまで立ち去りそうにない私に諦めて、ようやく話し始めた。

「ヒナがさ」

「うん」

「浮気してるかも」

「ほえ？」

「・・・なんだ、その反応」

浮気？ヒナちゃんが？

「まさかー！お兄ちゃんが、なら、分かるけど」

「おい」

「なんでそう思っちゃったの？」

「・・・前、たまたまヒナの保育園の近くを通りかかったから、ちよつと顔見ていこうと思ったんだ。」

そしたらヒナが、保育園の近くで男と親しげに話してた」

「それだけ？」

そんなの浮気って言うのかな？

お兄ちゃんがヤキモチ妬いてるだけなんじゃない？

「ヒナが、男と話すのが苦手なのは、お前も知ってるだろ。せいぜい俺と、俺の友達くらいだ」

「それはまあそうだけど」

「それ以外で、ヒナが男とあんなに仲良くしてるの、見たことない・
・」

「・・・お、お兄ちゃんが落ち込んでる・・・」

信じられない。

こんなお兄ちゃん、初めてだ。

よっぽどその男の人とヒナちゃんが親しげだったんだろう。

「一度じゃないんだ」

「え？」

「今日も、保育園の近くのカフェで2人で楽しそうに話してた」

確かに、ヒナちゃんがお兄ちゃん以外の男の人と2人でカフェに入るなんてありえない。

しかも「楽しそうに」なんて。

「それで、ヒナちゃんはなんて言ってるの？」

「・・・聞いてない」

「へ？聞いてない？」

「ああ。・・・なんか怖くて声かけられなかった」

それだけ言っと、お兄ちゃんは大きく息を吐いて肩を落とした。

おおーい！お兄ちゃん！しっかりしてくれ！！

翌日。

私はお兄ちゃんの首に縄をつけて、ヒナちゃんの勤める「どんぐり保育園」まで引つ張ってきた。

「・・・これ、取れ。恥ずかしい」

「本物の縄じゃないだけ、ありがたいと思いなさい」

お兄ちゃんの首には、私の制服のネクタイ。
その端を私が握っている。

「本当に『首に縄をつける』奴、初めて見たぞ。しかもそれが自分の妹なんて情けない」

「情けないのはお兄ちゃんの方でしょ！ちゃんとヒナちゃんと話しなさいよ！」

「なんで舞が怒るんだ」

当たり前でしょ！

もし、お兄ちゃんとヒナちゃんが別れたりしたら！

別れたりしたら・・・

困るのよ、私は・・・

私が今なんとかブラコンにならずに済んでるのは、お兄ちゃんの彼女がヒナちゃんだからだ。

ヒナちゃんは、私が持っていない何かを持っている。

私がどんなに女を磨いても、手に入れない何かを。

だから、諦められる。

でも、もしお兄ちゃんがヒナちゃんと別れて、他の女の人と付き合いようなことになったら、

私は女を磨いて、お兄ちゃんの彼女以上の女になろうとするだろう。

それじゃ、本当にいつまでたっても私は恋できない。

お兄ちゃんは、ヒナちゃんと幸せになってくれなきゃダメなのよ！

私は祈るような思いで、保育園の入り口を見つめた。
お兄ちゃんも「もう見たくない」という表情だけど、
やっぱり気になるのか、保育園から目を離せない。

その時、保育園のドアが開き、ヒナちゃんが1人で出てきた。
もう帰宅時間なのか、鞆を手に駅へ向かう。

私とお兄ちゃんは、なんとなくヒナちゃんに声をかけられなくて、
少し離れてついて行った。

ヒナちゃんの足取りが軽く見えるのは、私の気のせいじゃなさそう
だ。

そして・・・

駅の改札口で、1人の男の人がヒナちゃんを待っていた。

その男の人を見たお兄ちゃんが、一瞬息を飲む。
どうやら彼が「ヒナちゃんの浮気相手」らしい。

思ってたよりずっと若い。

お兄ちゃんとヒナちゃんより、年下だろう。

もしかしたら、まだ10代かもしれない。

そして、お兄ちゃんが心配するのも頷ける。

その男の人は・・・私から見てもじゅうぶんに「イケメン」だったのだ。

第1部 第14話

怪しいことは百も承知だけど、2人の後を追わずにはいられない。

私とお兄ちゃんは適当な切符を買って、

ヒナちゃん達が乗った電車の隅っこに乗り込んだ。
降りる時に清算しなきゃ。

ヒナちゃんと男の人は、確かに親しげではあるけど、ラブラブって
雰囲気でもない。

ただの友達とも取れる。

だけど、お兄ちゃんが言ってた通り、そもそもヒナちゃんが男の人
と親しいってこと自体が珍しい。

私知ってる範囲だと、ヒナちゃんが気兼ねなく話せる男の人は、
お兄ちゃんと、お兄ちゃんの友達の溝口さんって人と遠藤さんって
人くらいだ。

ヒナちゃんは、大学でもパッチワーク同好会という一般男性とはお
よそ縁の無い同好会に入っていたし、

勤め先は保育園と、これまた男の人と知り合う機会が激しく少ない
職場だ。

そんなヒナちゃんが、楽しそうに男の人と2人で電車に乗っている。

このシチュエーションだけでも、お兄ちゃんが心配するのは仕方な
いことかもしれない。

私は男の人を観察した。

第一印象は「若いイケメン」だったけど、よくよく見てみると、平均は遥かに超えているものの、顔は「お兄ちゃん」と比べてもかっこいい！」と言う程でもない。

だけど、全体的に凄く雰囲気の良い人だ。

それで私もパツと見て「イケメンだ」と思った。

そういえば、「イケメン」って「イケてるメンズ」の略だよね？
じゃあ、顔がイケてるだけじゃなくて、中身もイケてないと「イケメン」とは言えない。

そう言う意味では、この男の人は、凄いイケメンだ。

若いのに堂々としてて、でも威張ってるって感じじゃない。
落ち着いているって感じた。

穏やかな笑顔を絶やさず、ヒナちゃんを退屈させていない。
細かい気配りも忘れず、ヒナちゃんを先に電車に乗せてあげたり、席を探してあげたり。

フェミニストと言ってしまえばそれまでだけど、この男の人は、女性に対してだけではなく、男性に対しても同じようにするんじゃないかな。

こんな男の人なら・・・ヒナちゃんの心も揺れるかもしれない。

お兄ちゃんもそれを感じているのか、硬い表情のまま2人を見ていた。

お兄ちゃんは、顔はとにかくかっこいいし、人当たりもいい。

ただ、周りにちやほやされ、過大な期待をされて来たせいか、
「ワガママなお坊ちゃま」感は否めない。

お兄ちゃんが本性を見せる相手は限られているけど、ヒナちゃんは
当然そんなお兄ちゃんを知っている。

あの男の人とお兄ちゃん。

ヒナちゃんにとって、どちらが魅力的なんだろう。

2人は、思いのほか早く、3つ先の駅で降りた。
私とお兄ちゃんも慌てて降りる。

駅を出ると、男の人はヒナちゃんを促すようにして歩き出した。
ヒナちゃんはキョロキョロしている。
どうやら初めて来る所らしい。

私もキョロキョロしてみる。

そこはいわゆる高級住宅街で、遊んだりデートしたりするような場
所じゃない。

こんなところに何の用なんだろう？

5分ほど歩いたところで、男の人は足を止めた。
目の前には、どこからどう見ても高級マンションとしか言えないよ
うなマンションがそびえ立っている。

絶対賃貸じゃないよね、これ。

男の人はポケットから鍵を取り出すと、マンションのオートロックを開けた。

そしてヒナちゃんに笑いかけ・・・
2人はその中へ消えて行つた。

私とお兄ちゃんは迷つた。

このまま帰るか、ヒナちゃんが出てくるのを待つか。

でも。

もしかしたらヒナちゃんは出てこないかもしれない。
朝まで。

そう思ったけど、さすがにお兄ちゃんにそうは言えなかった。

「・・・待つ？」

「・・・そうだな・・・少しだけ待って、出てこなかったら帰ろう」
「うん」

マンションから少し離れた、でもマンションの入り口が見える場所
で、

私とお兄ちゃんとはとにかく待つた。

早く出てきて欲しい、
そう思っているからか、時間がたつのがやたらと早い。

あつと言つ間に、10分、20分、30分・・・
そして1時間が過ぎた。

時計も7時を回り、7月とは言え暗くなってきた。

もう、帰ろう？

私がそう言い掛けた時、マンションの入り口が開き、ヒナちゃんと男の人が出てきた。

男の人が「送るよ」とでも言ったのか、ヒナちゃんはしきりに恐縮して首を振っている。
でもその表情は笑顔だ。

その時、私の隣で影がスツと動いた。
ダメ！と言つ間もなく、それは真っ直ぐ進んでいく。

「ヒナ」

「・・・三浦君？」

お兄ちゃんはあるという間にヒナちゃんの近くまで辿り着いた。
私もすぐ後に続いたけど、驚いたヒナちゃんの目にはお兄ちゃんしか映っていない。

「こんなとこで何してるの？」

「ヒナこそ、何してるんだ」

「え？」

お兄ちゃんの厳しい表情にヒナちゃんが動揺する。
私も、この気まずい雰囲気で口を開けない。

お兄ちゃんは、今度はヒナちゃんの横に立つ男の人を睨んだ。

「あんだ、誰？ヒナの何？」

「え？俺？」

いきなり自分に敵意を向けられ、男の人が驚く。
でも、頭の回転が速いのか、すぐにこの状況を理解したようで、
お兄ちゃんに笑顔を向けた。

「別に。何でもありませんよ、今は」

「今は？」

お兄ちゃんが、男の人の言葉に敏感に反応する。

「はい。今はまだ。でも、9月からお世話になろうと思ってます」
「・・・9月？」

意味が分からず、私もお兄ちゃんも戸惑う。

ヒナちゃんも、どうしてお兄ちゃんがここにいるのか、何に怒っているのか分からないように、
ただ呆然としている。

唯一全てを分かっているらしい男の人が、ヒナちゃんに言った。

「雛子先生。この人、先生の彼氏ですか？なんか、俺達のこと誤解してるみたいですね」

「え？誤解？」

「大方、俺と雛子先生が浮気してるとでも思っ
て、ここまでついてきたんでしょ。」

電車の中で、なんか視線を感じるなとは思
ってたけど、あなた達だっただけです
ね」

「・・・バレてたのか。
鋭い人だ。」

それに、この声、この笑顔。
なんか誰かと似てる気がする。
だけど、思い出せない。

って、そんなことはどうでもいい。

雛子先生？誤解？

ええ？

まだ混乱している私とお兄ちゃんより早く、
ヒナちゃんが真っ赤になっ
た。

「そ、そんな！三浦君、間宮^{まみや}さんは・・・この方は、
9月からうちの保育園にお子さんを預けようか
って考えてくれてる保護者さんよ？」

「・・・は？」

保護者？

それって、つまり・・・

「今日は、家庭訪問だったの。今、おうち
の中で奥様とお子さんとお話してきたのよ」

「・・・え、でも・・・こないだ、カフェで・・・」

「あれは！保育園の説明をしてただけ！保育園の中だと、子供達が冷やかしてきて、

落ち着いてお話できなかったから」

「・・・」

な、なーんだ・・・

そうよね、ヒナちゃんが浮気なんて。

よく考えれば、そんなこと、あるわけないのに。

私とお兄ちゃんはすっかり脱力し、ヒナちゃんは困惑している。

1人笑っているのは、「間宮さん」と呼ばれた男の人だけだ。

「あはは。雛子先生の彼氏さん、よっぽど雛子先生のことが好きなんですネ。

駅までお送りしようと思ったけど必要なさそうだから、俺はここで失礼します」

「あ、はい！今日はありがとうございました！それに、あの・・・申し訳ありませんでした」

ヒナちゃんが深々と頭を下げると、間宮さんは笑顔で「それじゃ」と言っ

て、マンションの中へ戻って行った。

第1部 第15話

「もー！人騒がせなんだから、お兄ちゃんは！」
「・・・悪かったよ」

間宮さんのマンションから駅までの道。
私は散々お兄ちゃんをなじった。

「ヒナちゃんが浮気なんてするはずないのに！」
「舞だって、もしかと思ってただろ」
「思っていないしー」
「嘘つけ」

相変わらず口の悪いお兄ちゃんだけど、
その顔中には安堵の色が広がっている。

私も心底安心した。

よかった。

2人が別れたりしたらどうしようかと思った。

「ビックリさせてごめんね、ヒナちゃん」

私は少し後ろを1人で歩くヒナちゃんを振り返った。
ヒナちゃんは唇をキュッと閉じ、地面を見つめたまま歩いている。

「ヒナちゃん？」
「ヒナ？」

私とお兄ちゃんが同時に呼ぶと、ヒナちゃんはゆっくりと顔を上げた。

その目は真っ直ぐにお兄ちゃんの目を見ている。

「ひどいよ、三浦君」

「ヒナ・・・」

「どうして私のこと信じてくれないの？しかも、間宮さんのおうちまでついてきて。」

保育園の先生の関係者がこんなことしたら、保育園の信用まで落ちちゃうよ」

「・・・」

「間宮さんは、うちの保育園で何年もアルバイトしている女の子の紹介で、」

うちの保育園にお子さんを預けようかって検討してくれてるの。」

もし今回のことで、間宮さんがお子さんをうちに預けるのをやめたりしたら、

そのアルバイトの女の子にも申し訳ないよ」

ヒナちゃんは目にいっぱい涙を溜めたままそれを拭おうともせず、足早に駅の中へと入って行ってしまった。

それから数日間。

お兄ちゃんの落ち込みようはひどかった。

かろうじて大学には通っていたけど、ろくに食事もせず、ぼーっとしている。

ヒナちゃんと連絡を取っている様子もない。

私も責任を感じていた。

もし、私が最初にもっと強く「絶対浮気なんてありえない」と言っていたら、

もし、私が強引にお兄ちゃんを保育園に連れて行ったりしていなければ、

こんなことにならなかったかもしれない。

そう思うと、胸が痛んだ。

「お兄ちゃん」

「ん？ 舞か」

お兄ちゃんの部屋に入ると、お兄ちゃんが机から顔を上げた。

「勉強してたの？」

「ああ」

でも、あんまりはかどってる感じじゃない。
当然だよな。

「・・・ねえ、ヒナちゃんと別れたりしないよね？」

「ええ？」

お兄ちゃんが自嘲気味に笑う。

「別れるも何も。ヒナが許してくれないことにはどうしようもない」
「そうだけど・・・」

いつもなら、お兄ちゃんが怒ってヒナちゃんが謝るってパターンなのに、今回は逆だから、お互いどうしていいのか分からないのかもしれない。

「謝れば、許してくれるよ」

「そういう問題じゃないんだ」

「え？」

お兄ちゃんはため息をついた。

「俺、ヒナは俺と一緒にいられさえすれば、幸せなんだって思った」

「・・・そうでしょ」

「そうじゃない」

もう一つため息をつく。

「もしヒナが仕事で遠くに行かなきゃいけなくなったらヒナは行きたくないに決まってる、
そう思ってた。俺も行かせないだろうし。」

でも、ヒナは自分でやりたい仕事見つけて、ちゃんとそれをやってるんだ。

ただ俺と一緒にいることだけがヒナの幸せじゃない。

それなのに俺・・・ヒナのこと、ちゃんと考えてなかった」

「お兄ちゃん・・・」

「ヒナは、俺が勉強や試験で会えなくても、てゆーか、飲み会で会えなくても、文句も言わないんだ。」

でも俺は、ヒナに『友達と会うから、今日は会えない』って言われ

ただけでもすぐ不機嫌になった。

こんなんじゃダメだよな・・・愛想尽かされても仕方ない」

慰めてあげたかったけど、何も言えなかった。

だって、お兄ちゃんの言ってることはもっともだ。

反論のしようがない。

私がヒナちゃんの立場なら、やっぱりお兄ちゃんに愛想を尽かして
ただろう。

だから口先だけでも「そんなことないよ」とは言えなかった。

でも、私はまだ望みは捨てていない。

ヒナちゃんは私とは違う。

私がついていない何かを持っている。

だから、もしかしたら、まだお兄ちゃんのことを好きかも知れない。

私は、藁にもすがる思いで家を飛び出し、

ヒナちゃんの保育園へ向かった。

第1部 第16話

「ヒナちゃん！」

「あれ？舞ちゃん？どうしたの？」

仕事を終え、保育園から出てきたヒナちゃんに私は駆け寄った。

「ヒナちゃん・・・あの、お兄ちゃんのことなんだけど・・・」

私がそう言つと、ヒナちゃんは眉をひそめた。

「三浦君、元気？電話も出てくれないし、メールしても返事してくれなから心配してたんだ」

「え。そうなの？」

お兄ちゃんてば。

「あのね、お兄ちゃん、なんか色々考えてるみたいだから・・・
お兄ちゃんから連絡くるまで、そつととしてあげてほしいんだ・・・」

「そうなんだ。わかった。待ってるね」

そう言つて微笑むヒナちゃんは、いつものヒナちゃんだ。
やっぱりヒナちゃんはすごい。

私はホッとしすぎて涙が出そうになった。

「ヒナちゃん・・・この前はごめんね」

「どうして舞ちゃんが謝るの？それに、悪いのは私よ。三浦君は、

心配してくれてただけなのに、

あんなこと言っちゃって・・・三浦君、怒ってるよね？」

「怒ってるわけないでしょ！てゆうーか、ヒナちゃんは悪くないし！ただ・・・」

私はお兄ちゃんの代わりのつもりで言った。

「お兄ちゃんは、ヒナちゃんのこと大好きなんだよ。だから、ちょっとしたことでも、

すぐにヤキモチ妬いちゃうんだよ。あの間宮さんって人とは、特に親しげだったし・・・」

ヒナちゃんはクスクスと笑った。

「そつか。心配かけてごめんね。間宮さんはね、話やすいし、色々大変みたいだから、

なんか応援してあげなくなっちゃって。それで仲が良さそうに見えるたのね」

「大変って？」

「奥さんのご両親に認めてもらえなくて、まだ結婚してないんだって。

あ、『間宮』さんっていう名前も、奥さんの方の名前なの。

お子さんが奥さんの方の籍に入ってるから、子供関係のことは『間宮』で通してるんだって。

間宮さんは・・・あ、こないだの人ね。本名はなんだったかな？まあいいや、とにかく、間宮さんは、

自分自身はまだ大学生で働いてないし、年上の奥さんの稼ぎだけで今はやってるらしいの」

「へえええ」

「奥さんも今は育児休職中なんだけど、お子さんが1歳になったら

復帰するの。

で、ちよつとでも役に立ちたいからって、間宮さんが保育園を探してるんだって」

あの若さで！凄い！！

「ふふ。本人は『デキ婚だから、文句言える立場じゃないし』とか言ってるけど、

奥さんとお子さんのこと、すごく愛してるみたい」

そうだよな。

でなきゃ、男の人が保育園探し回ったりしないよね。

「・・・でも、お兄ちゃんもきつと、それくらいヒナちゃんのこと、好きだよ」

「え？」

「ただちよつとワガママで、ちよつと素直じゃないから、ヒナちゃんのこと、大切にしているようには見えなないかもしれないけど・・・大切に思ってると思うよ」

「ええ？」

ヒナちゃんは首を傾げた。

「知ってるよ、そんなの」

「えっ。そ、そうなの？」

「うん」

「じゃあ・・・お兄ちゃんに愛想尽かしてない？別れたりしない？」

ヒナちゃんはまた「ええ？」と驚いてから・・・

自信たっぷり「もちろん」と頷いた。

その首元には、あの指輪が力強く光っていた。

「なんだ三浦、そんなに俺のこと見つめて。愛の告白でもしてくれるのか？」

「まさか」

「じゃー、さっさと前に出てきて、この問題解け」

う。

でも先生に逆らうわけにはいかない。

私は諦めて、ノート片手にのろのろと教室の前に向かって歩き出した。

「とつとと歩け！お前、何歳だ？もつとシャキッとしろよ」

「もう15歳のおばさんですから」

「・・・30歳目の俺の前で言うか」

本城先生はムツとしながら私にチヨークを渡した。

「わかりません」

「・・・だったら、前に出てくる前に言え。時間の無駄だ」

私は先生に頭の上を教科書でポンと叩かれ、席へ追い返された。

「全く。お前の兄貴はあんなに頭がよかったのに・・・誰に似たんだ、お前」

先生はブツブツ言いながら、私が解けなかった問題の解説を始めた。完全な呆れ顔だけど、そんな顔ですら本城先生はかつこいい。

顔だけじゃなく、生徒の私から見て、先生にはおよそ欠点と言う物がない。

見た目も中身も「イケメン」だ。

だけど、先生だつて人間だ。

欠点がないわけがない。

過去に、人には言えないような出来事もあつただろう。

でも多分、綾瀬学園のあの宇喜多先生は、そんな本城先生のことを丸ごと好きなんだ。

お兄ちゃんも、ドジでパツとしないヒナちゃんの全てが好きで、ヒナちゃんも、あんなワガママ王子のお兄ちゃんの全てが好きなんだ。

愛って深い。

クラスの男子をしてみる。

相変わらずお兄ちゃんよりかつこいい顔の男子はいない。
でも、顔だけじゃなくって、中身も含めて「イケメン」な男子がい
るかもしれない。

私、そんな風に男子のこと見たことってあったっけ？

なんとなく森田を見る。

こいつも相変わらざるのサルっぷりだ。

本城先生の授業はつまらなさそうに聞いているし。

だけど、悪い奴じゃない。

いいところもあるし、優しいところもある。

中間テスト前は、本当に私の勉強に付き合って毎日居残りしてくれ
たし。

まあ、かろ~~~~~~~~じて「イケメン」、なのかなあ？

と。森田が頭を上げ、こっちを見た。

目が合う。

『何、ジロジロ見てんだ。このパンパンジー女』

『は？あんたを見てたわけじゃないわよ、このサル』

『ちゃんと授業聞いとけよ』

『うつさい。あんたこそつまんなさそーな顔してんじゃないわよ』

『なんだと、この、』

「はいはい。その、まりもっこりコンビ。仲良く目で会話する場合じゃないぞ」

突然の本城先生の声に、私も森田もハッとして前を向く。

そして同時に叫んだ。

「目で会話なんてしてません！」

「俺はまりもっこりじゃねー！」

第1部 第17話

「あー、くそ！帰ってー！！」

「それはこっちのセリフよ！」

私と森田は凄い勢いでプリントをホッチキスで留めまくっていた。

今日、授業を聞いていなかったバツとして、

本城先生に「夏休みの宿題のプリントを、クラスの人数分用意しておくよーに」、

と言われたのだ。

つて、凄い量だし！

ホッチキスで留めるのも疲れるけど、

夏休みに入ったらこれを自分が解かなきゃいけないのかと思うと、ますます疲れる。

「ねえ、森田くうくん」

「きもつ」

「夏休みの宿題、一緒にやらない??」

私は上目遣いでできるかぎり色っぽく言ってみた。

「一緒にやらない、とか言って、俺に手伝わせるつもりだろ」

「バレた？」

「当たり前だろ。毎日夕飯奢ってくれるなら付き合ってやってもいいけど」

「・・・そんなの無理に決まってるでしょ」

焼肉に行った時の森田の食欲を思い出す。

あんなのに毎日お金払ってたら、私のお小遣いはエンゲル係数100%で消えてしまう。

「・・・まあ、わかんねー問題を教えるくらいだったらいいけど」
「ほんと!？」

よし!それにかこつけて、手伝えよう!

「昼飯奢れよ」
「100円マックね」
「10個な」
「・・・」

ち。

口の減らないサルだ。

でもまあ、夏休みには、悲しいかな何の予定もない。
森田に宿題を手伝わせて、マックで昼ご飯を食べるくらいはいいだろう。

・・・うん、まあ、悪くない・・・

そ、そうそう!!

お兄ちゃんとヒナちゃんだけど!

あれから無事仲直りをした。

なんか前よりラブラブで、こっちが恥ずかしくなっちゃうんだから!
それに、あの間宮さんも、ヒナちゃんの保育園に子供を預けるって決めたらしい。

よかった、よかった。私もこれで肩の荷が下りるってものよ。

そうそう。これで一安心、一安心、一安心・・・

・・・森田のことなんて、どーでもいいんだから。

「そー言えば」

「な、何よ!?! なんか文句ある!?!」

「は?」

「い、いえ、何も・・・続きをどうぞ・・・」

「?ま、いーや。それより、なんで俺と三浦がまりもっこりコンビなんだよ」

思い出したかのように、森田がげんなりした表情になる。

「よりによつて、まりもっこりって・・・もっとマシなのがいい」

「・・・多分、これのせいじゃないかな」

私はポケットから携帯を取り出した。

「多分」じゃないな。「絶対」だ。

「なんだ、こりゃ。まりもっこり?」

森田が私のストラップを見て、変な顔をする。

「・・・やっぱりそう思う?」

「どう見ても、まりもっこりだろ」

「もっこりしてないもん」

「あー、そういえばしてないな」

もうちょっと色気のある会話ができないものか。

「じゃあ、なんだよこれ？」

「まりもキティちゃん」

「え？」

森田が今度はビックリした顔になる。

「何そんなに驚いてるのよ」

「驚くだろ。こんな薄汚れたのがキティちゃんなんて」

「仕方ないでしょ。もう7年も前のなんだから」

「・・・ふーん。そんな昔のモノ、いまだに持ち歩いてるのかよ」
「ふふん」

私は胸を張った。

「好きな男の子にもらった物だから、今でもこうして大切にしているのよ」

「・・・」

別に森田に「へー。三浦つて一途なんだなー」とか「意外と乙女チックなんだなー」とか

言われると思っていたわけじゃない。

ちよつと自慢したかったただけだ。

だから、なんて言われようと気にならない、
と、思ってた。

「なんだそりゃ。きもっ」

「・・・」

うるさいわね！ほっというてよ！

とか、

やっぱりー？もうキティちゃんてゆーより、まりもっこりだしねー、とか、

言い返せばいいじゃん。

「きもっ」なんて、さっきも言われたし。
いつも似たようなこと言われてるし。

「・・・」

「なんだよ、何急に黙りこくってんだよ」

「別に」

「・・・何怒ってんだよ？」

「怒ってない」

「怒ってるだろ」

私は、自分がホッチキスで留めたプリントの角をドンドンと揃え
ると、立ち上がった。

「残りは森田がやっというてよね」

薄暗くなった家への道を、私は凄いスピードで歩いた。

何よ・・・何よ、何よ！

「きもっ」って、何がきもいのよ！

別に今も雲雀ひばりのだに乃谷君のことを好きなわけじゃない。

もし再会できたら、心から笑って「久しぶりー！元気？彼女できた？」とか言える。

このまりもキティちゃんを持ってるのは、ただ大事な思い出っけ
ーか・・・

もらった時は凄く嬉しくて「一生大切にしよう！」って思ったから、
今もなんとなく捨てれずに持ち歩いてるだけ。
深い意味はない。

だけど・・・

もし今、雲雀乃谷君が、私がまだこれを大切に持ち歩いてるって知
ったら、

やっぱり森田みたいに「きもっ」って思うのかな？

逆に、もし雲雀乃谷君が、昔私があげた物をいまだに大切に持ち歩
いてたりしたら・・・

やっぱりちよつと変かな？

私は、公園を見つけると、そのままのスピードで中へ入って行つた。
探すまでも無く、目の前にゴミ箱が現れる。

そう。

今となつてはこのキティちゃんに深い意味はない。

なんとなく習慣でつけてるだけだ。

でも、このキティちゃんのせいで、森田に昔の大切な思い出まで汚された気がする。

私は携帯からキティちゃんを取ると、ゴミ箱の中へ投げ入れた。

第1部 第18話

「うっ~~~~」

「そんなに後悔するくらいなら、捨てなきゃよかったのに」

「だってえ~~~~」

「拾ってきなよ」

「もう行ってきた!」

私は、つつぷしていた机から顔を上げて、茜を涙目で見上げた。

「今朝、学校来る前に行ってきた!でも・・・」

「でも?」

「よりによつて、今朝早くゴミ収集車が来たみたいで・・・」

「なかったの?」

私はコクコクと頷いてまた机に覆いかぶさった。

なんで!?

なんでよりによつて、今朝なんかゴミ持ってちゃうの!?

ああ・・・

昨日の帰り、森田にムカついた勢いでキティちゃんを捨ててしまったものの、

一晩寝て起きたら激しい後悔に襲われた。

森田に何を言われようとどうでもいい、とか、
雲雀乃谷君に悪い、とか、

思い出がどうのこうの、とか以前に、
キティちゃんに悪いことをしたと思った。

だから、急いでキティちゃんを迎えに行ったのに・・・

「哀れ、キティちゃんはゴミ集取車の中で粉々に、か」

「茜！・・・酷い！・・・！」

「舞、ちゃんと『燃えないゴミ』に入れたんでしょうね？」

「酷すぎる！・・・！」

「酷いのは舞でしょ」

「~~~~~うつ~~~~~」

確かにその通り。

悪いのは私よ。

でも・・・！！！！

私はもう一度顔を上げ、

少し離れたところでいつも通り天野たちと馬鹿みたいに笑っている
森田を睨んだ。

森田！

元はと言えば、あんたのせいなんだから！！

「ねえ、舞。でもいい機会なんじゃない？」

突然茜がボソツと言った。

「いい機会？何の？」

「舞、最近あんまり『お兄ちゃん、お兄ちゃん』言わなくなったし、

なんとなく引き摺ってた初恋の思い出も振り切ったし。これで新しい恋に進めるんじゃない？」

「進むにも進む先が無いんですけど」

「森田君は？」

また森田！？

よりによつて森田！？

てゆうか、なんで森田！？

サル森田！？

い、いや、この際サルだとかはどうでもいいとして。

「茜こそ！森田に告るんじゃないの？」

「うん。もう告った」

「あそー。それは・・・って、は？」

なんですと？

私が大口開けてビックリしていると、茜は小声で付け足した。

「告って・・・振られた」

「・・・」

「ま、舞！落ち着いて！」

気がつくつと、茜が私の腕にしがみついていた。

どうやら私は無意識のうちに立ち上がり、森田目掛けて突入しようとしてたらしい。

「落ち着いていられるわけないでしょ！何、あいつ！茜を振るなんて許せない！！！」

「あのね。森田君にだって選ぶ権利はあるわよ」

「サルにそんなもんはない！」

「・・・サルが聞いたら怒るわよ」

茜に両肩を上から押され、私は仕方なく席に座った。

「・・・いつ、告ったの？」

「昨日。私、部活で遅くなったんだけど、たまたま森田君と帰りが一緒になったの。」

こんな機会がないと思って、思い切って言っちゃった」

「え。遅くって・・・何時くらい？」

「9時前かな」

「・・・」

もしかして、私が途中でプリントまとめるのを放棄しちゃったから、森田の奴、1人で全部やってたのかな。

私も「やつといてよね」って言っちゃったし。

そんな遅くまで残ってやってたんだ・・・。

「それで、なんて言われたの？」

「好きな子がいるんだって」

好きな子？森田のくせに。

「何それ。どこの日本ザル？それとも手長ザル？あ、ワオキツネザルとか？」

「さあ」

茜は肩をすくめて言った。

「口の悪いチンパンジーじゃない？」

昼休み。

私は森田を探した。

昨日、仕事を押し付けたのを謝ろうと思ったのだ。

キティちゃんのこととは、森田も悪気はなかったんだろう。
私が急に勝手に不機嫌になってビックリしたかもしれない。

茜を振ったことはムカつくけど、茜の言う通り、まあサルにも選ぶ権利はある。

芋が好きなサルもいればリンゴが好きなサルもいる。

とにかく。

一応謝ろう。

てつきり体育館で葉山先生達とバスケをしているかと思ったら、見当たらない。

見学している女子生徒に聞いたら、「本城先生に呼ばれて出て行った」と教えてくれた。

でも、職員室に行っても、森田はおるか本城先生の姿もない。

どこに行ったんだろう？

教室に戻ってみたり、校庭に出てみたりしたけどやっぱりない。

おかしいなー。

森田がなんかやらかして、生徒指導室でお説教されてるとか？

だったら、見つけたとしても声はかけられない。

ま、後でもいいか。

そう思い、なんとなく空を見上げたところで・・・

いた！

もちろん、森田が空を飛んでた訳じゃない。

校舎の屋上で、フェンスに持たれて本城先生と何か話してる。

私は急いで校舎に飛び込み、階段を駆け上がった。

汗がじつとりと出てくる。

もう真夏で、昼休みに屋上なんかに行く生徒はいない。

そんなひと気のないところで敢えて話してるなんて、何があったんだろう？

私は、屋上に通じる扉の前で、それを開くか迷った。

もし、大事な話をしてるなら、今行かない方がいいかな？

でも、数秒も悩まないうちに、扉が向こうから開き、本城先生と森田の顔が見えた。

2人は、私がここに立っていることにちょっと驚いたようだけど、先生は、私が森田に用があると分かったらしく、何も言わずに階段を下りていった。

なんとなく緊張して、少し息を飲む。

「森田、あの・・・」

「何？・・・あ、悪い、ちょっと待って」

森田がズボンのポケットから携帯を取り出し、点滅するサブディスプレイを見た。

「電話だ。出ていいか？」

「あ、うん」

森田が、相手の名前を確認してから通話ボタンを押した。会話を聞くつもりなんてないけど、

周りには誰もいないし、遠くに生徒の声はするけど、静かだ。

嫌でも森田の声はもちろん、相手の声も聞こえてくる。

相手が何を言っているかはわからない。
でも・・・

女の人の声だ。

「何？うん・・・うん・・・ああ、わかってる」

いつになく森田の声が落ち着いてて優しい。

誰なんだろう？

お姉さんとか、妹とか？

それなら森田は、もっとぶっきらぼうに話しそうだな。

穏やかでニコニコしてて・・・でも、わざとそうしてるんじゃないかと、

自然とそうなってしまうている、って感じた。

「ああ、うん。じゃあね。再来週に会おうね」

会おうね、って。

森田、そんな話し方するんだ。

意外。

もしかして、今話してる人って・・・

何故か胸の奥がザワザワと音を立てる。

私は、森田が携帯を切ると同時に、
ううん、切るより早く、森田に話しかけた。

「今の、彼女？」

すると森田は、携帯をパチンと閉じながら、

「うん。そう」

と言って頷いた。

第1部 第19話

ふーん、

森田って彼女いるんだ。

やっぱ、あの綾瀬学園の生徒なのかな。

うちの生徒じゃないと思う。

だって、そうならわざわざ昼休みに電話なんてしてこないだろう。
直接会うか、無理ならメールすると思う。

落ち着いたトーンの声だったから、もしかしたら年上なのかもしれない。

ま、どーでもいいけど。

私には関係ない。

・・・そっか、彼女いるんだ。

ふーん、

ふーん、

ふーん・・・

「~~~~~」

「舞。どうしたの？まだキティちゃんの怨念に苦しめられてるの？」

「何、そのキティちゃんの怨念で」

「だって、なんか唸ってるから」

「唸ってないもん」

私は机に頬杖をついた。

「・・・茜」

「何？」

「森田って彼女いるんだって」

「・・・そう」

「サルでもチンパンジーでもなかったよ。日本語しゃべってたし」

「・・・」

「『好きな子がいる』なんて遠回しな言い方しなきゃいいのにね」

「私に気を使っただんじやない？」

そうかな。そうかもね。

「はあ・・・」

「ふふふ」

「・・・茜、何笑ってるの？」

「別に」

「・・・」

私は朝の時のように、
相変わらずバカみたいに笑っている森田を見た。

「・・・なんで、森田には彼女がいるのに、私には彼氏がいないんだろっ」

素朴な疑問を口にしてみたら、
茜が、答えをくれた。

しかも、的確な答えを。

「森田君に彼女がいるからでしょ」

・・・なるほど。そういうことか。

はあ。

「本城先生。一生のお願いがあります」

「な、なんだよ。まあ、俺にできることなら・・・」

「梅昆布茶、一杯ください」

「・・・お安い御用だ」

先生は紙コップに粉末の梅昆布茶とお湯を入れ、スプーンでグルグルかき混ぜると私に手渡してくれた。

本城先生の隣の椅子に腰掛けて、一口飲んでみる。

「・・・美味しい！粉末の量、量ってないのに絶妙な味！」

「だろ？粉末の梅昆布茶って作るの結構難しいんだけどさ、俺は極めた」

胸を張る先生。

他に極めるものはないんですか。

「はあ」

「あはは、どうした三浦。なんか一気に10歳くらい老け込んだな。もうちょっと頑張れば俺に追いつくぞ」

「追いつきたくないです」

「やっぱり？」

私は、両手で紙コップを包み込むように持ち、放課後の職員室を見渡した。

山にかかった夏の夕日が綺麗で、その光が職員室いっぱいに広がっている。

通学には不便な場所の学校だけど、こういう自然を眺められるのはいいなあ。

都心の綾瀬学園じゃ絶対見れない景色だ。

そくだ。綾瀬学園と言えば。

「先生。彼女とは上手くいってますか？また焼肉のことで喧嘩したりしてませんか？」

「大きなお世話だ。お前こそどうなんだ。脱ブラコンして彼氏はできたのか？」

「脱ブラコンはしたんですけどね。彼氏は当分できそうにありません」

「・・・なんだ、あいつになんか酷いことでも言われたのか？」

あいつ？

「先生、あいつって・・・」

「森田だろ？」

おりよりよ。

「ふふん。俺の目を舐めるなよ」

「あー、遊んでそーですもんね、先生」

「おい」

「いつ気づいたんですか？」

「そんなもん、最初っからわかってた」

「・・・ふーん」

なんなんだ、私。

私っていつから森田のこと、好きだったんだ。

自分でもわからないのに、先生はわかってたのか。

あー、情けない・・・

「まあ・・・酷いこと言われた、たとえば、言われたんですけどね」

森田が言ったのは「うん。そう」ただけど、

今の私には限りなく残酷な言葉だ。

「あいつの口が悪いのは生まれつきだ。気にするな」

「そういう問題じゃ、ないんですけど」

「とにかく頑張れ。大丈夫だ」

先生、何故か自信满满々だけど、

何がどう大丈夫なんだろう。

私はもう一杯梅昆布茶を頂いてから、家路についた。

先生と話をしたお陰なのか、
予想以上に美味しい梅昆布茶のお陰なのか、
私はちよつと元氣が出た。

森田に彼女がいるのは仕方ない。
本気なのかどうなのか知らないけど、彼女から取ってやろうとは思
わない。

どうやったらそんなことできるのかも、わからない。

別に今のままでじゅうぶんじゃない？

サルだのチンパンジーだの言いたいこと気楽に言い合える仲だし、
森田の彼女は多分朝日ヶ丘の生徒じゃないから、ラブラブなところを
見せ付けられるわけじゃないし。

だから、このまま、今のまま。

それに、男は森田だけじゃない。

森田より「イケメン」なんて、いくらでもいるはずだ。

・・・よし！明日から、イケメン探しだ！
森田なんか、「ウキウッキー」！とか言つて裸足で逃げ出すくらい
のイケメンを見つけてやる！
私自身も、イケてるウーマン、略して「イケウーマン」（全然略し
てないじゃん）になってやる！

って、せっかくそう思ってたのに。

探してみると、本物のイケメンってなかなかいない。
結構希少性が高いらしい。

だからイケメンには女が群がるのか。

しかも、なんか森田がかっこよく見えて仕方ない。

森田以外の男が、男に見えない。

ましてや、森田以上なんて、いやしない。

なんだ、あいつ。

いつの間に整形したんだ。

ビューティーコロシムにでも出たのか。

和田アキ子のサインはもらったのか。

「舞、何ブツブツ言ってるの？」

「別に」

「あ、ねえ、天野君がなんか手を叩いてる」

どうした天野。

お前もサル化したのか。

サルはサルでも、天野サルは好きじゃない。

「・・・舞。どうしたの。いつにも増して口が悪いわよ」

「あれ。私、今、声出してた？」

「思いつきり。森田君に聞こえるよ？」

「・・・」

私は仕方なく口をつぐんで、天野の方を見た。

「おい、みんな、ちゅうもおーくー!!」

はいはい。

「夏休みに入ったら、みんなで海いこーぜ!!もちろん自由参加だけど。」

家族でも恋人でも誰でも連れてくるのアリ!

『誰か紹介して』とか言ってる中学校の友達連れてくるのもアリ!

7月29日、朝8時にT駅改札に集合!わかったな!」

・・・ふーん。

海、ねえ。

森田を見ると、さっそく天野が声をかけている。

森田が来れば、女子の参加率が上がるからだろう。

その計画にまんまと乗せられそうな女子が、ここにも約1名。

第1部 第20話

「ダメだ」

「お兄ちゃんの見解なんて聞いてない。ヒナちゃん、一緒に水着買いに行こう！」

「うん。でも、私はいないから、一緒に舞ちゃんのを選ぼう」

「えー？ヒナちゃんも一緒にビキニ買おうよ」

「む、無理！」

期末テストなんて物があつたかどうか忘れたけど、
(そう言えば、本城先生に怒られたような・・・)

夏休み最初の日曜日。

私はヒナちゃんと一緒にパルコへ水着探しに行くことにした。

「行くことにした、じゃない。許さん」

「どうしてお兄ちゃんに許してもらわなきゃいけないのよ」

「・・・海つて、男も来るんだろ」

「そりゃあね。サルも来るけど」

「やっぱりダメだ」

「行こう、ヒナちゃん」

「ヒナ！行ったら別れるぞ！」

「いつてきます、三浦君」

「おい！」

ギャーギャーうるさいお兄ちゃんは放置し、

私達はさっそく電車に乗り込んだ。

「ねえ。7月29日、ヒナちゃんも一緒に海行こうよ。お兄ちゃん

よりいい男もいるかもよ」

「そ、それは遠慮しとく。水着なんて恥ずかしいし、高校生と一緒に海なんて、無理だよ。」

第一、平日だから仕事あるし」

「あ、そっか」

社会人は大変だ。

その点、まだ大学生のお兄ちゃんは勉強はあるものの、すっかり夏休み気分。

ヒナちゃんと遊びに行くところを探しているのか、最近よくパソコンと睨めっこしている。

「舞ちゃんはスタイルいいから、どんな服でも水着でも似合っているね」

スタイル悪くはないけど、
いいって言うより、背が高く細いだけだ。

「だけ、って・・・じゅうぶんじゃない。私、背も低し太いもん」

「太ってないでしょ。なんてゆーか・・・コロコロしててかわいい」

「・・・・・・・・」

なんか落ち込んでしまったヒナちゃんを引っ張って、
パルコの上の方の階へ急ぐ。

水着の特設コーナーには、色とりどりの水着たちが、
たくさんありすぎて、訳がわからなくなる。

うーん、どれにしよう？

・・・森田はどんなのが好きかな。
意外とエロいのが好みかも。
サルだし。

「・・・」

「舞ちゃん？」

「え、あ、何？」

「お友達と一緒にじゃなくてよかったの？ほら、中学の時からよく一緒に遊んでる・・・茜ちゃん？」

「ああ、うん」

もちろん、茜も誘った。

ってゆーか、最初は茜と2人で水着を探すつもりだった。
ところが・・・

終業式の日のこと。

「行かない」

「水着、買わないの？」

「そうじゃなくて、海に行かない」

「ええ！？行こうよ！茜がいないとつままない！」

「だって・・・森田君も行くんでしょ？私、失恋しちゃったし、気まずいよ」

「そんなの私だって一緒よ」

「舞は振られた訳じゃないじゃない。気まずくはないでしょ。それに・・・」

「それに？」

「もしかしたら、森田君、彼女連れてくるかもしれないでしょ？そんなの見たくない」

「・・・」

そう言う訳で、茜は天野に「行かない」と返事してしまった。
私も悩んだ。

確かに、森田が彼女と海で仲良く遊んでるとこなんて、見たくない。
でもその反面、森田の彼女がどんな子なのか、興味ある。

返事しあぐねてる私に、天野はしきりに「来いよ」って言うけど、
思い切りがつかない。
するとそこへ、森田がやってきた。

「何、牧野行かねーの？」

「・・・うん」

「三浦は？」

「茜が行かないなら、やめようかなと思って」

「なんで？せつかくだし、2人とも行こーぜ」

「え？」

「な。牧野、なんか用事でもあんの？」

森田が茜を見る。

森田。茜はあんたのせいで行かないって言ってるのよ。
察しなさい。

あ。

それとももしかして、

森田は茜に気を使って誘ってるのかな・・・。

「用事は、ない、けど・・・」

「じゃ、決まりな。三浦も来るだろ？」

「え・・・じゃあ、茜が行くなら・・・」

と、言うわけで、行くことになってしまったのだ。

だけど、茜はまだ悩んでる。

だから水着も買わないで、「行くなら去年買ったやつ着てく」そう
だ。

私も茜が行かないなら行きたくないけど、ろくな水着を持ってない。
だから一応買っておこうと思ったのだ。

「ねえ、これは？かわいいよ」

「あ、ほんとだ」

ヒナちゃんが手に取ったのは、黒のビキニ。

シンプルだけど、肩紐と腰紐の部分が、さりげなく凝ったデザイン
になってて、お洒落だ。

「こんなの、スタイルがよくないと着れないもんね。舞ちゃんにピ
ツタリ！」

「そ、そう？じゃあ、これにしようかな。試着してみるね」

「うん」

私はフィッティングルームに向かおうとしたけど、

ヒナちゃんを振り返った。

「ヒナちゃん、本当に買わないの？お兄ちゃんと海とかプール行か

ないの？」

「私、そういつとこ苦手だから。三浦君もわかってるし」

確かに、お兄ちゃんとヒナちゃんが泳ぎに行くなんて聞いたことない。

お兄ちゃんは結構海が好きだけど、ヒナちゃんが苦手だから行かないのだろう。

そうだ。

夏は毎年、2人でどこかに花火を見に行っている。

ヒナちゃんは花火が好きなのだ。

なんだ。なんだかんだ言つて、やっぱりお兄ちゃんはヒナちゃんを大切にしてるんじゃない。

・・・いいな。

昔は、うつん、ついこないだまでは、「お兄ちゃんと花火を見に行けるヒナちゃん」が羨ましかった。

でも今は、「好きな人と花火を見に行けるヒナちゃん」が羨ましい。

私もそういうこと、してみたい。

「今年も花火見に行くの？」

「あ、うつん。今年はまだ決めてないの。三浦君、なんだか忙しいみたいで」

「えー？そう？ヒナちゃんの方がよっぽど忙しいと思うけど？」

「ふふ、いいの。来年でも再来年でも行けるし」

・・・そうだよね。

お兄ちゃんとヒナちゃんは今までも、これからもずっと一緒だよ
ね。

やっぱり、羨ましい。

第1部 第21話

「茜ー！大好き！」

私は駅の改札で、茜に抱きついた。

「・・・気持ち悪いから、離れて」

「だって！茜なら、来てくれると思った！」

「そりゃあ、水着の写真付きで『新しい水着、無駄にさせないでよ！』なんてメールよこされたら、

来ないわけに行かないでしょ」

「へへへ」

やつぱり、せつかく買ったからには着たいじゃない？

それに、森田のことは置いとくにしても、海には行きたい！

「茜！私達、まだ15歳よ！青春を謳歌しなきゃ！」

「はいはい」

「もしかしたら、誰かがかつこいい男の子を連れてくるかもしれないし！」

「はいはい」

「森田なんてどうでもいいし！」

「はいはい」

と、言いながらも、私も茜も無意識のうちに森田を探す。

大体参加者は集まったみたいだけど、森田の姿はまだない。

「結構多いね。40人はいるんじゃない？」

「うん。天野って粘着力だけじゃなくて、結構影響力あるんだ」

「舞・・・あんたは天野君のこと粘着系だとか言って嫌ってるけど、天野君って人気者なんだよ？粘着系ってことは、よく言えば、根気強く頑張る人ってことだし」
「・・・なるほど」

そう言えば、天野って掃除とか体育の後の片付けとかも率先してやるし、

今日みたいにクラスをまとめるのが上手い。

「舞は、ずっとお兄さんが基準だったから、お兄さんより冷めた人は『つめたい』って感じて、お兄さんより熱い人は『しつこい、うつとーしー』って感じちゃうんじゃない？」

「・・・そっか。そうかも。森田もお兄ちゃんよりサルっぽいから『サルみたい』って思ふのかな」

「・・・それはちょっと違うかも」

ふーん。

そっか・・・天野も実は結構いい奴なのかもしれない。

そうこうしているうちに、森田がやってきた。

相変わらず、Ｔシャツに薄手のジーパン、足元はサンダル。

女の子もたくさんいるんだし、もうちょっとお洒落とかしないのか。

でも、どうしてだろう。

前よりかっこよく見える。

「そういう舞は、結構めかし込んできたね」
「ほ、ほっというてよ！」

今日の私は、ラルフのピンクポロシャツ（お兄ちゃんに買わせた）と、

白のミニスカート、ウェッジサンダル。

「めかし込んできた」ほどではないけど、いつもの私を考えると、大進歩だ。

「おお。マニキュアとペディキュアまでしてる」

「ふふふ、ヒナちゃんにしてもらったの」

ヒナちゃんて、器用な方ではないけど、さすが保育園の先生だけあって、

細かい作業を根気強くやることができる。

「自分にマニキュアなんて恥ずかしくて滅多にしないんだけど・・・

」と言いつつ、

そしてお兄ちゃんに、

「舞にそんなことする必要なんかない！」と怒鳴られつつ、

私の爪を塗り塗りしてくれた。

どうだ、森田！これでチンパンジーとは言わせないぞ！！

「あ、三浦、牧野」

「おはよ。森田」

どーだ、どーだ！チンパンジーじゃないでしょ！

「・・・」

「何よ？」

ふふ、黙り込んで。さ
ては見とれてるな？

「三浦」

うんうん。

「足の指から血が出てるぞ」

・・・サルにはペディキュアという文化がないらしい。

「ほれ」

「・・・ありがとうございます」

海へ向かう電車の中は、もう既に半合コン状態で、みんな思い思いの異性と盛り上がっている。

茜は、まだ森田を引き摺っているのか、誰かに連れてこられたのであろう他校の男子達ではなく、いつもの2組の天野たちと一緒にだ。

で、私は・・・

「痛い」

「もちよつと我慢しろ」

森田が私の足の指を、駅のコンビニで買ってくれたマキロンで消毒し、絆創膏を貼ってくれた。

「この絆創膏、なに？なんか変わってる」

「防水の絆創膏。これから海行くのに、普通のじゃ意味ないだろ。

てゆーか、これから海行くのに足怪我するか、ふつー？」

「・・・」

そう。

森田が、足の指から血が出てる、と言ったのは、ペディキュアを血と勘違いしたわけじゃなかった。本当に靴擦れで血が出てたのだ。

踵の高い靴なんて慣れない物、こんな日に履くもんじゃない。

って、踵が高いって言ってもウェッジサンダルよ？

こんなんでも靴擦れしてたんじゃ、本物のハイヒールなんて到底履けそうもない。

「三浦って身長何センチ？」

「168」

「デカイな。無理して背の高い靴なんて履く必要ねーだろ。どこまでデカくなりたいんだ、お前は」

「目指せ、和田アキ子だから」

「・・・勝手に頑張ってくれ」

背が高いことをコンプレックスに思う女の子も多いけど、私はそんなことはない。

ここでも私の基準はお兄ちゃんの178センチで、それ以下はありえないと思っていたからだ。

小・中学時代から男にそんな身長を求めてたら、そりゃ彼氏もでき

ないさ。

（え？そうでなくてもできないって？）

森田は、私のデータによると、176センチ。

お兄ちゃんよりちよつと低い。

でもそんなことは、もうどうでもいい。

でも、彼女が自分より大きかったら、やっぱり森田は嫌かな・・・
ヒールなんてやめた方がいいかもしれない。
つて、私は森田の彼女じゃないけど。

「・・・森田の彼女は何センチなの？」

「え？彼女？」

「うん」

「えーっと、いくつだったかな。三浦よりは小さい」

「・・・そうだね」

森田も、例に漏れず小さい女の子が好きなのか。

「綾瀬学園の生徒？」

「へ？」

「だって、この前行った時、あの辺詳しくそうだったから」

「あー・・・。うん」

やっぱり。

そうとは思っていたけど、森田の口から聞くとなんか凹む。

すると森田がニヤリと笑って言った。

「こないだ、先生のお遣いで行った時に、逆ナンされたんだ」

「は！？校内で！？」

「そう。気づかなかったのか？」

「・・・全然・・・」

いつの間に！！！！

ちよつと待つて。

つてことは、あの時まで森田には彼女がいなかったってこと？

なのに、私はそれに気づかず、目の前で（見てなかったけど）森田を逆ナンされ、

どこぞの女に持っていていかれた訳か。

・・・あああ、ますます凹む。

これから楽しい海だというのに、

私の心は既に夕暮れ時になっていた・・・

第1部 第22話

「つまんない」

「・・・朝のハイテンションはどうしたのよ」

砂浜で小さくなって座っている私の横で、

茜が仁王立ちになる。

「森田君に彼女がいることなんて、前からわかってたじゃない」

そうだけど。

背が小さくて年上の綾瀬学園のお嬢様、
どんな人なのか容易に想像がつく。

「お嬢様とは限らないんじゃない？」

「小中高一貫の私立なんかに通ってるんだからお嬢様でしょ」
「あー。そうだね」

きつと色白で髪が自然にフワフワしてて、おしとやかだけど少しお
つちよこちよいだったりするんだ。

得意なことはお料理とピアノ、苦手なことは運動、みたいな。

「・・・凄い妄想力ね、舞。そんな子が逆ナンなんてする？」

「いつもその子を守るように一緒にいる親友の女の子がいて、森田
に一目惚れした『お嬢様』のために

森田に声をかけて・・・」

「はいはい。ところで、一日中そうやってるつもり？せっかくの新
しい水着が泣くよ？」

私は茜に腕を引つ張られながら、海の中ではしゃぐ天野たちのところへ連れて行かれた。

なによ、茜。

茜だって、森田に失恋したんでしょ？
もっと一緒に凹もうよ。

「ビーチバレー、やる？」

やりますとも。

ギャラリーができるくらい、ビーチバレーに燃えていると、
あっと言う間に時間がたち、お昼ご飯の時間になった。

なんとなく森田を探す。

森田はビーチバレーをしていなかった。

していなかった、というより、

誰かが連れてきた女の子達に捕まり、ずっとその子達の相手をして
いたようだ。

モテるのも楽じゃないねえ。
ふんっだ。

・・・せっかく一緒に食べようと思ったのに。

膨れて森田を見ていると、案の定女の子達が「一緒にお昼食べよう」と騒いでる。

森田は若干困ったように「あー、うん」とか言ってるし。

気取ってんじゃねー！

と、言ってやりたかったけど、本当に迷惑そうだ。

・・・仕方ない、助けてやるか。

「サル！バナナやるから、こっち来い！」
「お！」

私が必要な声でそう叫ぶと、

森田は、助かった！とばかりにウキウキやと私の方に走ってきた。

「おい、本当にウキウキやなんて言ってるねーだろ」

「そーゆー声が聞こえてきそうな顔してたよ」

「・・・」

「助けてやったんだから、奢ってよね」

「頼んでねーし」

「その女子ー！一緒に、ご飯食べ・・・モゴモゴ」

「だ、黙れ！」

私は森田に口を押さえられたまま、海の家に拉致られた。

「私、カレーライス。辛さ控えめで」

「あ、申し訳ないんですけど、調整できないんですよ。コイチじゃな

いんで」

「・・・」

ウェイター、というより、海パン姿のただのにーちゃんが頭を掻く。森田が下を向いて必死に笑いを堪えてる。

「・・・じゃあ、そのままのカレーでいいです」

「はい。そちらのお客様は？」

「俺は焼きソバ。生卵ってあります？」

「はい」

「じゃあそれも」

「はい」

オーダーを紙にぐしゃぐしゃと書き、にーちゃんが厨房へ戻って行く。

「生卵なんて頼んでどうするのよ？」

「焼きソバにかけるに決まってるだろ」

「焼きソバに生卵？変なのー」

「見た目はよくないけど、美味いんだぞ？オムソバみたいな感じで」

「あー、なるほどね」

「・・・」

「何？」

なんか森田が、私をジロジロと見てる。
お。もしか。

「どう？この水着！似合ってる？」

ふふん、とポーズを取ってみる。

「似合ってる、」
「・・・」

森田が素直に褒める時は要注意だ。

「けど、」

ほら来た。

「水着つて、胸にパッドとか入れられないのか？」
「・・・」

この10秒ほどの意味の無い会話の間に、
さっきのにーちゃんがカレーと焼きソバと生卵を持って戻ってきた。
どーゆー回転率の店なんだ、ここは。

「・・・からっ！」

私はカレーを一口食べて、水をがぶ飲みした。
予想以上の辛さだ。

これはちよつと、食べられない！

「そりゃそうだろ」
「え？」

「看板に『名物！激辛カレー』って書いてたぞ」
「・・・」

「辛いのが苦手なくせに、わざわざ激辛カレーなんて頼むから、
てつきり辛いものに挑戦したくなったのかと思ったら、『辛さ控え

めで』とかゆーし。訳わかんねー」

森田がニヤニヤしながら焼きソバを口に運ぶ。
焼きソバは激辛じゃなさそうだ。

・・・あれ。なんで私が辛いもの苦手って知ってるんだろう。
言っただけ、私？

「って、知ってるんだったら、注文する時とめてよ！」
「だから。敢えて食おうとしているのかと思ったんだよ・・・たく、
しゃーねーなあ、これ、やる」

森田はそう言うのと、生卵をテーブルの端でカンッと割り、
白身だけ自分の焼きソバにかけ、黄身を私のカレーに入れた。

「それでなんとか食えるだろ」
「・・・」

「なんとか」も何も、「卵の黄身乗っけカレー」は私の好物だ。

そう言えば、前、学食のカレーが辛くて困ってる時も、
森田は私に半熟卵をくれた。

あの時、森田、卵が嫌いって言ってなかったっけ？

それなのに、わざわざ生卵なんて別に注文して焼きソバと混ぜよう
だなんて。

しかも、黄身はくれるだなんて。

・・・どういってもりなんだろう。

「・・・ありがとう」

「え？何？」

「・・・なんでもない」

私は黄身をぐちゃぐちゃ潰して、カレーを食べた。

さすがに激辛カレーだけあって、それでもまだ少し辛かったけど、
妙に美味しいカレーだった。

第1部 第23話

太陽が、水平線に近づいてきた。
海岸の人影も少なくなっていく。

「そろそろ、引き上げるかー」

天野の一言に、みんな「うん、うん」と頷き、
帰り支度を始める。

「よし、6時の電車に乗るからな！みんな、遅れるなよ！」

とたんに、みんなの手のスピードが速くなる。

私も、みんなにつられて、というよりは、天野がそう言ってるから、
急いで身体にバスタオルを巻き、
茜と一緒に脱衣所へ駆け込んだ。

やっぱり、天野ってなんか人を動かす力がある。
いつそ将来は政治家とかにならないものか。
一票入れてやるのに。

「舞。ブツブツ言ってる暇があつたら着替えなよ。天野君が困るよ？」

「へい」

「そう言えば、お昼、森田君と2人で食べてたね」

「あ・・・ゴメン」

思わず謝ると、茜がさっぱりした笑顔で言った。

「どうして謝るの？別に、気にしてないし」

「そうなの？だって、茜・・・」

「森田君はもういいの。それに今日は楽しかったし。来てよかった！」

「そっか」

どうやら茜は本当にもう森田のことは振り切れたみたい。

私も早く「もういい」って心から言いたいのに・・・

まだちよつと無理みたいだ。

お昼ご飯の後、森田はまた午前中とは違う女の子達に捕まり、私は全然一緒に遊べなかった。

そのせいで、どうしても森田がどこで誰といるのか気になり、気がつけば森田を探していた。

今もまた・・・

更衣室を出ると、森田が3人の女の子と話している。かなり積極的に森田に言い寄ってた女の子達だ。

「森田くん、夕ご飯、一緒に食べてこーよ！」

「ごめん。これから用事あるから」

「えー！？じゃあ、また今度、会ってくれる？ケータイ、教えて？」

女の子達は、森田の返事を聞かずに素早く自分の携帯を取り出した。こうなると森田も「いやだ」とは言えず、渋々鞆に手を入れる、

と、同時に、天野の声が響いた。

「急げ！電車出ちまうぞ！走れ！」

その声が合図となり、ガラガラと更衣室から出てきていた子たちや、森田たちのようにしゃべってた子たちが一斉に走り出す。

私は思わず、「天野！グッドタイミング！」と叫びたくなった。

が、それより早く、森田が天野の横をすり抜ける時に、天野の腰をポンと叩いた。

まるで「ありがとう」とでも言うように。

・・・もしかして天野。

森田を助けるためにわざとみんなを急かしたのかな。

やるじゃん。

ならば私も、と、私は電車に乗り込むと素早く森田の横を陣取った。

「・・・なんだよ、俺を襲う気か？」

「私に襲われるのと、さっきの女の子達に襲われるの、どっちがいい？」

「・・・どっちも嫌だ」

そう言いながらも、森田はホッとしたように、私とは反対側の電車の壁にもたれた。

さっきの女の子達は、それでも森田に近づこうとしたけど、私はまるで「森田に大事な話があるんです」的な雰囲気を作って、女の子達を遠ざけた。

しかし・・・「大事な話」なんぞ何一つない。

「あー・・・森田」

「何、怖い顔してんだよ」

誰のためだと思ってるのよ！

「・・・さっき言ってた『用事』って・・・デート？」

どうでもいい、というよりむしろ、聞きたくないことだったけど、これくらいしか「大事な話があるんです」的雰囲気に適した話題が見つけられない。

「うん」

あ、そう。

「じゃあ、今日連れてきたらよかったのに。それとも、何？もしかして、

『あわよくば、他の女の子を引っ掛けよう』とか思ってたわけ？」

引つかかってる私が言うのも何なんですが。

「は？・・・三浦、まだそのネタ引っ張るわけ？いい加減飽きたぞ」

「ネタ、って。あのね」

「笑いが取れなくなったら、ネタ変えしないと客は引くぞ」

誰だ、客って。

「『俺の彼女』ネタじゃ、そうそう面白くないしな。次は『三浦の

彼氏』ネタで行くか」

「・・・いないし」

「わかってるって。ネタなんだから、ホントでもウソでもいいだろ」

そうだけど。

って、ええ？

「も、『森田の彼女』ネタは、本当だよな？」

「え？んな訳ねーだろ」

「・・・」

「もしかして、本当に俺に彼女がいるって思ってたのか？」

思ってた！！！！！！

「だ、だって、今朝・・・！」

「お前が、身長はどうだ、とか、綾瀬学園がこーだ、とか、ネタ振ってくるから、

乗ってやつただけだ」

「・・・」

「第一、綾瀬学園に行った時、三浦は俺とずっと一緒にいただろ。いつ逆ナンされたってゆーんだよ」

「・・・」

「それに、あの時彼女ができたんなら、俺があの時既にあの辺りに詳しかったことの説明になんねーだろ」

「あ」

そう言えば。

「俺の父親、教師だって言っただろ？綾瀬学園に勤めてるんだよ。だからあの辺のこと、ちよっと知ってるだけだ」

・・・なんてこつたい。

森田がわざとらしくため息をついて、肩を落とした。

「あー、お前って疲れる奴」

「う、うるさい！元はと言えば、あんたが・・・！そうだ、夏休みに入る前だって、

彼女いるって言ってたじゃない！アレが冗談だとは言わせないわよ

！」

「言ってねーし」

「言った！」

間違いなく言った！

「うん。そう」って言った！

一生忘れてやるもんか！！

「いつ？」

「屋上で、本城先生と森田が何か話してた後！私の前で、携帯でしゃべってたじゃない！

私が、『彼女？』って聞いたたら『うん。そう』って言った！『うん。そう』って！『うん。そう』！」

「・・・なんでそんなに強調するんだ」

森田は首を傾げた。

「うーん、言ったかなあ」

「言った！」

「三浦、声デカイ」

「・・・」

「うーん」

それから更に少し森田は考えていたけど、急にポンツと手を打った。

「お！思い出した！」

「言っただでしょ！？」

「言っただ、言っただ。でもそーゆー意味じゃない」

じゃあ、どーゆー意味よ！？

他の意味に捉えようがないでしょ！？

でも！とにかく！

・・・とにかく・・・

「じゃあ、森田には彼女はいないの？」

「いない」

「これからデートって言うのは？」

「ウソ。用事があるのは本当だけど」

「・・・そっか」

なんだ、そうだったんだ・・・

なんだ・・・

「森田、茜に『好きな人がいる』って言って振ったんでしょ？」

「・・・うん」

「片思いつてこと？」

「まあ、そーだな」

森田が息を吐いて電車の外を見る。

「・・・告白とかしないの？」

「あー、うん。したい、けど、」
「けど？」

森田はムスツとしながら言った。

「言っても気づかないかも。すげーバカで鈍くて色気のないチンパ
ンジーだから」

「ふーん。そっか。大変だね」

「・・・・・・・・」

面と向かって「好き」と言われれば、どんな子でも気づくと思うけどなあ？

また、森田が盛大にため息をつく。

「森田、今日はため息ばかりだね。辛い恋、してるんだね」

「あのな……。もう、どーでもいい。それより三浦、これから暇か？」

え？

第1部 第24話

みんなから、「おい、なんでその2人でどっか行くんだよ?」という視線を浴びながら、

私と森田は、とある駅で途中下車した。

「とある駅」って、ここ、見覚えがあるな・・・
と、思ったら!

前に、お兄ちゃんと一緒にヒナちゃんを尾行したときに降りた駅だ! もしや森田、あの、なんて言っただけ? そうそう、間宮さん? に用事があるとか!?

だけど、さすがにそんなどこぞの三文小説みたいな偶然はありえなかった。

(この小説は三文にも満たないんじゃないか、という議論はさて置き)

森田は、前に私が出た出口とは違う出口から出ると、辺りを見回した。

「森田、ここ、よく来るの?」

「いや、初めて。えっと東出口から出て、右に真っ直ぐ5分くらい歩いたところ、って言ってたな」

森田は右に向かって歩いていく。私も続く。

前に出た出口の方もそうだったけど、ここは高級住宅街らしい。塀の高い大きな一軒屋や、高級マンションが立ち並ぶ。

そう言えば、綾瀬学園も駅は違っけどここからそう遠くはなかったはずだ。

途中、コンビニを見つけると森田は「そっだ」と言って入って行った。

「何か買うの？」

「ああ。お土産っつか、プレゼントっつか。ケーキがいいかな？ 暑いしアイスの方がいいかな？」

三浦は、どっちが食べたい？」

「森田が買ってくれるの？」

「ああ」

「じゃあ、アイス。ハーゲンダッツね」

「・・・」

森田はブツブツ言ってたけど、「まあお土産だのプレゼントだのだったら、それくらいじゃないとな」と、結局ハーゲンダッツを買ってくれた。

そして更に歩くこと2分。

アイスが溶けるか心配する前に、目的地に辿り着いたらしい。

「・・・ここ？」

「・・・らしいな。確かにこの名前のマンションだ」

「・・・」

「・・・」

私と森田はしばらくそのマンションの前で、ぼんやりしていた。

だって！

何、このマンション！
凄い！

前の間宮さんのところも相当な高級マンションだったけど、
その比じゃない。

なんてゆーんだろう。
ワンフロアマンション？
一つのフロアが一つの家になってる、みたいな。

それに、塀で囲われてるからはつきりとは見えないけど、
都心とは思えなくらい大きな庭もある。
もちろん地下駐車場付きだ。

こんなところに誰が住んでいるんだろう。

「・・・あいつ、すげーところに引越したな。よく金があったもんだ」
「あいつ？」

「しかも、最上階って言うてたぞ」
「最上階！？ペントハウスってやつ！？」
「だな」

だ、誰がそんなとこに住んでるのよ！？
てゆーか、私なんかがついて来ちゃっていいの！？

「・・・ねえ、お土産、もっとリッチな物がよかつたんじゃない？」
「心配すんな。家は凄くても住んでる奴は庶民代表みたいな奴だから」

こんなマンション、庶民には一生縁がないと思いますが。

森田が、正面玄関から少し離れたところにある、小さいけどそれだけで豪華なオートロックの扉の前に立つ。

「何、この扉？」

「最上階専用の入り口だってさ」

「ほえ？」

私がある意味を理解するのに戸惑っている間に、森田がインターホンを押すと、中から何やら反応があり、カチツという音と共にロックが解除された。

中に入るとすぐにエレベーターの扉が現れた。

どうやらこれも「最上階専用」らしい。

音もなくエレベーターが下りてくる。

「あれ？森田、もうエレベーターのボタン押したの？」

「いや。このエレベーターは、今の玄関の扉が開かれると自動的に下りてくるようになってんじゃないの？」

な、なるほど。

最上階の住人やそのお客さんしか使わないからね。凄すぎる。

だけど、待てど暮らせど、エレベーターの扉は開かない。

「あ。そっか、ここもオートロックなのか」
「え？」

森田がエレベーターの横にあるインターホンを押し、また中から口
ツクを解除してもらい、
ようやくエレベーターの中に入ることができた。

物凄いセキュリティだ。

そして、このエレベーター。

最上階専用、ってことは、最上階の住人しか使わないわけでしょ？
だったらもつとちっちゃくてもいいんじゃない？

こんな大きくて、床が大理石の必要ってないでしょ。
エネルギーの無駄遣いよ。

「すげー……。俺、入り浸ろう」

「そんなに仲がいい人のお家なの？」

「どうせ部屋、持て余してるだろ。一室俺専用にしてやる」

どうやら相当仲がいいらしい。

そして……

ようやくエレベーターが止まり、扉が音もなく開く。
勝手にエレベーターが動いたから、ここが何階かは分からないけど、
最上階であることは間違いないだろう。

エレベーターの前には玄関ホールが広がり、その中央の大きな観音
開きの扉がデンッと私達を迎える。

「はあ。なんか疲れるね」

「そーだな・・・」

森田が、本当にくたびれた様子で扉の横のインターホンを押そうとした時、

中から扉がスツと開いた。

そこから出てきた顔。

余りにもお馴染の顔過ぎて、

でもこの物凄い場所とその顔が結びつかなくて、
一瞬誰だかわからない。

でも、それは・・・
間違いなく・・・

えええ！？

第1部 第25話

「おー、来たか、あゆむ歩」

「おっす」

「あれ？三浦も一緒か。まあいいや、入れよ」

「・・・」

「三浦？」

その人が、放心状態の私の目の前で、手を振った。

「なんか、魂がお散歩してるぞ、こいつ」

「ほんとだ。おい、三浦、何やってんだよ」

森田に頭をペシッと叩かれて、私はようやく我に返った。

「ほ、ほ、ほ、ほ」

「ほーほけきよ」

「違う！」

それに、そのギャグ、前に一度使ったし！

「本城先生！」

「はい」

「ここ、本城先生の家なんですか！？」

「・・・今のセリフ、『教師の給料でこんなところ住めるんですか！？』って聞こえるんだが」

「その通りです！」

「・・・まあ、いい。2人とも入れ」

私と森田は、かなりギクシャクしながら、中に入った。
中は・・・説明してると、また1話くらい必要なので割愛しておこ
う。

とにかく「凄い」。

私は中々「ギクシャク」が取れなかったけど、
森田は靴を脱ぐとすっかりいつもの森田になっていて・・・
いや、いつもの森田以上だ。

何がつて？

サルっぷりが。

「ちょ、ちよつと森田！何、片っ端から扉開けて中見てるのよ！」
「どんな部屋か興味あるだろ？俺の部屋はここがいいかなー？」
「おい、歩。お前、また入り浸る気か？」
「前に真弥が住んでたワンルームより、入り浸られ甲斐があるだろ
？」

「・・・どーゆー甲斐だ」

先生はため息をついたけど、勝手に家中を見回ってる森田を止める
様子も、嫌がる様子もない。
さっさとリビングの方へ行ってしまう。

私は、森田と一緒にいるか先生についていくか迷ったけど、
やっぱりここはサルと行動を共にしてる場合じゃない。
私はリビングへ向かった。

「・・・って、ここ、リビングですか？ダンスホールじゃなくて？」

「なあ？広すぎるだろ？お前も歩とここに住むか？あの辺にダンボールで部屋作ってやるよ」

どこのホームレスだ。

私は先生に勧められて、白い革張りのソファにチョココンと腰を下ろした。

まだ引越して間もないのか、家具もピカピカだ。

でも、何より目を引くのはリビングの壁にかけられている大きな絵。空がメインの風景画なんだけど、とっても鮮やかな色使いで、リビングの雰囲気によく合ってる。

「なんか飲むか？」

「梅昆布茶」

「おお、いい趣味してるな」

先生は、私が森田から引ったくって渡したアイスを「サルが戻ったら食おうな」と言っただけで冷凍庫にしまい、美味しい梅昆布茶を入れてくれた。

「・・・聞いていいですか？」

「聞かなくていい。答えてやる」

先生も私の隣に座り、梅昆布茶をすする。

「うーん、どっちから説明するかな・・・まず、この家だが、もちろん俺が買ったんじゃない。

俺の友達に、一万円札をティッシュ代わりにするほど金を持ってる奴がいてさ。

そいつからのプレゼントだ」

プ、プレゼント！？

「もしかして、先生、その人に囲われてるんですか？」

「お前、凄い妄想力だな。断じてそんなんじゃない。それと、歩・
・森田だけど」

そうそう！

むしろ、そっちを聞きたい！

「あいつは、俺の、」

「幼馴染だ！」

サルがアイスを求めてご帰還なさった。

「おい。誰が幼馴染だ。ふざけんな」

「ふざけてねーし。お。梅昆布茶？俺にもくれよ」

森田は遠慮の「え」の字もなく先生を立たせると、
ソファにドカッと座った。

「おー、気持ちいい！俺のベッド、このソファでいいや」

「いいや、じゃない、全く・・・三浦、歩はな、俺が前住んでた家
のご近所さんみたいなもんなんだ」

「え？ご近所さん？」

「ああ。歩が9歳くらいの頃から知ってる。俺にとっちゃ弟みたい
なもんだ」

弟！？

通りで森田が遠慮しないはずだ。

まあ、もともとサルは遠慮なんてしないけど。

「たく、気づいたら、ちゃっかり朝日ヶ丘に入学して、ちゃっかり俺のクラスになってるし・・・」

「偶然だろ」

「そーだけどさ」

先生に差し出された湯飲みで、美味しそうに梅昆布茶を飲む森田。

・・・なんか、本当の兄弟みたいだ。

そっか。それで森田は敢えて学校では本城先生を避けてたんだ。
教師と生徒が仲良すぎちゃ変だもんね。

それにしても驚きだ。

「あ、ねえ、今日ここに来たのって、家の見学に来たの？さっきのアイスは引っ越し祝い？」

「いや、真弥が話あるってゆーから。アイスは引っ越し祝いじゃないくて誕生日祝い。」

今日、真弥の誕生日なんだよ」

「え！？そうなんですか！？おめでとunggざいます！」

「ああ、ありがと。俺もついに三十路かあ」

「年だなー」

「うるさい」

「で、話って何だよ？まあ、この家見たら、想像はつくけど」

私は全くつきません。

そもそも、私ってここにいていいの？

「ああ、うん・・・そのことなんだが・・・お、ちょうど帰ってきた」

カチリと玄関の鍵が開く音がした。

先生が立ち上がり、玄関の方を向く。

森田と私もなんとなく一緒に立ち上る。

そして、玄関の扉が開き、

「ただいま」

と、言って入ってきたのは・・・

綺麗な黒髪の若い女の人だった。

第1部 第26話

「おかえり」

「こんにちはー、和歌さん。お邪魔してます。凄い家だね」

「ふふ、まさに分不相応って感じでしょ？」

「真弥にはな。でも和歌さんには似合ってる」

森田は、先生に対してと同じくらい気軽にその女の人と話している。

誰なんだろう、この人。

私がポカンとしていると、

先生はまず、女の人の方へ話しかけた。

「こいつは三浦舞っていう、俺のクラスの生徒だ。まりもっこりでいいぞ」

「よくないです。こんにちは、三浦舞です」

「こんにちは」

女の人にはこやかに言った。

物静かで、それでいて凜とした雰囲気の知的美人だ。

「三浦。こっちは月島和歌・・えっと、俺の婚約者だ」
つきしまわか

「こっ！」

「おお！やっぱり！」

私と森田が同時に叫んだ。

でも、私は驚きの余り、「こっ！」と言ったつきり言葉が続かない。

「やっと結婚すんのか、真弥！」

「そうだな。やっと、だな」

「うわー・・・そっか・・・」

何故か感慨深そうな森田。

そして、珍しく素直に満面の笑みで「おめでとう」と言った。

先生と和歌さんも、照れくさそうに、だけどとても幸せそうに「ありがとうございます」と言った。

「いつまでたっても結婚しねーから、ヤキモキしてたんだぞ、俺」

「私が弁護士になるのを待ってくれてたから・・・」

「そっか、和歌さん、弁護士になったもんな」

「湯気が出るくらいホヤホヤだけどね」

まだ「こっ！」の形の口のまま固まっている私を置いて、
会話が進む。

かろうじて先生が私に助け舟を出してくれた。

「おーい、三浦。また魂がお散歩か？」

「こ、こ、こ」

「コンコン」

だから、違うって。

「婚約者！すごい！」

「・・・何がすごいんだよ・・・」

「だって！だって・・・おめでとぅございます」

「・・・うん、ありがと。って、なんでお前が涙ぐんでるんだよ」
「だ、だって・・・」

自分でもよくわからないけど、なんか涙が出てきそうだ。
本城先生が結婚なんて・・・

「なんか、息子を婿に出す気分」

「おい」

「いつ、結婚するんですか？」

「9月に籍を入れようと思ってる」

「そうなんですか・・・学校で大騒ぎになるでしょうね」

「あ、まだ言うなよ！」

「大丈夫です。こう見えても口は軽いんです」

「・・・」

「結婚式はいつなんですか？」

「あー」

先生が頭を掻く。

「結婚式はしないんだ」

「え？どうしてですか？」

「いや、二人とも何かと忙しくてさ・・・」

私は森田と顔を見合わせた。

いくら忙しいって言っても、普通結婚式はするものじゃないの？

私としてはもつと、「どうしてしないんですか？したらいいじゃないですか」

とか言いたかったけど、その前に森田が話題を変えた。

「そつか。ま、それもいいんじゃない？三浦、俺が前『彼女』って言ったのは、和歌さんのことだ」

「え？」

「夏休み前、屋上んとこで俺に電話してきたのは和歌さんなんだ。その直前まで俺、真弥と一緒にだっただろ？」

「だから三浦に『今の、彼女？』って聞かれて、てっきり『先生の彼女？』って意味かと思って、うんって答えたんだ」

「・・・」

「それを教えたくて、今日ここに三浦を連れてきたんだ」

そんなくだらない勘違いで、私はあんなに苦しめられてたのか。恨むぞ、森田。

「それよりアイス食おうぜ！俺、ラムレーズン」

「あ、ダメ！それ私の！」

「えー。それ、俺食いたいんだけど」

先生。。。おとなげない。。。。

でも、結局私も森田もアイスを口にすることはできなかった。原因は、私。

「あれ。でも、本城先生。先生の彼女って、宇喜多先生じゃなかったんですか？」

「・・・えっ」

先生が絶句する。

「宇喜多先生？誰だ、それ？」

森田はすっかり忘れていたようだ。

「ほら、4月に一緒に綾瀬学園にお遣いに行っただでしょ？あの時の女の先生」

「ああ。あの人が。って、おい、真弥？」

私と森田と、そして何より和歌さんの視線が一気に先生に突き刺さる。

「み、み、三浦、お前、何訳のわかんないことを・・・誤解だ！あの人は俺の彼女なんかじゃない！」

「・・・ふーん。私の誤解、ですか。その割には随分焦ってますね、先生」

「いや、あの、その、それは、」

すっかり拳動不審の先生。

うーん、面白い。

が、和歌さんの視線は冷たくなるばかり。

「・・・三浦。俺達、帰った方が良さそうだな」

森田が小声で言った。

マンションを出ると、森田がルーズリーフに何かを書き、私の背中にペタンと貼った。

「え？何？」

取って見てみると、そこには「KYJK」という文字が。

「何、これ」

「空気読めない女子高生、の略」

古っ！

「婚約者の前で、昔の女の話なんてするなよな」

「・・・はい」

確かにアレはまずかった。

今頃修羅場になってたらどうしよう。

「ま、それはないだろ。大丈夫だよ、あの2人は」

「そうなの？」

「ああ。色々あった分、絆も固いつて感じだから」

「・・・色々？」

私がそう言つと、森田がニヤツと笑った。

「聞きたい？」

「聞きたい！」

「タダじゃ教えられないな！。飯奢れよ、明日」

・・・明日？

それって、明日も会えるってこと？

「ダメか？」

「ダメじゃない！」

私は間髪入れずに返事した。

今現時点で修羅場になっているかどうかはともかく、先生と歌さんの幸せそうな笑顔と、

明日森田と2人で会えるという楽しみのお陰で、

私は上機嫌で家に帰った。

しかーし！

玄関の向こうには、最高に不機嫌な顔が待ち構えていた。

「遅い！」

あれ。前にもこんなことあったよーな。

「あつたよーな、じゃない！舞、お前最近夜遊びが多いぞ！」

「夜遊びつて。まだ9時だよ」

「もう寝る時間だ！」

そんなわけないでしょ。

「もー。お兄ちゃん、うるさい」

「な、なんだと！」

私は、うんざりしながら階段を上がった。

お兄ちゃんも後ろからついてくる。

「また、焼肉の男か？」

「焼肉の男？・・・ああ、うん」

「・・・どこのだいつだ」

「上野動物園のサル」

「は？」

上野動物園のサルが聞いたら気を悪くするかもしれない。

「でも、2人じゃないよ。さっきまで本城先生も一緒だったから」

「先生も？何してたんだ？」

「・・・えっと」

先生には口止めされたけど、もうとつくに卒業してるお兄ちゃんならいいよね？

と、私はさっそく口の軽いところを披露することにした。

「聞いて驚け！なんと、本城先生！結婚するんだって！」

「ええ！？」

これにはさすがのお兄ちゃんも目を丸くした。
でも、その顔の半分は喜びの表情だ。

「先生が結婚！？信じらんねー！！」

「どうしてよ？」

「もつと遊ぶかと思った」

確かに。

「でも、真剣に付き合ってたみたいだよ？」

「マジかよ・・・うわ、ヒナに言おう」

「相手の女の人にも会っちゃった」

「へー。どんな女？」

「綺麗で落ち着いた感じの人だったよ。月島和歌さんって言うんだって。名前も綺麗だよな」

「・・・は？」

携帯を開いたお兄ちゃんの手が止まる。

「・・・なんつった、今」

「え？名前も綺麗って・・・」

「違う！女の名前！」

「月島和歌、さん」

またお兄ちゃんが目を丸くする。

でも今度は100%驚きの表情だ。

「和歌さんがどうかした？」

「それ！俺の同級生だぞ！！」

「・・・えっ。ええ？えええ！？」

それって、つまり・・・うわ！本城先生！！

森田の言ってた「色々」ってそう言うこと！？

それからしばらく、私とお兄ちゃんは上を下への大騒ぎだった。

だけど。

次の日に私が森田から聞いたのは、そんなことじゃなかった。

それは4年前のこと。
2人に突然降りかかってきた、
ある悲しい出来事だった。

第2部 第1話

俺は電話を放り投げると財布を掴み、家を飛び出した。

「どこ行くの!？」というお母さんの声が俺の背中を追いかけてきたけど、

今はそれに答える時間すら惜しい。

別に、何かから逃げてる訳でも、何かを追いかけてる訳でもない。時間に間に合わない、とかでもない。

ただ、今すぐに行きたいんだ!

駅の階段を駆け上がり、券売機で切符を買う。財布には大した金が入ってない。

次の4月からは大人料金だから足りないけど、今はまだセーフだ。

俺は子供用の切符を買って、また走って改札を抜け、ホームに下りた。

タイミングよく、電車が来る。走った甲斐があるってもんだ。神様、サンキュー。

・・・いや、本当に神様がいるなら、こんなことよりもっとやっつけてほしいことがある。

目的の駅までは、ほんの15分ほど。
でも、今は1時間にも2時間にも感じる。

ようやく電車を降りたのは、もう真夜中で・・・
なんてことはない。
まだ4時だ。

そうだな。
友達んちから帰ってすぐに電話がかかってきて、家を飛び出したんだから。

電車から降りるとまた猛ダッシュだ。

そう言えば今日、学校で「師走」って習ったわけ。
12月ってのは、普段落ち着いてて走ることのない教師でも走るくらい忙しい、
だから「師走」って言うらしい。

でも、この話を聞いた時、俺は1人で爆笑した。
「普段落ち着いてて走ることのない教師」だって？
んじゃ、いつつも走り回ってる真弥はどーなるんだ。

ま、あいつは教師の中でも特殊かもしれない。

あいつも今は、普段以上に走り回ってるのかな？
なんたって「師走」だもんな。

でもこの数日は、大人たちにとって師走の中でも特に忙しい時期な

のかもしれない。

クリスマスのか付けと正月の準備。

俺のお父さんとお母さんも忙しそうだ。

そうそう、俺のお父さんは、真弥の上司だったわけ。

教師らしく「普段落ち着いてて走ることのない」人だ。

もつと真弥をちゃんと教育してやれよな。

人間、焦つてると逆にどうでもいいことを考えるものだ。

俺も、そんなどーでもいいーことを考えているうちに、目的地に辿り着いた。

港中央総合病院。

勢い良くロビーに飛び込む。

何号室かは聞いていた・・・が、

こんなデカイ病院でたった一つの個室を探すのなんて、

無力な小学6年生にはキツイ。

俺はすぐさま白旗を揚げて、受付のねえちゃんに助けを求めた。

そのお陰で、ものの5分もしないうちに、俺はその個室の前に立つことができた。

でも、せっかくここまでですっ飛んできたのに、俺の手はなかなか扉に伸びない。

もし、ベッドの上で沢山の管に繋がれてたらどうしよう。

口も利けないような状態だったらどうしよう。

俺が入った瞬間、生命維持装置みたいなのが、ピーピーって鳴って
医者が走ってきたら・・・

ところが。

部屋へ入る覚悟をしかねたら、思わぬことが起きた。

扉が勝手に開いたのだ。

自動ドア？

そんなわけないか。

中から誰かが開けたんだ。

しかもその「誰か」は、俺がつきり管で繋がれてと思っていた
人だった。

「和歌さん！！」

「あれ？歩君？どうしてこんなところにいるの？」

いるの？、じゃねー！！！！

でも・・・

とにかく俺は安心した。

和歌さんは一人で歩けるような状態ではある訳だ。

部屋に入ると、和歌さんはベッドに横になった。

俺は、その横の椅子に座る。

「和歌さんが入院したなんて聞いたから、俺ビックリしたよ」

「ごめんね。・・・先生から聞いたの？」

「うん」

そうだ。

真弥のヤローが、

「月島が入院してて、来月手術するために遠くへ行くから一度見舞ってやってくれ」

なんてゆーから、俺はてつきり、

和歌さんが富士の病、じゃなかった、不治の病にでもなったのかと思っただ。

だけど、和歌さんの顔色はいい。

不治の病って感じじゃなさそうだ。

それでもこうやって病院のベッドなんかに寝ていると、

普段より弱々しくみえる。

それにちよつと・・・

「和歌さん、痩せたね。ただでさえ細いんだから、ちゃんと食べよ」

「うん、少し食欲なくて」

和歌さんは細い割りに良く食う。

しかもキャラに似合わず大の肉好きだ。

その和歌さんが「食欲ない」なんて・・・

やっぱり結構大きな病気なのかもしれない。

「手術するんだって？いつ？」

「1月16日。でも大阪の病院だから、1月5日に転院するの」

「そつか・・・」

何の病気なんだろう。

聞いていいものなのかな？

少し悩んだが、やっぱり聞かずにはいられない。

「その、なんで・・・入院することになったの？」

和歌さんは力なく微笑んだ。

「心臓にちよつと欠陥があるの」

「えっ、心臓？」

心臓と聞くだけで、それってやっぱり病気なんじゃ、と思ってしまふ。

「生まれつきらしいんだけどね、ずっと気づかなかったの。日常生活に支障があるような欠陥じゃないし。

確かに子供の頃から、よく心臓辺りがキュツと締め付けられる感じはあったんだけど

まさか心臓に欠陥があるとは思わなかったし、

これくらいの痛みはみんなも感じてるものだと思ってたから、親にも言ったことなかった」

真弥によく言われるが、「元気の塊」みたいな俺には、

心臓が痛いなんて感覚、想像もつかない。

でも、ずっとそれを味わってきた和歌さんには、当たり前のことだったんだ。

「だけど今年の4月に少し大きな発作を起こして、倒れちゃったの。で、検査して・・・」

4月？

8ヶ月も前じゃん！

そう言えば、ここんとこずっと和歌さんに会ってなかった。

真弥とはちよくちよく会ってたけど、和歌さんは一緒じゃなかったし、

和歌さんの話題も出なかった。

大して気にしてなかったけど、まさかこんなことになってたなんて・・・。

「じゃあ、8ヶ月間ずっと入院してたのか？」

「うん。ずっと手術の順番待ちしてたの。大阪に腕のいい医者さんがいるんだけど、

凄く人気があるから。入院したのは昨日よ」

「そうだったんだ・・・手術したら治る、よな？」

「うん」

よかった・・・

俺は胸をなでおろした。

それにしても真弥のやつ、何で俺に言わねーんだよ。

俺にとって、真弥は兄貴みたいなもんで、和歌さんはお姉さんみたいなもんだ。

真弥だってわかってるはずなのに。

まあ、多分、俺に心配かけたくなくて、

せめて手術の日程が決まるまで黙っておこうとか思っただろう。

でも、治るんだ。

それならいいや。

「1月5日に大阪に行くんだよな？新幹線？」

「うん」

「じゃあ、その日か前の日に、真弥とまた見舞いに来るよ」
「・・・」

和歌さんが何故か黙り込む。

「どうかした？」

俺がそう聞くより先に、別の声が後ろからした。

「来るな」

第2部 第2話

へ？

驚いて振り返ると、部屋の扉のところに1人の男が立っていた。

高校生くらいだろうか。

綺麗な黒髪に涼しげな目元、

一目で和歌さんの弟だとわかる。

だけど、その表情は友好的とは言えない。

いや、嫌悪感を隠そうともししていない。

「二度と来るな」

「ちよつと、ノエル！」

ノエル？変な名前だな、

なんて言える雰囲気じゃない。

「せつかくお見舞いに来てくれてるのに、そんな言い方ないでしょ！」

「和歌。このチビ誰？あの男の弟かなんか？」

あの男？

真弥のことか？

「おう。まーそんなとこだ」

「じゃあやっぱり、もう二度と来るな」

「はあ？」

・・・あー、なるほど、そーゆーことか。

「お前、姉ちゃんを彼氏に取られるのが嫌なんだろう？このシスコンめ」

ノエルって奴が、真っ赤になる。

でも、照れてるってゆーか・・・

怒ってます？

「ふざけるな！そんなんじゃない！あの男がちゃんとした人間なら文句は言わねーよ！」

うーん、そう言われると反論しにくい。

真弥って「ちゃんとした人間」って言えるんだろうか。

だけど、まあ、反論してやれないこともない。

でも俺はできなかった。

驚きすぎて。

真弥は12歳の男の俺から見ても、見た目はかなりいいと思う。

もちろんモテる。

逆ナンされて、「息子と一緒になんで」と何度俺をダシに逃げたことか。

だから真弥は、なんとなく同性に敬遠されたり、

振った女に恨まれることはある。

でも、基本的に誰にでも好かれる男だ。

少なくとも俺が知る限り、本気で憎まれるようなことはなかった。

だけど、このノエルは、
よりによって和歌さんの弟は、
本気で真弥を憎んでるらしい。

だから俺は驚いたのだ。

「和歌の前に二度と現れんな！お前も、あの男も！」
「ノエル！」

和歌さんがノエルを止めようとするが、全く効果がない。
も一つ言つと、ノエルの言葉も俺に効果はない。

「ヤダ」

「なんだと！」

「つーか、自分の姉ちゃんのこと『和歌』とかゆーなよ。ちゃんと
『お姉ちゃん』って言えよ」

「お前に関係ないだろ！」

「ま、ないけど」

俺はノエルを正面から見た。

正確には見上げた。

悔しいが、身長はさすがに敵わない。

でも口じゃ負けねーぞ！

あの真弥に鍛えられてるからな！

「てめー、何の権利があつて俺と真弥にそんなこと言えるんだ？」

「俺は、和歌の弟だぞ！言う権利はある！」

「和歌さんの弟だけど、和歌さん自身じゃねーだろ！俺は、和歌さんに来るなって言われないう限りは来る」

「はあ！？」

「2人ともやめて！」

和歌さんが叫ぶと、同時に苦しそうに左胸を押さえた。

「和歌！」

ノエルが慌てて和歌さんに駆け寄り背中をさする。

「デカイ声出すな！」

「う、うん・・・」

その和歌さんを見て、俺ははっとした。

そつだ。和歌さんは、嬉しいときや動揺したとき、こうやってよく左胸を押さえる。

ただの癖だと思ってたけど・・・もしかして、いつも胸が苦しかったのか？

今みたいに？

真弥は知ってたのか？

俺は足がすくみ、動けなかった。

「帰れ！」

「・・・」

「帰れって言うてるだろ！」

「・・・」

「歩君」

少し落ち着いたのか、和歌さんが小さく俺を呼んだ。

「もちろん、来てくれていいのよ。ありがとう」

「和歌！」

「でも、」

ノエルを無視して和歌さんが続ける。

「先生とは来ないで」

「え？」

「先生とはもう会わないの」

「は？」

なんで？

と、すら言えなかった。

和歌さんが悲しげに目を伏せ、

ノエルが「ざまあ見ろ」という表情になる。

「わかっただろ？あの男に言つとけよ」

「・・・」

「4月に和歌が発作を起こしたのはあいつのせいだ。しかも、和歌の心臓に問題があるってわかったとたん、和歌に全く会いに来なくなっただぞ」

「そんなこと、あるわけないだろ！」

今度はすぐに言葉が出た。

だって、あの真弥がそんなことするわけない！

あいつだったらむしろ、毎日和歌さんに会いに来そうだ。

「あるわけないも何も、実際あいつは一度も和歌に会いに来てないんだ」

「・・・和歌さん、ほんとなのか？」

「・・・」

「そんな・・・」

嘘だろ？

「ほらな。あいつ、堀西大学出身なんだろう？これだから金持ちの坊ちゃんは、」

「うっさい！！！！！！」

俺は病院だということも忘れて、できる限りの大声で怒鳴った。

「うっさい、うっさい、うっさい！！！！！！真弥がわけもなく、そんなことするわけねーだろ！！！！」

和歌さんもノエルもポカンとする。

「行つて来る！！」

「ど、どこに行くの？」

「真弥んとこに決まってるだろ！！」

「歩君！待って！」

「うるさい！！」

俺は和歌さんにまで怒鳴って、病室を飛び出した。

来た時も、これ以上ない程のスピードで来たつもりだったけど、

今はそれ以上のスピードで走った。

真弥が和歌さんと会ってない？

8ヶ月も？

んで、和歌さんも「もう会わない」って？

その意味くらい、俺にでも分かる。

「別れる」ってことだ。

真弥と和歌さんが別れる。

って、ありえねー！！！！！！

第2部 第3話

真弥と和歌さんが出会ったのは、3年と数ヶ月か前の4月のこと。真弥が、和歌さんの通う朝日ヶ丘高校に赴任した。

その時真弥は22歳、和歌さんは16歳、高校2年生だった。

2人はすぐに恋に落ち、教師と生徒という関係も飛び越えて付き合い始めた・・・

か、どうかは知らない。

でも、少なくともお互い好き合っていた。

真弥は「月島が卒業してから付き合い始めた」って言ってるけど、和歌さんが在学中から付き合ってたんじゃないかと俺は睨んでる。

ま、そんなのは俺にとってはどっちでもいい。

2人が幸せなら。

真弥が和歌さんのことを「月島」って呼ぶから、俺も和歌さんが高校生の頃は「月島さん」と呼んでいた。

でも、和歌さんが卒業してから、俺は和歌さんのことを「和歌さん」と呼ぶことにした。

俺がこうでもしないと、

真弥はいつまでたっても和歌さんのことを「月島」と呼び続けるだろう、と思ったからだ。

それに・・・もしかしたらそう遠くない将来、和歌さんは「月島」

じゃなくなるんじゃないか、
そう思ったから。

残念ながら、俺の努力も虚しく真弥は和歌さんのことを「月島」と
呼び続けてるし、

和歌さんも真弥のことをいまだに「先生」って呼ぶけどな。
ま、これでもーでもいい。

2人が幸せだから。

それなのに。

なんでこんなことになるんだ。

真弥は一体、何考えてるんだ。

俺は信じないぞ!!!

「待てって!!」

うちの小学校で、俺の全力疾走についてこられる奴はいない。

でも、やっぱり高校生ってのは、小学生より足が速いみたいだ。

駅の改札で、俺はノエルに後ろから腕を掴まれた。

「んだよ、ノエル! 離せ! 俺は今すげー忙しいんだ!!」

「忙しい、ってあの男のところに行くだけだろ」

「だからどーした!？」

「俺も行く」

「・・・は？」

相変わらず、目に憎しみを湛えてはいるが、さっきよりだいぶ落ち着いたようだ。

俺と一緒に真弥に会いに行くなんて、どーゆー風の吹き回しだ？

俺が胡散臭そうにノエルを見ると、

ノエルはちよつと咳払いをして言った。

「その・・・さっきは悪かったよ。お前はあの男とは関係ないもんな」

なくはないけどな。

「・・・真弥に会ってどうするんだよ？」

「なんで和歌に会いに来なくなったのか、直接聞きたい。理由が心臓のことなら、殴るかもしれないけど」

それは俺も同感だ。

こうして俺とノエルは一緒に、真弥が1人暮らしているマンションへ向かう電車に乗った。

「ところでお前、小学生だろ?『ノエルさん』って言えば」

「ノエルは和歌さんの弟で、俺は真弥の弟みたいなもんだ。仲良くやろうぜ、兄弟」

「・・・」

さすがに真弥も、俺が襲撃してくることは予想していたらしい。
俺が凄いい勢いでインターホンを押すと、「やれやれ」という感じで
玄関から顔を出した。

が。

俺の後ろのノエルを見て固まった。
どうやらノエルが自分をどう思ってるかは知っているようだ。

俺は、無言で真弥を押しつけて勝手に部屋に入り、ドカッと座った。
ノエルも無言だが、さすがに勝手に勝手に上がりこむのは気が引けるのか、
一応真弥の後について、中に入ってきた。

「真弥」

「・・・なんだよ」

「梅昆布茶」

「・・・何しに来たんだ、お前ら」

真弥はため息をつきながらも、俺とノエルにちゃんとお茶を出して
くれた。

こーゆー男なんだ、真弥は。

「うーん。ちょっと濃いぞ」

「・・・ほんとに何しに来たんだ」

「わかってるだろ」

「・・・」

気まずい沈黙・・・なんかを許してやる俺じゃない。

「なんで和歌さんに会いに行かねーんだよ」

「・・・いいだろ、別に」

「よくねーよ！」

真弥が俺とノエルから目を逸らす。
らしくない。

「とつと言え！でないと・・・」

「でないと？」

「今のお前の生徒達に『本城先生は昔、教え子に手を出した』って
言いふらすぞ！」

「お、お前、なんつーことを」

さすがにそれは嫌なのか、真弥はお茶をちょっと飲むと、
ノエルの方を見て小さな声で言った。

「・・・月島から、何にも聞いてないのか？」

「聞いてない」

「・・・じゃあ、やっぱり俺からは話せない」

「なんでだよ！」

ノエルが食って掛かる。

「和歌に聞いても、『もういいの』とかしか言わないんだよ！ちゃんと説明しろ！」

「・・・」

もしノエルが高校生でなかったら、真弥はもっと渋ったかもしれないな

い。

でも、自分の生徒と同じ高校生のノエルに「説明しろ」と言われると、

やっぱり拒否できないのだろう。

真弥は今度は俺の方を見た。

「歩。お前、子供ってどうやってできるか知ってるか？」

なんだ、おい、突然。

「舐めんな。知ってるに決まってんだろ。コウノトリが運んでくるなんて思ってたねーよ」

「そうだぞ。キャベツ畑から出てくる訳でもない」

どこのキューピーだ。

「なんでそんなこと聞くんだよ」

「・・・今年の4月に俺、月島とちよつと喧嘩したんだ。ほんと、どうでもいいような喧嘩だったんだけど、

月島の奴、少し興奮してさ。そしたら突然『胸が苦しい』って言うて倒れたんだ。

で、病院に連れて行ったら医者に『生まれつき心臓に欠陥があるようだ』って言われた」

ノエルがさっき、真弥のせいで和歌さんが発作を起こしたって言うてたのは、そーゆー事だったのか。

真弥のせい、つつーか、タイミングが悪かったんだな。

むしろ、心臓の欠陥が見つかってよかったのかもしれない。

「俺も月島の両親もすげー焦ったけど、ちゃんと手術すれば大丈夫って聞いて安心したんだ。でも……」

真弥が口ごもる。

まだ、話す決心がつかないらしい。

俺とノエルは待った。

真弥がようやく言葉を続ける。

「……出産は難しいらしい」

「え？」

「妊娠はできるんだ。でも産むのは心臓がもたないかもしれない。帝王切開でも」

「……それって……」

真弥は伏せ目がちに床に視線を落とし、言った。

「月島は、一生子女を産めないんだ」

第2部 第4話

「和歌が、子供を産めない？」

ノエルが驚きを隠せず、目を見開いたまま言った。

「それで、和歌と別れたのか？」

その声に憎しみはない。

純粹に、疑問を口に出しているだけのようだ。

「・・・」

何にも言わない真弥の代わりに、俺が自分の足元を見たまま答えた。

「お前、和歌さんの弟だろ。だったら、自分は子供を産めないって知った和歌さんがどうするかくらい、

想像つくだろ」

「・・・」

和歌さんが子供を産めない、

それはつまり、このまま真弥と和歌さんが結婚すれば、真弥も子供を持ってないってことだ。

和歌さんは、自分の意思で真弥から離れたんだ。

俺は、視線を上げないまま、真弥に訊ねた。

「真弥は何にも言わなかったのかよ？俺はそんなこと気にしない、とか」

真弥がちよつと笑う。

「歩。俺のこと買いかぶり過ぎだ。俺、そんなできた人間じゃねーよ」

「じゃあ、言わなかったのか？」

「言ったださ」

「・・・」

「でも月島は、それが俺の本心じゃないってちゃんと見抜いてた。だから、もう会わないって言われた」

真弥は、放心したままのノエルを気にしながら言った。

「あの時・・・月島はすげー落ち込んでたし、俺も動揺してた。とにかく月島を励まそうと思って、

深く考えもせず『俺は子供なんていらない。月島と一緒にいられば、それでいい』って言っただ。

でも月島は納得しなかった。月島の両親にも、今はストレスを与えたくないから、

しばらく会わないで欲しいって言われたんだ」

「え、父さんと母さんに？」

ようやくノエルが我に戻る。

「それで、会いに来なかったのか？」

「ああ。連絡も取ってない。手術のこととかは、月島の両親が、教えてくれたんだ。」

でも・・・正直助かったと思ってる」

「・・・助かった？」

「俺も考える時間が欲しかった。あのまま強引に会い続けてたら、月島も辛かっただろうし」

俺は、ゆっくりと顔を上げ、真弥を見た。

できるだけ普通の目をしたかったけど、ちょっと無理だ。

「で？」

自分でも分かるくらい、声が怒ってる。

「え？」

「考えて、何か答えは出たのかよ？」

「・・・」

「つーか、何を考えるんだよ？考えたって、和歌さんが子供を産めるようになるわけじゃないだろ？」

和歌さんと別れて、別の女と結婚して子供作るのかよ？」

真弥が言葉に詰まる。

詰まるってことは、そういうことを「考えてた」ってことか。

俺は立ち上がった。

「んじゃ、さつさとそーすりゃいいだろ！？でもその代わり、和歌さんはずっと1人だぞ！？」

和歌さんのことだ。

真弥と別れたら、

しかも子供を産めないとなったら、

誰とも結婚しないかもしれない。

「子供なんか、どーでもいいだろ！和歌さんがかわいそうだ！」

俺はあらん限りの声で叫び、家を飛び出した。

「見損なつたぞ！！真弥なんか、大ッキライだ！！！」

なんだよ。

子供ってそんな大事なのかよ？

真弥と和歌さんが2人で幸せなら、子供なんていなくたっていいだろ？

俺は、泣きそうになるのを堪えながら、駅から家に向かって歩いた。
「涙が零れ落ちないように、上を向いて歩く」とかゆーけど、そんなこと恥ずかしくできるか。

人にぶつかりそうになりながらも、俯いたまま足を速める。

真弥は子供が欲しいからって、他の女と結婚して幸せなのか？
和歌さん以外の女との子供なんて、本当に欲しいのか？

それに・・・
ノエル。

なんで怒らないんだよ？

自分の姉ちゃんが、子供を産めないなんて理由で彼氏に捨てられようとしてるんだぞ？

和歌さんの方から離れたんだろうけど、真弥がそれを止めなかったことは、

やっぱり真弥が和歌さんを捨てたってことだ。

それなのに、なんで怒らないんだよ？

殴るかもって言ってたじゃないか。

殴るに値するだろ。

俺は家の前で、袖でごしごしと涙を拭った。

そして、家に入って階段を上がり、自分の部屋のベッドに突っ伏した、

かったが、腹が減っては戦はできぬ。

って、戦うわけじゃないけど。

とにかく、食べ盛りの12歳はどんなことがあると腹は減るんだ。

俺はご飯をちゃっかり2杯おかわりしてから、ようやく最初の予定通り、

自分の部屋のベッドに突っ伏した。

第2部 第5話

俺は顔をベッドに埋めたまま、手をベッドの横の棚に伸ばした。
そこに置いてある缶を開き、中のカードを取り出す。

いつもやってることだから、見なくてもこれくらいできる。

俺は目だけそのカードに向けた。

昔流行ってた、ギグレスターってアニメのトレカだ。

もう他のカードはどこかに行っちゃったけど、

この一枚だけは、今もこうして大事に取ってある。

別に珍しいカードって訳じゃない。

すげー雑魚キャラの弱いカードだ。

でも・・・

「歩。入るぞ」

軽くノックをして、お父さんが部屋に入ってきた。

「何？」

「いや、食欲なかったから何かあったのかと思って。いつも3杯はおかわりするのに」

「・・・」

「それに、いつもは夕飯の後、わたると遊ぶのに、すぐに部屋に行ったからな」

耳を澄ますと、下で渡の泣き声がした。

まだ1歳だけど、「夕飯の後はお兄ちゃんが遊んでくれる」っていう習慣をわかってるみたいだ。
今日はそれが無いから、ぐずってるんだろう。

俺が起き上がり、ベッドの端に座ると、
お父さんも俺の横に座った。

「どうした？何かあったのか？」

お父さんはこの3月まで朝日ヶ丘高校にいた。
昔、和歌さんを教えていたこともある。
真弥と和歌さんが付き合ってることも知っている。

俺は、今日の出来事を全部話した。

「月島が心臓の病気？」

「うん」

「で、手術するのか？」

「うん」

「・・・」

お父さんはまずそれに驚いた。

高校生の頃の元気な和歌さんを知っているから、衝撃が大きいんだろう。

「あ、でも元気そうだったよ。別に『いかにも病人です』って感じじゃなかったし」

「・・・そうか」

ちょっと痩せてたけど、お父さんが心配するから黙っておこう。

お父さんは、少しホツとした表情になった。

「でも、もう子供は産めないんだな」

「うん」

「だけど、早めに心臓のことが分かってよかったな。」

知らないまま手術もせずに出産してたら、確実に命取りだ」

確かにそうだ。

でも「早め」過ぎた。

どうせなら、真弥と結婚してから分かればよかったのに。

「歩」

お父さんが俺の方を見た。

その目はいつも通り優しい。

「父さんが昔、別の女の人と結婚してたの、知ってるよな？」

俺は頷く。

「父さんと前の奥さんの間には子供ができなかった」

「え？」

そう言えば、子供がいるなんて話、聞いたことがない。
気にしてなかったけど・・・

「欲しかったんだけどな。どうしてだか、できなかったんだ」
「・・・それで、別れたの？」

お父さんは首を振る。

「理由としては、『合わなくなって別れた』だ。でももし、子供がいれば、

合わなくなることなかったかもしれないし、

例え合わなくなっても別れなかったかもしれない」

「・・・」

「でも、母さんと再婚してはつきり分かった。やっぱり父さんと前の奥さんは『合わなかった』んだ。

子供がいても、別れてたと思う」

え？

「もし、歩と渡がいなくて父さんと母さん2人だけでも、100%幸せだ。別れることはない。

でも、歩と渡がいるから、200%幸せなんだ」

お父さんは自信たっぷりに言った。

「本城先生と月島もそうだと思う。でも、最初から『子供は絶対できません』って言われると、

やっぱり不安なんだ。『自分達は子供なしで本当に100%幸せになれるんだろうか』って」

「・・・うん」

「特に月島はまだ若いし、女の子だ。いつか自分も好きな人の子供を産むって、ずっと思ってたのに、

急にその夢が絶たれて戸惑ってるんだ。本城先生のことを好きなら好きなほど、な」

「うん」

「今のまま2人が結婚しても、月島は本城先生に対してずっと申し

訳なさを感じ続けなきゃいけない。

それじゃ月島も辛い。本城先生もそれが分かっているから、強引に『一緒にいたい』って言えないんじゃないかな」

・・・あ！そうか！

真弥が言っていた「考える」ってそういうことか！

一緒にいても、和歌さんが申し訳なさを感じなくていいようにするにはどうしたらいいかってことを考えてたのか！

「あはは。まあ、それだけじゃないだろうけどね。

やっぱり自分に子供ができないっていうのは複雑だと思うよ。本城先生は子供が好きだし。

それは歩が一番良くわかってるはずだ」

もちろんだ。

真弥は暇さえあれば、俺と遊んでくれるし、

俺が真弥の家に泊まりに行くなんてしょっちゅうだ。

「今は2人とも色々考えて悩まなきゃいけない時なんだ。

でも歩は、2人が別れるなんてありえないって思ってるんだろ？」

「うん」

「だったら大丈夫だ。悩んで苦しんだ分、2人の絆も強くなる」

そう、なんだろうか。

俺にはわからない。

でも、お父さんがそういうなら、そうだと思える。

「俺はどうしたらいい？2人に何にもしてやれないのか？」

「あるさ。歩にもできること」

「何？」

「考えてごらん」

「えー……。わかんない」

「あはは」

お父さんは笑うばかりで、答えを教えてくれない。

自分で考えなきゃ意味がないってことなのかな。

俺があーでもない、こーでもない、と、悩んでいると、

お父さんがちよつと真剣な声で言った。

「歩。ただ、一つだけわかっていて欲しいことがあるんだ」

「何？」

「子供っていうのは、歩が思ってるよりずっと、親にとってかけがえのないものなんだ」

「・・・」

「歩はまだ小学生だから分らないと思う。歩だけじゃなくて歩の友達もな。」

でも、いつか分かる時が来るから」

「それって、いつ？」

「うーん、いつかな。歩に、結婚したくらい好きな女の子ができたら、かな」

それじゃ、まだ当分、分かりそうにないなあ。

でも、もしかしたらノエルにはそういう女の子がいるのかもしれない。

だから、子供のことで悩んでる真弥に怒れなかったのかな。

俺にもいつか、真弥とノエルの気持ち分かる日が来るんだろうか。

俺は、手の中のカードに目を落とした。

第2部 第6話

「とりつくおあとリーと」

「は？」

「トリックオアトリート」

「もう一回」

「トリック・オア・トリート！」

「ああ、Trick or Treat、な」

数学教師のくせに、発音いいな、くそつ。

俺はムスツとして、手を差し出した。

「・・・なんだ、この手は」

「イタズラされたくないけりや、よこせ」

「お菓子を？」

「お年玉に決まってるだろ」

「・・・取り合えず、中に入れ。寒い」

あれ以来会うのは初めてだけど、

真弥は全くいつもと変わらず俺を家の中に入れ、梅昆布茶を出してくれた。

真弥らしい。

「たく。Trick or Treat、ってハロウィンだろ。ほら、お年玉」

「なんだ、ちゃんと準備してんじゃねーか」

「・・・してなかったら、暴れるだろ、お前は」

そう言えばそんなこともあったな！。

「なんか、いつもより薄っぺらくねーか？」

「どこまで図々しいんだ」

だって、毎年千円札が3枚入ってるのに、
今年のは妙に薄い。

袋から取り出してみると・・・薄いはずだ。1枚しか入ってねー。
さては、「見損なったぞ」とか言ったから、根に持ってやがるな？
ちっちゃい男だ。

「って、うわ！5千円札だ！！」

俺は思わず透かしを確認した。

「本物だ！」

「当たり前だろ」

うわー！やったあー！！

やっぱり真弥はちっちゃくねえ！

「歩も今年から中学生だしな」

「やった！サンキュー！」

俺は急いでそれをポケットに入れようとしたが・・・
やめた。

どうせ今からすぐに使うんだ。

梅昆布茶をグイッと飲み干すと（熱ちい！！）、俺は壁にかけてあった真弥のコートを取った。

「行くぞ！」

「は？どこに？」

「下に待たせてあるんだ。早く！」

「え？」

俺は真弥の手を引っ張って強引に外に連れ出した。

そして、エレベーターで一階に降り、マンションの目の前に止まっているタクシーに真弥を押し込み、

俺自身もタクシーの中へ飛び込んだ、
と、同時にタクシーが動き出す。

「歩！タクシーなんかでどこ行くんだよ！俺の車で行けば・・・」

「俺に運転させてくれるならそれでもいいけどな」

「俺が運転するに決まってるだろ」

「それだと、いつまでたっても目的地に辿りつけねーからな」

「・・・どこに行く気だ？」

そう言いつつ真弥は、タクシーがどこへ向かっているのかも予想がついているようだ。

当然だよな。

今日は1月5日。

和歌さんが大阪へ発つ日だ。

「歩・・・東京駅に行くつもりか？」

「もちろん」

真弥の運転じゃ、グダグダ言っつて車が進まないかもしれない。

「だったら、タクシーじゃなくて電車でいいだろ」

「電車だと、途中で逃亡の恐れがあるからな」

「・・・」

真弥は諦めたのか、シートに深くもたれた。

そしてぼんやりと窓の外の景色を見る。

この1週間ほど、

お父さんに言われたとおり、俺なりに考えてみた。

でも、子供の俺が、大人の真弥や和歌さんにしてやれることなんて、そうそうあるはずもなく。

現に、勝手に怒って真弥の家を飛び出したのにまたこうやって勝手に家にやって来た俺を、

真弥は怒るでもなく笑うでもない。

やっぱり真弥は大人で、俺は子供なんだ。

そんな俺にできること。

それは・・・

「真弥を強引に東京駅に連れて行くことだ！！！」

「な、なんだよ、急に」

真弥が驚いて、俺の方を見る。

「グダグダ悩んでんじゃねー！8ヶ月も何ぼやぼやしてたんだ！バカヤロー！」

「ぼ、ぼやぼやしてた訳じゃ・・・」

「そんなんじゃ、和歌さんを他の男に持ってかれるぞ！」

真弥、和歌さんが8ヶ月間も1人でお前のこと待ってたと思ってんのか？」

「え？」

真弥が固まる。

「自惚れんな。ノエルから聞いたけど、大学の男とかが何人も見舞いに来てたらしーぞ」

「・・・まさか」

「バカだなー。今までずっと真弥がいたから他の男が寄り付かなかったけど、

和歌さんみたいに綺麗な人が1人でいたら、そりゃ男はほつとかないだろ」

「・・・」

「そんな動揺すんなら、最初っから離れたりすんなよな」

「あ、ああ」

かわいそうなくらい、焦ってる真弥。

ぷぷぷ、おもしれー。

ま、そろそろ許してやるか。

「嘘だよ」

「え？」

「だから、嘘。和歌さん、心臓のことはほとんど誰にも話してないらしい。

12月に入るまで、大学も普通に通ってたって」

「・・・お前な」

真弥が本気で俺を睨む。

「でも本当に、この8ヶ月の間に和歌さんが他に男を作ってもおかしくねーだろ。」

真弥より真剣に、子供ができなくてもいいって言ってくれるような男を」

「・・・」

「もしそうだとしても、真弥には文句言う権利はないぞ。」

和歌さんと別れるってことは、和歌さんが他の男と付き合っても文句言えねーってことなんだからな」

真弥はちよつと険しい表情で、ゆっくり頷いた。

どうやら、和歌さんが他の男と一緒にいるかも、なんてこと、微塵も考えてなかったみたいだ。

和歌さんは自分に惚れてて、他の男のところにいくなんて絶対にない、って思ってるんだ。

ほんと、自惚れ屋だな。

でも、俺もそう思ってる。

和歌さんが真弥以外の男のところにいくなんて、ありえない。

そして真弥もまた、和歌さんに惚れていて、他の女のところにいくなんて、ありえない。

そんな2人だから、お父さんの言った通り「大丈夫だ」。

タクシーはゆっくりと東京駅の前に止まった。

第2部 第7話

「なんだよ、真弥が払ってくれるのか？」

「歩にタクシー代なんか払わせれるか。森田先生に怒られる。お年玉は取っとけ」

「ラッキー！」

「たく。電車で来れば500円もしないのに・・・」

真弥はブツブツ言いながらもタクシー代を払うと、東京駅の前に降り立った。

「真弥！走るぞ！」

「え？そんなに時間ないのか？」

「まだ30分以上ある」

「じゃあ、走る必要ないだろ」

「こーゆー時、男はかっこよく走って現れるに決まってるだろ」

「・・・」

真弥は、つきあってられるか、とでも言うように、ゆっくりと歩き始めた。

いや、ゆっくりって訳じゃない。

俺と一緒に、俺に合わせて歩いてくれる程度のいつもの速さだ。

俺はなんとなく安心して、真弥の横に並んで歩いた。

「そーいや、ノエルとはあの後どうなったんだ？」

「お前な」

真弥が俺を睨む。

「なんでノエル君を放置していくんだ。気まずいったらなかったぞ」
「やっぱり？つーか、真弥でも『君』とか言うんだな。やっぱ彼女の弟にはいい顔すんだ？」
嫌われたくない相手だもんな」

「・・・これ以上ない程嫌われてるけどな」

それもそうだ。

「でも、謝ってくれたよ。『誤解してて悪かった』って」

「そっか。よかったじゃん」

「お前がゆーな」

「へへへ」

その時、真弥が突然足を止めた。
俺もつられて立ち止まる。

その視線の先には、今ちょうど話題に出ていたノエルの姿が。
そして、その隣には・・・

「月島・・・」

真弥が呟く。

その表情は、なんだかとても切ないものだった。

・・・そっか。

真弥は4月からずっと和歌さんに会ってないんだ。
連絡も取ってないって言ってたから、声すら聞いてないんだろう。

真弥は、和歌さんから少し離れたところで立ち止まったまま、和歌さんを見つめていた。

和歌さんは、ノエルと両親と一緒に、改札で新幹線の切符を買っていた。

見た感じからして、ノエルと父親は見送りで、母親が和歌さんと一緒に大阪へ行くのだろう。

和歌さんが荷物を手に振り返る。

そして・・・俺達に、いや、真弥に気づいた。

「先生・・・」

和歌さんの両親もハツとして、真弥に軽くお辞儀をする。

真弥もそれに応える。

ノエルはこうなることを予想していたのか、驚いた様子はない。

真弥は軽く深呼吸をすると、和歌さんの方をしっかりと見ながら歩み寄った。

俺は動けず、真弥の背中を見つめることしかできない。

ここまで強引に引っ張ってきたけど、真弥はどうするつもりなんだろう。

別れるとか言わないかな？

でも、和歌さんを納得させるには何を言えいいんだ？

真弥が和歌さんの前で立ち止まる。

真弥は和歌さんの顔を見てるけど、和歌さんは気まずそうに顔を伏せたままだ。

ノエルも和歌さんの両親も、息を押し殺して2人を見ている。

「月島」

真弥の声に和歌さんの身体がビクツと反応する。
けど、それでも顔は上げない。

そして真弥は・・・

「俺は子供なんていらない。月島と一緒にいられば、それでいい」

へ？

俺は思わず口をポカンと開いた。

和歌さんも驚いて顔を上げる。

なんだ、それ？

だって、今真弥が言ったのは、8ヶ月、いや、9ヶ月前に、和歌さんに言ったのと同じ言葉だ。

9ヶ月前、和歌さんはそう言われたけど納得せずに、真弥と会わな

くなつた。

それなのに真弥、何考えてるんだよ？

ところが。

和歌さんは再び顔を下に向けた。

でもそれは、真弥の顔を見れないからじゃない。
ポロポロと涙がこぼれていたからだ。

その涙は・・・悲しいものじゃなかった。

そうか。

真弥が言つてた。

9ヶ月前、真弥がこの言葉を言つた時、和歌さんはそれが真弥の本心じゃないと分かつたから、
真弥と会わなくなった。

でも今は、この言葉こそが真弥の本心なんだ。
和歌さんも、それに気づいたんだ。

真弥は、泣きじゃくる和歌さんの頭をポンポンと叩いた。
ドラマだったら、こーゆー時、男は周りも気にせず彼女を抱きしめてキスしたりするもんなのに、
どこまでもドライな奴だ。

でも、真弥らしい。

そして、この2人らしい。

ホッとして2人を見てみると、ノエルが俺の横にやってきた。

「本当に、お前と兄弟になる日が来るかもな」

「俺、真弥の本当の弟じゃねーぞ」

「そんなこと、どうでもいいんじゃない？」

「そうだな」

第2部 第8話

真弥と和歌さんからちよつと離れたところで、俺とノエル、そして和歌さんの両親は、2人を眺めた。

9ヶ月間も会ってなかったのが嘘のようだ。変に感動し合うでもなく、ラブラブでもなく。

隣に座って、ニコニコと話しているだけ。まるで昨日の延長、とでも言うように。

でも、

気づけば、和歌さんが乗るはずだった新幹線の出発時間が迫っていた。

「あ。あの、和歌さんって病院行かなくていいんですか？」

俺が訊ねると和歌さんの父親が答えた。

「ああ、今日中に着けばいいから。心配してたけど・・・あの様子だと手術も大丈夫そうだな」

そう言って、和歌さんを見て目を細める。

確かに、あの笑顔ならどんな手術でも乗り越えられそうだ。

その時。

俺達の視界の端を、何か変わった形の物が変な速度で通り過ぎた。

「変な速度」ってゆーのは・・・本人は全力疾走してるつもりなんだろうけど、異様に遅い、ってことだ。

って、おい！妊婦さんだ！

走るなよ！！！！

その大きな大きなお腹の妊婦さんは、和歌さん目掛けて突進した、つもりだろうが、俺には転がってるように見えた。

「和歌あゝ！！！！」

「穂波！？」

和歌さんが慌てて立ち上がり、「穂波」という名前の妊婦さんに駆け寄る。

「何やってるのよ、穂波！」

「ご、ごめんね。こんな身体の私、今の和歌に見せられたもんじゃないとは思っただけけど・・・」

どうしても和歌に会いたくって・・・」

「そういう意味じゃなくて！」

真弥も慌てて穂波って人に近づき、今まで2人が座っていたベンチに座らせる。

「西田。お前、もうすぐ予定日じゃなかったのか！？」

「そうよ！こんなところに来てる場合じゃないでしょ！？家でゆっくりしてなきゃ！」

2人に同時に怒鳴られ、穂波はしゅんとする。

「だ、だって・・・和歌が大阪に行く前に・・・」

「分かったから。それに走っちゃダメよ。こんなところで産気づいたらどうするの？」

「・・・」

穂波が青くなる。

「穂波？」

「西田？大丈夫か？」

「先生・・・」

真弥を見上げて穂波が涙ぐむ。

どうやら、穂波つてのは、和歌さんの同級生で真弥の教え子らしい。

「・・・お、なか、が」

「うん」

「痛い・・・」

「はあ!？」

「穂波!!」

おいおい!

俺達も慌てて穂波に駆け寄った。

そして和歌さんのお母さんが穂波のお腹を触る。

「凄く張ってるわね。痛いのか？」

「痛くなったり、痛くなくなったりの繰り返しなんです・・・」

「陣痛よ、それ!」

穂波がますます真っ青になる。

そしてそれとは対照的に和歌さんが赤くなる。

「もう！穂波の馬鹿！何やってるのよ！」

「ご、ごめ、」

「いいから！お父さん、タクシー止めといて！先生、そっちの腕持つて、穂波を支えてあげてください」

「ああ」

「和歌さん！」

俺は、そのまま穂波をタクシー乗り場まで連れて行こうとする和歌さん呼び止めた。

「和歌さんも、そんなことやってる場合じゃないだろ？大丈夫なのかよ？」

「それどころじゃない！ほら、歩君も手伝って！」

「は、はい・・・」

和歌さんの剣幕に負けて、俺も穂波の荷物を手に、後を追った。やれやれ、なんだってんだ、一体！

そして・・・

「和歌、お願い・・・」

「無理」

「じゃあ、先生・・・」

「パス」

「酷い・・・」

病院の一室。

なんとかタクシー内出産は避けられたものの、
京都にいるらしい旦那さんは、とてもじゃないけど出産には間に合わないようだ。

看護婦さんが部屋に入ってくる。

「はい、じゃあそろそろ分娩室に行きましょうね」

「いや！一人でなんて産めない！お願い、和歌！立ち会って！」

「イヤ」

「なんで!？」

「怖いもの」

「ひどい」

穂波は半泣きだ。

「先生・・・」

「だから、パス」

「・・・私の裸、見たことあるくせに」

「おい！」

「え？」

全員の視線が真弥に突き刺さる。

「あ、あれは・・・だから！」

オタオタする真弥を無視して、穂波が次の獲物を探す。

「じゃあ、この際、ノエル君でも・・・」

「いいですよ」

「ほんと！？ありが」

「よくない！！！！」

和歌さんがノエルの頭をバシッと叩いた。

「何考えてるの、ノエル！いくら穂波のこと好きだからって、そんなこといい訳ないでしょ！？」

「え？ノエル君って西田のこと好きなのか？」

「もしかして、これってノエルの子？」

「まさか。それに、好きだったのも昔の話だって」

「昔って？」

「和歌の卒業式で偶然会って・・・」

「へー！やるなあ、西田」

「意外と今も好きとか？」

「だから、違うって。俺、今彼女いるし」

「え？どんな奴？」

「もー！！！！そんなことはどうでもいいんですって！！！！」

男3人で無意味に盛り上がっていると、和歌さんがキレた。

普段大人しい分、キレると怖い。

俺達は、思わず気をつけをした。

「やっぱり私が立ち会います！」

「和歌ー！ありがとう！」

「もう・・・私、どこまで穂波の面倒見なきゃいけないのよ。私だつて入院したいのに・・・」

和歌さんがよくわからない文句を言いながら、穂波と一緒に分娩室

へ入って行った。

俺達は、和歌さんの姿が見えなくなるまで黙っていたが・・・

「で、ノエルの彼女ってどんなの？」

「やっぱり西田みたいなのか？」

「穂波さんより、だいぶ抜けてる感じがなあ」

「・・・あの『穂波より』だいぶ？」

「大丈夫か、その女・・・自宅のトイレで出産するタイプだな」

「あー。そんな感じ」

「「・・・」」

結局俺達は、分娩室から産声が聞こえてくるまでずっと、ノエルの彼女話で盛り上がっていた。

男とは無力なもんである。

第2部 第9話

「先生……ごめんなさい……」

「何が？」

「私、子供を産めるようになったとしても産まないと思います……」

「

「あはは」

顔面蒼白の和歌さん。

今にも吐きそうな表情だ。

対照的に、その横で産まれたばかりの赤ちゃんを抱いてニコニコしているのは穂波だ。

「穂波……よく、あんなのに耐えられたわね」

「そう？ 見てる方が気持ち悪いのかもね。産んでる方は、訳分からないから結構平気よ？」

和歌さんが、耐えられない、という風に首を振る。

「おめでとう、西田。かわいい男の子だな」

「ありがとうございます！ でもかわいいですかあ？ 旦那に似て目つきが悪すぎると思うんですけど」

「はは、確かにりりしい顔してるな」

確かに。

弟の渡は、産まれたての時もつとしょぼしょぼした目をしてたけど、この穂波の赤ちゃんは、まるでガン飛ばしてるみたいだ。
旦那さんを見てみたい。

真弥が、穂波のベッドの脇にしゃがみこみ、赤ちゃんをじっと見た。

「生徒は俺の子供みたいなものだから・・・生徒の子供は俺にとっ
ちや孫だな」

「ふふ、そうですね。随分若いおじいちゃんですけど」

「おじいちゃんはやめてくれ」

真弥は穏やかに笑った。

「俺には沢山の子供も孫もいるんだな・・・幸せなことだ」
「そうですよ」

穂波が力強く頷く。

「私、まだまだたくさん子供産みますから。頑張っておじいちゃん
してくださいね！」

「あはは。ありがとう」

「和歌も！面倒見させてあげるから！」

和歌さんは青い顔のまま、穂波を睨んだ。

「面倒って、穂波の？子供の？」

「両方」

和歌さんが心底嫌そうにため息をついたので、俺達はみんな大笑い
した。

「じゃあな、月島。頑張れよ」

「はい」

「和歌さん、頑張つて!」

「うん。・・・色々ありがとう、歩君」

新幹線のホーム。

和歌さんは涙ぐみながら、両手で俺の手を握り締めた。
俺はなんだか気恥ずかしくなって、そっぽを向く。

「お。いつちよ前に照れてやがる」

「そんなじゃねー」

「ふふ、それじゃ、そろそろ新幹線の中に入りますね」

「ああ。いつ帰ってくるんだ?」

「2月中には」

「そつか。・・・待ってるからな」

「はい・・・」

和歌さんが左胸を押さえる。

そう、これ。

これが和歌さんの癖。

心臓が痛くて無意識にこうしてたのかと思ってたけど・・・

その表情は苦しそうではなく、幸せで一杯といった感じだ。

「真弥。俺、向こうに行ってようか?」

「なんで?」

「チューしたいだろ？」

「アホ」

たく、やっぱりドライな奴・・・と思ったら！

真弥は右手で和歌さんの耳の辺りに触れ、

俺の目の前にも関わらず、平気で和歌さんにキスしやがった！

俺がポカンとしていると、

真弥は和歌さんから顔を離し、不敵な笑みで俺を見た。

「したけりゃ、誰の前でもするさ」

「・・・けっ！！！」

そうだ！こいつはこーゆー奴だった！

ちくしょー！！

もつとからかってやりたかったけど、

真っ赤になってる和歌さんに免じて、それはやめておこう。

発車のベルが鳴り響き、新幹線はあっけなく出発してしまった。

そしてきつと、またあっけなく帰ってくるんだ。

ただいまー、って。

俺はそれを楽しみに待っていたいよう。

もう見えなくなった新幹線の方を見ながら、真弥が言った。

「歩、ありがとな」

「何が？」

「俺をここに引っ張ってきてくれて。タクシー代は痛かったけど」

「・・・みみっちい奴だな。俺が連れてこなかったらどうするつもりだったんだよ？」

「さあな」

真弥はくるつと踵を返すと、改札に向かって歩き出した。

「別れるつもりはなかったけど、手術が終わるまでは会わないでおこうと思ってたんだ。

でも、それじゃ月島は俺のことを引き摺ったまま手術に臨まなきゃいけなかったんだな。

だから手術前に会えて、ちゃんと話せてよかったよ。歩のお陰だ」

「ほんとに？」

「ああ」

「じゃあ、来年からお年玉アップだな！」

「・・・今年アップしただろ」

「アップに上限はないぞ！」

俺と真弥は笑いながら東京駅を後にした。

第3部 第1話

「たのもー!」

しーん

お。無視ですか。

「ちよつとー、中で何やってるのよー?なんかイヤらしい事でもしてるのー?

そーゆーことは、ちゃんとホテルとかで、

「うるさい!!」

凄い勢いでお兄ちゃんの部屋の扉が、中から開いた。

お陰で私は危うく、扉とファーストキスを済ませるところだった。

「何を考えてるんだ、お前は!」

「だって。あ、ヒナちゃん、こんにちは」

「こ、こんにちは」

何故か赤くなるヒナちゃん。

「さては、本当にイヤらしい事してたな?」

「ふざけるな。これのどこを見て、『イヤらしい』って言えるんだ」
「・・・」

確かに。

床に散らばっているのは、服・・・ではなくて、折り紙。

つて、なんで折り紙？

「今度、保育園でお遊戯会があるの。その時使うお面を作って」「折り紙のお面？そんなのをお兄ちゃんが手伝ってるの？意外！」「お前な」

お兄ちゃんの拳骨が飛んでくる前に、私はクッキーの缶を差し出した。

「お、気が利くな・・・つて、これ、空じゃねーか」

お兄ちゃんが私の手からクッキーの空缶を奪い取り、それで私の頭を叩く。

ポコン！

おお。いい音だなあ。

「どっちも空だからな」

「・・・。これは、集金箱なの！」

「集金箱？」

「そう。1口1万円、1人5口以上でお願いします」

今度は何回も空缶が頭を打った。

「おーまーえーは！いつからマルチ商法を始めたんだ！？」

「い、いたい！違うつて！本城先生の結婚祝いのために・・・！」

「おつ。なるほどな」

そう言くと、切り替えの早いお兄ちゃんは、さっさと財布を取り出

した。

「全く、最初っから素直に・・・」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

ここは逆らわない方がいい。

ビッグスポンサーが逃げてしまう。

「でも5万も出せないぞ。俺、まだ学生だし」

お兄ちゃんは1万円札を1枚、クッキーの缶に入れる。

ヒナちゃんは「本当は3万円くらいあげたいんだけど・・・」と言いつつ、2万円入れてくれた。

じゅうぶん過ぎるくらいだ。

「ありがとう！」

「で、何をあげるんだ？」

私は左手を腰にあて、右手の人差し指を立てて口の前に持っていた。

ついでにウィンクしてみる。

「ひ・み・つ」

「吐けー！でないと、こっちが吐きそうだー！」

お兄ちゃんに首を絞められ、危つく本当に吐きそうになりながら、私は吐いた（ややこしい）。

それを聞いて、ヒナちゃんが目を輝かす。

「うわあ！素敵なプレゼント！ね、三浦君！」
「そうだな」

珍しくお兄ちゃんも素直に頷く。

「舞ちゃんが考えたの？」

「サルが」

「え？」

「いえ、何でもありません」

「まあ、そーゆーことなら協力してやるよ」

「協力？」

腕組みをしながら、何やら思案するお兄ちゃん。

こういう時のお兄ちゃんは本気だ。

「手を広げようと思ったたらどこまででも広がってしまうからな。取

り合えず、俺達が卒業した時の、

3年5組だけでいいだろ」

「？」

「俺は男に連絡するから、ヒナは女に連絡しろ。全員は無理でも、結構集金できる」

「お、お兄ちゃん！」

「他ならぬ本城先生のためだからな。しかも相手は同級生の月島だし」

私は、ニヤツとするお兄ちゃんに抱きついた。

「お兄ちゃん！大好き！！」

「うわー！！気持ち悪い！！やめろ！！！！」

失礼ね！。

「すげー！大金だな！」

「何人に連絡がつくかはわからないけどね。つけば、みんな本城先生と和歌さんのためなら、

お金は出してくれると思うって、お兄ちゃんが言ってた」

「おお、頼もしい」

私はベッドの上でうつ伏せになりながら、森田と携帯で話していた。もう夏休みだから、こうしないと連絡が取れない。

「俺達のクラスからは1人千円で、だいたい4万くらいか。

三浦の兄ちゃんの代の金と比べたら微々たるもんだな」

「そうね。でも気持ちの問題だよ」

「そうだな」

アルバイトもしていない高校生の千円。

高いと見るか安いと見るかは人によるだろうけど、

大事なのは先生のために少しでも何かしたい、という気持ちだと思う。

「後は、俺の親からのお祝儀だな」

「そっか。森田のお父さんは先生の元上司なんだっけ？」

「和歌さんが1年の時の担任でもあるし」

「そっなの！？」

「うん。これだけ集まりや、ちょっとプレゼントの内容、考え直してもいいかもな」
「そうね」

楽しい。

こうやって森田と携帯で話せるのも楽しいし、
誰かへこっそりプレゼントを用意する計画を立てる、っていうのも
凄く楽しい。

それに、森田のことを見直した。

大好きな本城先生と和歌さんを喜ばせるために、こんなこと思いつ
くなんて。

2人のことを本当に想っている森田だからこそ、思いついたんだろ
うけど、

そこまで2人のことを想える森田を純粋に尊敬できる。

「準備が大変だなー」

「うん。でも夏休みだから時間あるし、私もできる限り手伝うから
！頑張ろうね！」

「ああ、ありがと。明日早速、見に行くか」
「うん！」

私は思い切り元気良く答えた。

第3部 第2話

8月最初の日。

私と森田は早速、先生へのお祝いの下見をした。

プレゼントする物の目星は森田があらかじめつけていたけど、実際見てみると、あれこれ悩んでしまい中々決まらない。

「俺はそんな悩んでないだろ。三浦が、あっちがいい、でもこっちも、とか言うから決まらないんだ」

「だって！せっかくならいい物がいいじゃない！」

「そうだけど。ま、こーゆーことは女に任せるか。予算内で好きにしろよ」

「うん！」

それから一緒にお昼ご飯を食べて、森田がクラスのメーリスで、先生が結婚すること、お祝いを買いたいから夏休み明けに集金したいということを流した。

もちろん、先生には絶対に内緒で！と念押しも忘れない。

反響は予想以上だった。

メールを流して10分もしないうちに、ほとんどの生徒から返信が来たのだ。

大半は「すごい！めでたいね！」みたいな内容だったけど、一部の女子からは「・・・寂しい」と言った正直な反応もあった。

「ふふ、さすがは本城先生。人気があるね」

「そのせいで、宇喜多先生との浮気疑惑が浮上したけどな。どっかの誰かのせいで」

「うわー、誰？そのデリカシーのない奴。ひどいねー」

「・・・」

タイミング良く、また森田の携帯が鳴る。
助かった。

森田は私を片目で睨みながらメールを読んでいたけど・・・
読み終えたところで、両目を見開いた。

「どうかしたの？」

「いや、天野からなんだけど」

「何？もしかして、千円も払えない！とか相変わらず粘着系な文句？」

「違うって。むしろ逆。夏休みの間、バイトしてるからもっと出すって」

バイト！？

朝日ヶ丘はバイト禁止なのに！
でも、この際目を瞑ってやろう。

「・・・牧野と」

「へ？」

「だから。メールにそう書いてある。『夏休みの間、牧野とバイトしてるから』って」

牧野って、茜！？

「何それ！私、そんなの聞いてない！」

「俺も。今初めて知った。なんだよ、天野の奴、三浦のこと狙ってたんじゃないのかよ。」

お前が天野のことあんまり『粘着系だ』とかゆーから、諦めたのかな」

「茜だつて、森田のこと！」

吹っ切れたみたいではあつたけど！

私は速攻で茜に「どーゆーこと！？」ってメールをした。
が。

「返事、なんて？」

「・・・内緒」

「なんでだよ」

森田が訝しげに私を見る。

だけど、「天野君は森田君にメールしたのに、どうして舞から返事が来るのかなー？」なんてメール、
読めない。

いや、本城先生へのプレゼントを一緒に探してるだけなんだけど・
私には下心（？）があるから、なんとなく森田にはこのメールの内容は言いにくい。

「おい」

「だから、内緒だつて」

「そっじゃなくって」

森田が私をじつと見る。

え？

何？

でも、よく見ると、森田の視線は私ではなく、私の手元・・・つまり、携帯に向けられていた。

「あれ、どうしたんだよ？」

「あれ？」

「まりもっこり」

「・・・ああ」

まりもキティちゃんね。

私はわざと森田の口真似をしてやった。

「捨てた。『どっかの誰か』が、『きもっ！』とか言うから」
「・・・」

あの時はショックだったし、思わずキティちゃんを捨ててしまったことも後悔したけど、
今となつてはあれでよかったって思える。

お陰で自分の気持ちに気づくことができた。

「・・・悪かったよ」

森田がいつになく落ち込んだ口調で言う。

お。

何よ。珍しいじゃない。

「いいの。過去の恋は忘れるわ。これからは新しい恋に向かって走るの」

私はどっかの漫画の主人公のセリフを思い出しながら、カッコつて言ってみた。

森田は「何気取ってんだよ」と笑い飛ばすかと思ったら・・・

「・・・」

「・・・何よ。何、本気で責任感じてるのよ。もういいんだって」
「うん・・・」

私がそう言っても、森田の顔は晴れない。

そんな申し訳なく思うくらいなら、あんなこと言わなきゃいいのに。

それから私がいつもみたいに馬鹿な話をいくら振っても、

結局森田の機嫌は直らず、他にすることもないのでそのまま別々に帰ることになってしまった。

何だ。何なんだ。

私が悪いの？

私は「きもっ！」って言われたから、それもそうだと思ってキティちゃんを捨てただけじゃない。

なんで森田が不機嫌になつて、私が気を使わなきゃいけないのよ！

私は何も悪くないもん！

憤然としながら電車に乗っていると、ふとヒナちゃんのことを思い出した。

（この切り替えの速さはお兄ちゃん譲りだ）

次の駅には、ヒナちゃんの勤める保育園がある。

元3年5組の女子生徒からどんな反応があったか聞いてみたい。

うちのクラスの女子みたいに「寂しい」って人がいたりするかも。

携帯の時計を見ると、午後3時だ。

ヒナちゃんの保育園は午前7時から開いてるから、もし朝一の担当なら、

そろそろ仕事が終わる時間かもしれない。

切符がもつたいないな、とは思いつつ、私は電車が止まると迷うことなく降りた。

ヒナちゃんの保育園と言えば、前に来たのはお兄ちゃんと一緒にヒナちゃんを尾行したときだ。

あの時は、ヒナちゃんにも間宮さんって人にも迷惑をかけてしまった。

まさかまた、ヒナちゃんが男の人と歩いてるなんてことは・・・

さすがになかった。

私が保育園につくと、ちょうどヒナちゃんが保育園の玄関をほうきで掃除していた。

「ヒナちゃん！」

「あれ？舞ちゃん。どうしたの？」

「ヒナちゃんの同級生の反応が知りたくって」

ヒナちゃんはクスクス笑いながら、ほうきを掃除用具入れにしまった。

「ちょっと待っててくれる？もう少しで仕事終わるから」

おお、ラッキー！朝一の当番だったらしい。

ヒナちゃんは保育園の扉を開け、中に入って行った。

子供用なのか、低い場所に取り付けられている窓から中を覗くと、小さな子供達が、ヒナちゃんが前にうちで作っていたお面を頭につけて、

お遊戯の練習をしている。

かわいいなあ。

ヒナちゃんは他の先生達に「お疲れ様でした」とお辞儀をしながら、またこっちへ向かってくる。

だけど・・・

その足取りは、私には随分と重いものに見えた。

第3部 第3話

「凄い反応よ」

「ほんと？」

「うん。先生と月島さんが付き合ってたってだけでも、大騒ぎなのに、結婚するなんてね」

「大騒ぎ」ってことは、悪い意味での「大騒ぎ」も有り得るけど、ヒナちゃんの表情を見る限り、良い意味での「大騒ぎ」のようだ。

ヒナちゃんと歩きながら、私は胸をなでおろした。

ヒナちゃんの足取りもいつものように軽やかに、
というか、いつものようにポテポテとした可愛い物に戻ってる。

さつき、保育園の中での憂鬱そうなヒナちゃんを見た時は、
お祝いということで、何か問題でもあったのかと冷や冷やしたけど、心配なさそうだ。

「今度のお盆休みに、みんなで会うことにしたの。その時にお金は集めるね」

「ありがと！」

「ほとんどの人が社会人だから、かなりの額が集まるかも」

「だといいなあ。凄いプレゼントができそうだね！」

「うん、でも・・・」

「え？」

ヒナちゃんが足を止める。

ちようどその前を小さな女の子が、お母さんと手を繋いで横切った。

ヒナちゃんの保育園にいたくらいの、小さな女の子。
まだ2歳くらいだろうか。

ヒナちゃんは、ちょっと寂しそうな表情でその女の子の後姿を見送った。

「ヒナちゃん？」

「あ、ごめん。あのね、もう結婚してる人とか、子供もいる人とかもいて・・・」

そういう人からは無理にお金はもらえないかも」

「うん。それはいいよ。そもそもお兄ちゃんとヒナちゃんの同級生に協力してもらえるだけでも
ありがたいんだから」

「うん・・・」

またヒナちゃんが沈む。

こーゆーヒナちゃん、前にも見たことがある。
・・・いや、ヒナちゃんじゃない。

こーゆー表情の人、前にも見たことがある。

あれは確か・・・そう、お兄ちゃんだ。

ヒナちゃんが浮気してるかもしれない、って心配してた時のお兄ちゃん。

ってことは！！！！

「お、お兄ちゃんってば！！！！」

「え？何？」

急に大きな声を出した私に驚いて一歩引いたヒナちゃんの両肩を、私はガシツと掴んだ。

「ヒナちゃん！お兄ちゃんが浮気してるかも、って思ってるでしょ！？」

「え、そ、そんなんじゃ・・・」

「じゃあ、どうしてそんな寂しげな顔してるのよ！？」

ヒナちゃんは浮気なんてするはずない。

お兄ちゃんもヒナちゃんに惚れ込んでる。

でも！

お兄ちゃんはモテる。

ヒナちゃんとか少し喧嘩でもした拍子に、思わず他の女の人とホテルへ・・・

ってことはじゅうぶん有り得る！！！！

許せんっ！！！！！！

「ヒナちゃん！お兄ちゃんどこに殴り込みに行こう！なんなら、三行半を叩きつけてやってもいいから！」
だりはん

「み、みくだりはん、って。古いね、舞ちゃん。それに私、三浦君と結婚してる訳じゃ・・・」

「どーせいずれ、結婚するつもりだったんでしょ！？」
「・・・」

ヒナちゃんが急に口を噤んだ。

あれ？何、その反応？

「ヒナちゃん？」

「・・・分らないの」

「え？」

「三浦君が何を考えてるか」

「？」

ヒナちゃんは、堪え切れないといった感じで、目に涙をいっぱい溜めながら一気に言った。

「最近、三浦君全然会ってくれないの。この前三浦君の家に行ったのだって、

凄く久々だったのよ？お盆だって、会う約束もないし・・・会いたいつて言っても、

忙しいからって断られるし・・・」

「本当に忙しいんじゃない？来年試験だから、勉強しなきゃいけないだろうし」

「それは分かってる。でも・・・私、避けられてる気がする」

「まさか！」

私は思わず笑ってしまったけど、

ヒナちゃんは本気で落ち込んでいる。

さっきの森田といい、何なんだ、一体。

「それだけじゃないの」

「へ？」

「前までね、三浦君、産婦人科じゃなくて他の科を目指してたの。」

『あんまり忙しすぎてもヒナと会う時間が減るから』って。それなのに急に産婦人科なんて、

凄く激務の科を希望するようになった。もちろん、三浦君の気持ちを応援するけど・・・」

「・・・」

そう言えばお兄ちゃん、前に本城先生にもそんなこと言ってたな。

あの時、「奥さんを診てあげます」ってお兄ちゃんに言われた先生が、嫌な顔をしたのは、

その「奥さん」がお兄ちゃんの同級生の和歌さんだからだろう。

そりゃ、和歌さんだって嫌だろうな。

それはともかく。

ヒナちゃんには内緒にしてるけど、実はお兄ちゃんは医学部に入りたての頃は、

外科を目指してた。怪我の手術とかするとこね。

でも、外科だと緊急オペとかがザラで、お医者さんの中でも特に忙しい。

お兄ちゃんは悩んでたけど「やっぱり外科はやめようかな」って言うってた。

私はそれはヒナちゃんのためだと思ってたし、実際そうだったんだろう。

で、それから今ヒナちゃんが言ってた「産婦人科じゃなくて他の科」を目指してたんだけど・・・

どうしてまた忙しい産婦人科に希望を変えたんだろう。

「ごめんね、舞ちゃん・・・三浦君には内緒にしてて」
「うん」

ヒナちゃんは落ち込んでる。

お兄ちゃんを応援したいって気持ちと、
もっと自分のことを考えて欲しいって気持ちの、
板ばさみなんだ。

ただでさえ、医学部なんかに行ってお医者さんを目指しているお兄
ちゃんは、

他の人より社会人になるのが遅い。

来年国家試験を受けて、それから2年くらいの研修医期間があつて・
・

それからようやくお医者さんになれる。

それでもまだ新人で、見習いみたいなもんだ。

順調に行かなければ、もっと時間がかかる。

お兄ちゃんの彼女だからこそ、ヒナちゃんは不安なんだろう。

周りの友達が結婚していく中、自分はいつ結婚できるかもわからない。
い。

いくら待ってても、お兄ちゃんはモテるから他の女の人にパツと乗
り換えちゃうかもしれない。

先生と、ヒナちゃんの同級生の和歌さんとの結婚を目の当たりにし
て、

ヒナちゃんはますます「結婚」というのを意識してしまってる。

先生達へのお祝いのお手伝いなんて・・・

ヒナちゃんに悪いことしちゃったかな・・・

第3部 第4話

おかしい。

私は、不信感たっぷりの目でお兄ちゃんを見た。

「・・・なんだ、その目は」
「ベーターにー」

先生達へのお祝いを準備するにあたって、どうしても和歌さんの好みを知れたかった私は、誰に聞けばいいか悩んだ。で、最適な人物を思いついた。

森田の話の中に出てきた、西田穂波さんだ。

陣痛のさなか、和歌さんに会うために東京駅に駆けつけた挙句、和歌さんに立会い出産をしてもらったくらいなんだから、よっぽど仲がいいんだろう。

（てゆうか、なんて滅茶苦茶な人なんだ）

彼女なら、和歌さんの好みがわかるに違いない。

そう思って、お兄ちゃんに「西田穂波さんって人の連絡先知ってる？」と聞いたら、

お兄ちゃんは意外な反応を示した。

「知ってる」と言うでもなく「知らない」と言うでもなく。

「な、何だよ急に！なんで西田さんが出てくるんだよっ！」ってな

感じ。

普段でもじゅうぶん怪しいけど、ヒナちゃんからあんな話を昨日聞いたばかりだから、
ますます怪しく見える。

私は横目でお兄ちゃんを軽く睨みながら聞いた。

「で、知ってるの？知らないの？」

「・・・高校時代の携帯なら知ってるけど、変えてたらわからない」
「じゃあ、いいや。ヒナちゃんに聞くから。女の子同士だから、知ってるかも・・・」

「いい！俺が調べるから！」

「・・・」

やっぱりおかしい。

いつものお兄ちゃんなら、こんな面倒臭いこと、わざわざ自分がやる、なんて言わないのに。

でも、お兄ちゃんの妹を15年とちよつともやってると、

ここで深く追求してもお兄ちゃんが何も話してくれないのは分かる。

私は素直にお兄ちゃんに任せることにした。

「本城先生、おはようございます」

「・・・おはよう」

「なんで睨むんですか」

夏休みに、わざわざ学校へやって来た生徒になんたる仕打ち。

「それはこっちのセリフだ。あの後、大変だったんだからな」

「あの後？」

「忘れたとは言わせないぞ。月島に宇喜多先生のこと暴露しやがって」

「自業自得でしょ」

「俺は何も悪いことはしてない・・・ってお前に言ったら余計ややこしくなるから、

もー何も言わない」

ひどいなー。

「夏休みなのに学校なんか来やがって。一体何の用だ？勉強の質問なら受け付けないぞ」

「どーゆー教師ですか。勉強の質問じゃありません。ちょっとした事情聴取です」

「帰れ、帰れ」

よつぽど「大変」だったのか、先生は手をヒラヒラさせて、私を職員室から追い出そうとする。

「せつかくいい物、持ってきたのに」

「いい物？」

「はい」

私は先生の机の上に、コトンとそれを置いた。
先生の目が光る。

「おお！これは！京都の有名なお茶屋の梅昆布茶！一缶千円もするんだぞ！」

どんだけ梅昆布茶マニアなんだ。

梅昆布茶選手権があつたら是非出場して欲しい。

「お中元でもらつたのが家にあつたんです」

「・・・お前、教師を買収する気か？」

「される気ありませんか？」

「ある」

先生はそう言うや否や、梅昆布茶の缶を開けて匂いをかいだ。
辺りに柔らかな梅の香りが漂う。

「すげー！」

私は梅昆布茶の缶をひょいっと先生の手から奪い取った。

「質問に答えてくれたらあげます」

「・・・卑怯な奴め。で、何を聞きたいんだ？」

先生はいそいそとコップの準備をしながら言った。
切り替えの速さは三浦兄妹に負けてない。

「西田穂波さんって覚えてます？」

「覚えてるも何も、」

「裸見たんだから覚えてますよね？」

「・・・あゆむ・・・森田に何か吹き込まれたな？」

「で、覚えてるんですか？」

「昨日、うちに来た」

「ええ？」

あ、でも不思議じゃないか。

和歌さんの友達だもんね。

先生に西田さんの連絡先を聞けばいいか、と一瞬思っただけど、

「なんで西田の連絡先なんて知りたいんだ？」と逆に聞かれるのは分かってるから、

やめておこう。

「西田がどうかしたのか？」

「えっと。お兄ちゃんと話してる時にたまたま西田さんの話題が出たんですが、」

「ちょっと待て」

先生が遮る。

「なんでお前が兄貴と話してる時に西田の話題が出るんだ？月島と仲の良い西田の」

「えーっと・・・」

「さては、俺と月島のこと、話したな？」

「あー・・・」

「・・・はあ。これであつと言う間に広まるな」

もう広まってますけどね。

「とにかく！西田さんの話が出たとたん、お兄ちゃんがすごい変

な反応したんです。

お兄ちゃんと西田さんって昔何かあったんですか？」

「三浦兄と西田？さあ？」

「とぼけないでください」

私は梅昆布茶の缶に蓋をした。

「ほ、本当に知らないんだって！俺がこの学校に赴任したのはあいつらが2年の時で、

その時にはもう、三浦と飯島は付き合ってたし、三浦と西田は普通に友達だったんだ。

特に仲が良いつて訳でも、悪いつて訳でもなかった」

「ほんとーですかあ？」

「ほんとだつて。兄貴に聞いてみるよ」

それが無駄だから先生に聞いてるんです。

でも、先生はとぼけてる風でもない。

本当に知らないんだろう。

よし。かくなる上は。

「じゃ、先生。さようなら」

「おい。本当にそれ聞くためだけに学校に来たのかよ？」

「はい」

「宿題の質問とかは？」

「やってないんで、ありません」

「・・・。おい、梅昆布茶は置いていけよ」

第3部 第5話

「西田さん？」

電話の向こうで、ヒナちゃんが意外そうな声を出す。

「知ってる？」

「もちろん。3年生の時、同じクラスだったし。」

あ、三浦君と私と月島さんと西田さん、みんな3年5組で本城先生のクラスだったの」

「そうなんだ」

ヒナちゃんが少し笑った。

「いきなり西田さんの名前出されたら、そりゃ三浦君は挙動不審になるわよ」

「どうして？」

「三浦君、1年の時、西田さんに片思いしてたから」

「お、お兄ちゃんが片思い！？」

今すぐ隣のお兄ちゃんの部屋へ飛んで行って、お兄ちゃんをおちよくりたい衝動に駆られたけど、
なんとか思いとどまる。

「それで！？2人は付き合ってたの！？」

「ううん。結局三浦君は振られちゃったの」

「わー！」

お兄ちゃんにそんな過去があつたなんて！！

私は足をバタバタさせた。

凄い弱味を握った！

これではばらくは、デカイ顔させないぞ！

「で、仕方なく私と付き合ってくれたの」

「・・・仕方なく？」

あんなにヒナちゃんに惚れてるのに？

まあ、ヒナちゃんの鈍さはチンパンジー並だ。

いや、そんなこと言ったらチンパンジーが怒るかな。

お兄ちゃんが西田さんのことを好きだったのは本当だろうけど、ヒナちゃんと「仕方なく」付き合ったのかどうかは大いに疑問が残る。

「そっかー。それでお兄ちゃん、私がヒナちゃんに西田さんの連絡先を聞くんて言ったら、焦ったんだ」

「うん。・・・ねえ」

「ん？」

ヒナちゃんが一拍置いて、言う。

「私が西田さんに連絡取ってみようか？」

「え？」

「私も高校の時の携帯しか知らないけど、愛実ちゃん・・・西田さんと仲が良い子なら連絡取れるから、

聞いてみる。で、私が西田さんに連絡してみるわ。西田さんも、い

くら三浦君の妹とは言え、

見ず知らずの人からいきなり『会いたいです』って言われてもびっくりするだろうし」

「あ、それもそうか」

森田から色々聞いたから、勝手に西田さんのこと知ってるつもりになっただけ、

西田さんは私のことなんか全然知らないんだもんね。

私がヒナちゃんに「じゃあ、お願いするね」と言つと、

ヒナちゃんは「代わりにお願いがあるんだけど」と言い出した。

「私も一緒に、西田さんに会いに行きたいの」

「もちろんいいよ！むしろ、こっちがお願いしたいくらい！」

「ありがとう。じゃあ、西田さんと日程決めたら連絡するね。

舞ちゃんは都合いい日とか悪い日、ある？」

「ない。万年暇人だから」

「ふふ。あ、三浦君には内緒にしてね。じゃあ」

「うん。ありがとう！よろしくね！バイバイ！」

ラッキー！

ヒナちゃんも一緒なら百人力・・・かどろかはわからないけど、1人より遥かに心強い！

私はいいい気になった勢いで、ここのところ避けていた番号に電話してみることにした。

「あ、サル？」

「どうした、チンパンジー」

いつも通りのサルサルした声が聞こえる。

「聞いて！今度、西田穂波さんに会いに行くことになった！」

「え？あの三浦並に変な女？」

「そうそう、って、おい」

「あはは」

笑い声・・・

よかった、元気みたいだ。

心配して損した。

「あとね、お兄ちゃんと同級生達、お盆に会うらしくって、その時
お金集めてくれるって」

「そつか。んじゃ、実際の支払いはその後になるな」

「うん。ねえ、いつプレゼントするの？」

「9月12日が和歌さんの24歳の誕生日で、その日の午前中に入
籍するんだって。」

日曜で学校も休みだからな。その後によつ

「楽しみー！」

「うん。・・・なあ、三浦」

森田の声から笑いが消えた。

私も思わず緊張する。

もしかして、まだキティちゃんのこと気にしてるのかな？
本当にもういいのに。

よし、先を制してやろう。

「何？デートのお誘いならお断りよ」
「はあ？」

一気にお互いの緊張が解ける。

「そーか。せつかく誘ってやろうと思ったのに」

え？

「宿題」

「うわー！一緒にやらせていただきます！」

「どこまでやった？」

「全然」

「・・・マジで？」

「マジで」

「・・・」

おおお！これまたラッキーだ！！！！

森田のため息もなんのその、ますますいい気になった私は、
電話を切った後、更なる名案を思いついた。

「やっぱり、予習ってのは大事よね。うんうん、私って偉いじゃん」
と、宿題を全くしてないことを棚に上げ、一人でブツブツ言いなが
らリビングにおいてある本棚へ。

一番下の段に、お兄ちゃんと私の生まれた時からのアルバムがずら
っと並んでいる。
それと一緒に、卒業アルバムも。

お兄ちゃんの高校の卒業アルバムを取り出す。

西田穂波さんに会うからには、やっぱり顔ぐらい知っておかないとね
ー、

と言いつつ、実は昔の先生や和歌さんを見たいだけだったりもする。

少し色褪せた分厚いアルバム。
独特の香りがする。

カバーをそつと取って、早速3年5組のページを探す。

「うわ！本城先生、全然変わってない！」

左上に一番大きく写っているのは本城先生の笑顔。

この時は確か24歳だから、今より6歳も若いはずなのに、
本当に変わってない。

髪が今より少し短いくらいだ。

うーん。こうやって写真で見ると、ほんと、モデルみたい。
教師にしておくのはもったいない。

先生の写真の下に、3年5組全員の顔写真が載っている。

ぱっと目についたのは、やっぱりお兄ちゃん。
他の男子生徒と比べて断然かっこいいもん。

次に見つけたのはヒナちゃん。
ぷぷ。

ヒナちゃんも変わってない。

そして・・・

「あ！和歌さん！」

女子生徒の中で、明らかに1人だけ雰囲気が違う。

化粧もしてないのに綺麗で大人っぽくって、和歌さんの写真だけ浮き上がって見えるようだ。

でも、先生やヒナちゃんと違って、今より遥かに幼い。

今は本当に「大人」って感じだけど、この頃はまだ「大人っぽい」だ。

へー・・・

こんなんだったんだ。

先生は、この和歌さんを好きになったんだ。

うんうん、分かるよ、先生。

こんな人が教室にいたら、目を引くよね。

私はこの後、「あ、この人かわいい！」とか「あ！この人、お兄ちゃんの友達だ！」とか、

1人で盛り上がり、結局本来の目的を果たす前にお兄ちゃんに、「何やってる！！！」と、

アルバムを取り上げられてしまったのだった・・・

第3部 第6話

お兄ちゃんが片思いしていた人。

和歌さんの弟が片思いしていた人。

本城先生に裸を見られたことのある人。

陣痛来てるのに、東京駅に走ってきた人。

和歌さんに強引に立会い出産させた人。

物凄い先入観を持ちながら、私は西田穂波さんと会うことになった。
待ち合わせ場所は、新宿駅地下のとあるカフェ。

先についた私とヒナちゃんは、ジュースを飲みながら西田さんを待っていた。

「何、ニヤニヤしてるの？舞ちゃん」

「どんな人なのかなーと思って。面白い人？」

「面白いつていうか・・・すごい人、かな」

「すごい？」

ヒナちゃんが頷き、照れくさそうに言う。

「一途つていうか、気持ちが強いつていうか。私、ちょっと憧れてたんだ」

「へー」

これはまた、私の中の「西田穂波データ」に新たな項目を追加せねば、

と思っていたその時、ヒナちゃんがちよつと腰を浮かした。

「あ、来た」

私も立ち上がり、振り返る。

「西田さん！」

「あー！飯島さん！久しぶりー！」

明るい声でお店に入ってきた「西田穂波」さんは、私の期待を裏切らない容姿をしていた。

柔らかそうな髪を肩の上でクルンと内巻きにしている、人懐っこい瞳は、大きくて少し茶色がかっている。

小柄で、子犬を思わせる可愛い感じの人だ。

だけど、何より期待を裏切らなかったのは・・・

「西田さん・・・もしかして、妊娠してる？」

「もしかしくなくても、してるわよ。このお腹見たらわかるでしょ？」

と、ニコニコ笑いながら、出っ張ったお腹をポンツと勢い良く叩く。

確かに見ればわかるんだけど、ヒナちゃんが一応訊ねたのも頷ける。

西田さんの服装は、「いかにもマタニティ！」って感じのワンピースとかではなく、

なんと黒っぽいスーツだったのだ。

でも、身体にちゃんとフィットしてるから、これも妊婦さん用のスーツなんだろう。

「ギリギリまで仕事しようと思ってるの。法廷で破水する勢いで行

くわ」

西田さんが言うと、洒落にならない。

って、法廷??

「そうなんだ、おめでとう!でも、気をつけてね」

「うん、ありがと。えっと、」

西田さんが私の方を見る。

いや、見つめる。

大きな瞳が、いやにキラキラ光っている。

て、照れくさいぞ・・・

「この子が、三浦君の妹さん!?」

「うん、三浦舞ちゃんって言うの。舞ちゃん、この人が、西田穂波さん。」

あ、今はもう『西田』じゃないんだっけ?」

「うん、でも『西田』でいいよ。うわー!!三浦君に妹さんがいたなんて!!」

はじめまして!西田です!うわー、うわー!さすが三浦君の妹さん!美人だね!」

「は、はじめまして・・・三浦舞です・・・」

「よろしく!」

元気な人だな。

放っておいたら、興奮してピョンピョン跳ね出しそうなので、私は慌てて椅子を勧めた。

西田さんは椅子に座ってからまだ、私のことを満面の笑みで見つめてくる。

「三浦君の妹、かあ・・・あんなかつこいいお兄さんがいるなんて、羨ましいなあ・・・」

あれ、西田さん。お兄ちゃんのこと、振ったんじゃなかったんでしたっけ??

そう突っ込もうと思ったけど、西田さんは急に、はっ！と言う感じで、

メニュー表を広げた。

「まだ注文してなかった！何にしようかなー？あ、フレンチトーストだって、美味しそう！

でも、さっきお昼ご飯食べたとこだしなー。どう思う、飯島さん？」

「え？あ、うん。ここのフレンチトースト、美味しいよ」

「やつぱり！？この写真、凄く美味しそうだもんね！あ・・・でもちよつと甘い物控えないと、

一応妊婦だしなー。旦那に怒られる。仕方ない、キャラメルミルクって飲み物にしよう」と

それも凄く甘そうですけど。

・・・な、なんて言うか、オーラの強い人だ。
なんか目が離せなくなる。

私が啞然としてると、ヒナちゃんがクスクス笑いながら言った。

「ふふ、西田さんってこういう人なの」

「はああ」

「ちよっと、こーゆー人って何よ」

西田さんはちよっとムスツとしたけど、ウェイトレスが持ってきたキャラメルミルクなる物を一口飲むと、

「美味しい！」と言って、たちまち機嫌を直した。

「西田さん、忙しい上に身体が大変な時にごめんね」

「平気、平気！忙しいのはいつもだし、こんな身体も2回目になるとへっちゃらよ。」

今日はこの後、どうするの？」

私は慌てて座り直した。

「今日はわざわざありがとうございます。あの、この後、先生と和歌さんのお祝いで、

一緒に選んでもらいたい物があるんです。和歌さんの好みが、私じやわからなくて・・・」

「任せて。和歌のことなら、なーんでもわかるから！」

西田さんが自信たつぷりに頷く。

すると、ヒナちゃんが、おずおずと言い出した。

「あの・・・その前に、西田さんに聞きたいことがあるんだけど・・・」

「」

「何？」

「うん・・・」

何故か私のことを気にするヒナちゃん。

「私、外で待ってようか？」

「あ、ううん。いいの・・・あのね」

ヒナちゃんは改めて、向かいに座っている西田さんに向き直る。

「西田さんは、どうして結婚したの？」

第3部 第7話

「子供ができたから」

ずっこけることを許されるなら、
椅子から転げ落ちたいところだ。

ヒナちゃんの質問に、西田さんは1秒も迷うことなく、サラッと答えた。

ま、まあ・・・二十歳で出産してるんだから、その可能性が高いとは思ってたけど・・・

それにしても、こつもあつさり言つてのけるとは。

質問しておきながら、ヒナちゃんもちよつと戸惑う。

「で、できたから？」

「うん」

相変わらずニコニコしながらキャラメルミルクを飲む西田さん。

それが何か？と言つ感じた。

でも、さすがに私とヒナちゃんの動揺を感じ取ったのか、付け足した。

「彼とは、ずっと一緒にいるつもりだったから、憧れはあつたけど結婚自体はしてもしなくてもよかったの。

一緒にさえいられば、別に結婚はしてもしなくてもいい、ってい

うか。

でも、やっぱり子供ができたら、結婚しておいた方が色々楽だから」

ああ・・・そういうことか。

西田さんと旦那さんにとって、婚姻届という物に重みはないんだ。それよりも、実際に一緒にいること、実際に「夫婦」することが、大切なんだ。

その気持ち、なんとなくわかるな。

戸籍上夫婦でも、実質的に夫婦じゃない夫婦なんて、意味ないもんね。

西田さんの話を聞いてポカンとしていたヒナちゃんが、「あつ」と言った。

「もしかして、西田さんの旦那さんって高1の時に付き合ってた人？」

「うん」

「そつか・・・その後、2年も離れ離れだったのに、気持ちは離れてなかったんだね」

「えへへ」

ヒナちゃんは、眩しそうな目で西田さんを見つめた。

さっきヒナちゃんは、西田さんに「ちょっと憧れてた」と言っていた。

それは、西田さんのこういうところに、なのかもしれない。

2年も好きな人と離れていたのに、結局その人と「夫婦」になった

西田さん。

二十歳で、子供ができて結婚した西田さん。

また新たに追加された「西田穂波データ」に、私の興味がムクムクと膨れてきた。

「西田さん！」

「はい？」

「私、西田さんのこともっと知りたいです！」
「は？」

頭の中でメモ帳を開く。

「旦那さんとはどうやって知り合ったんですか!？」

「それは、ノーコメント」

と、いたずらっぽく片目を瞑る。
いちいち可愛い人だ。

「んじゃ、どうして2年も離れてたんですか？」

「彼、私より2歳年上で、高校卒業して京都に行っちゃったの」

「じゃあ、遠恋？」

「ううん。別れた。私は、それから別の彼氏もできたし」

おお、また新たなデータが。

「でも、結局別れて、私も卒業して京都へ行ったの」

「へええ！情熱的ですね！」

ヒナちゃんが付け加える。

「西田さんて、こう見えてもK大法学部卒の検事さんなのよ」
「・・・えっ」

K大？京都の？
んでもって、検事？
なんだその高次元な人種は。

「何、その、『こう見えても』って」
「ふふ、ごめんね。だって西田さん、黙ってれば普通の・・・高校生みたいだもん」

西田さんが口を尖らせる。

「一応成長してる訳ね。高校生の頃は、本城先生に『中学生』って言われてたから。
でも飯島さんに言われたくないけど」

それはそうだ。
はつきり言って、この3人だと女子高生の集まり以外の何物でもない。

「じゃあ、K大に進学して京都に行ったんですね？」
「うん。で、大学2年の時にできちゃった婚。ぶっちゃけ、できちゃった、ってゆーか、
できさせられた、ってゆーか」

「え？」
「彼に、意図的に妊娠させられたようなものだから。私が『子供できたかも』って言ったら、
満面の笑みで『おお！よくやった！よし、穂波の親に挨拶に行こー』

ぜ』って言われたもん」

これは旦那さんにも是非会わせてもらわねば。
面白すぎる。

「でも、西田さん。そんな若くして子供産むのって、抵抗なかったんですか？」

「全然」

またサラッとやってのけてくれる。

「抵抗あるなら、最初から妊娠するようなことしないし」
なるほど。

「それに・・・」

西田さんの顔から少し笑みが消える。

「妊娠が分かる少し前に、和歌が子供を産めないって知ったの。だから、こうやって妊娠して、

子供を産める環境にあるだけでも、感謝しなくっちゃ」

「・・・」

ヒナちゃんが少し目を大きくして、私を見る。

私は、軽く頷き話を進めた。

「西田さんの親とかは？怒られませんでした？」

「怒られたっていうか、諦められた。前から彼のことは紹介してたから『やっぱりこうなったか』って。

むしろ和歌に怒られたわ。『穂波はだらしないんだから!!』」

西田さんが和歌さんの真似をする。

凄く似てて、思わず笑ってしまった。

「で、大学を半年休学して東京の実家で産んだの」

「半年だけ？子育てはどうしたんですか？」

「それは申し訳ないけど、お母さんにしばらく京都に来て手伝ってもらった。

それと、彼の知り合いでやっぱり小さなお子さんがいる人が京都にいて、その人に預けたり、託児所使ったり。色んな人に助けてもらって、なんとかやってこれたわ」

きつと凄く大変だったんだろうけど、西田さんはまたサラッと言った。

でも、今度ばかりはその口調に感謝の気持ちを隠せないでいる。

「すごい・・・参考になります！」

「私なんか参考にしちゃダメよ。やっぱり普通に婚約して結婚してそれから子供産んでる友達見ると、

なんかうらやましいもん。私、結局結婚式もしてないし」

「そうなんですか・・・」

この段階になって、ようやく気づいた。

西田さんて今、どこに住んでるんだろう？

「西田さん、今日つてもしかしてわざわざ京都から来てくれたんですか!？」

「あはは、まさか。仕事で東京に配属されたから、今はこの近くに

住んでるの」

「ビックリした……。でも、ありがとうございます。じゃあ、旦那さんだけ京都でお仕事してるんですか？」

すると西田さんは急に声を潜め（そんな必要ないんだけど）、眉を寄せて言った。

「それが、聞いてよ！仕事辞めて、今はあんなデカイ図体で専業主夫してるの」

「……」

あんなデカイ図体と言われても。

西田さんは、またパツと笑顔になって普通の大きさの声で言った。

「ま、私より遥かに家事全般完璧だし子育て上手だから、助かるけどね。」

「うちは、私が働いて、旦那が家事やる方が、合ってるみたい」「そうなの？」

ずっと黙って聞いていたヒナちゃんが急に口を挟む。

「そういうの……嫌じゃないの？つて、ごめん、失礼な質問だけど……」

「全然。嫌じゃないし、失礼じゃないよ」

また笑顔でサラリ。

「それで上手く行ってるんだもん。私、せっかくたくさん勉強して司法試験受かったから、

いっぱい仕事したいの！この子も産んだら、育児休暇は取らずに産後休暇だけ取って、

すぐに復帰するつもり」

「産後休暇って・・・じゃあ、産後8週間で復帰するの？」

「うん。できれば6週間で復帰したい。和歌に負けてらんないわ！」

つ、強い・・・！

きつと、こうやってサラリと色々答えられるようになるまで、

西田さんも沢山悩んで、沢山困ったんだろう。

でも、そういうのを乗り越えて、こんなに強くなったんだ。

こうやって強く笑えるようになったんだ。

なんだか凄く、かつこいい。

「あ、そうそう。でも彼も内職して、自分のお小遣いくらいは自分で稼いでるよ」

「内職？封筒作りとか？」

「舞ちゃん・・・発想が古いね・・・」

「違うんですか？じゃあ、造花作り？」

「ふふ、ハズレ」

西田さんは相変わらずのピカピカした笑顔で言った。

「絵を描いて売ってるの」

第3部 第8話

カフェで人生勉強をさせてもらった後、
3人で結婚祝いを選び、仕事へ行くという西田さんを駅まで見送った。

「面白い人！」

「うん。相変わらずだったなあ、西田さん」

私とヒナちゃんも切符を買い、西田さんとは違う路線のホームへ降りる。

「今日はありがとね、ヒナちゃん」

「ううん。こっちこそお礼を言わなくちゃ。ありがとう。西田さんに会って本当によかった」

「え？」

ヒナちゃんは私を見て微笑んだ。

西田さんのような強い笑顔じゃないけど、
温かい穏やかな笑顔だ。

「私最近、

『これから私、どうなるんだろう？いつ結婚できるんだろう？三浦君はどう思ってるんだろう？』

って、ずっと考えてた。でも、そんなこと考える前に、

もっと自分がどうしたいのか、そのためには何をしなきゃいけないのかを考えなきゃね」

「ヒナちゃん・・・」

「自分が進んだ道の先に、『結婚』があれば結婚したいし、なければまた探せばいいだけよね。
何が何でも結婚しなきゃいけないわけじゃないし」

結婚しない……という選択肢はお兄ちゃんが許さないと思うけどね。

「西田さんの話を聞いて、なんか元気が出てきた」

「あ、それは私も。西田さんって、元気を振りまく人だね」

「うん、昔からそうなの。三浦君が好きになるのもわかるでしょ？」

「うーん、そうだね」

でも、お兄ちゃんと西田さんはちょっと合わない気がする。

お互い強すぎるって言うか。

お兄ちゃんにもっと度量がないと、西田さんを受け止めきれないと思う。

「ヒナちゃんくらいが、ちょうどいいよ」

私は心からそう言った。

お兄ちゃんは、いい人に巡り合えたと思う。

西田さん流に言えば、ばつちり「合う」二人だ。

私はどうだろう？

森田と「合う」のかな？

……衝突してばかりだけど。

「え？」

「うっん。なんでもない」

「そう？……あ、そうだ。月島さんのことだけど、月島さんが子

供産めないつて、本当なの？」

「あー・・・うん」

和歌さんのプライベートなことだから、お兄ちゃんにもヒナちゃんにも言つてなかったのだ。

「今は元気なだけだね。昔心臓の手術したんだって。それで・・・

」

「・・・そうだったんだ」

ヒナちゃんが心苦しそうに、下唇を軽く噛む。

ヒナちゃんは子供が大好きだ。保育園の先生をやってるくらいだもん。

和歌さんの心情を想うと辛いんだろう。

「そのこと、さりげなく広めといてもいいかな？」

「え？」

「何にも知らなかったら、

みんな、『結婚おめでとう！子供できるの待ってるね！』とか言っちゃうと思うんだよね」

あ！そっか！

そんなことまで、考えてなかった！

「先生の教え子だったら、先生の子供を見てみたいってみんな思うと思うし」

「うん・・・そうだね。お願いするね」

どうしよう、私のクラスメートにも言つといた方がいいかな。

でも、そんなことしたら学校中に広まっちゃいそうだな。

森田に相談してみよう。

ホームに電車が滑り込んで来た時、タイミング良く、いや、悪く、ヒナちゃんの携帯が鳴った。
ヒナちゃんは、メールか電話かだけを確認して、無視しようとしたけど……

「あ、三浦君から電話だ」

私だったら電源を切る勢いで無視だけど、ヒナちゃんにとっては彼氏だから、
そうも行かないだろう。

「いいよ、出て。次の電車にしよう」

「ごめんね。……もしもし」

電車に乗り降りする人を避け、私とヒナちゃんはホームの隅に移動する。

「うん、大丈夫。今？舞ちゃんと新宿駅に……今から？」

ヒナちゃんが私を見る。

どういう意味だろう？

どうやらお兄ちゃんは、今から会おうと言ってるみたいだけど、ヒナちゃんは、

ここで私と別れよう、と思ってるのか、一緒に来て欲しい、と思ってるのか。

ま、私としてはどっちでもいい。

帰ってもすることないし（宿題しろよ、と自分で突っ込みたくなるけど）。

私は指でOKマークを作ると、

ヒナちゃんは、ありがとう、と言うように頷いた。

「じゃあ、舞ちゃんも一緒にいい？・・・うん、わかった。行くね」

ヒナちゃんは携帯を切ると、私に言った。

「ありがとう。三浦君が、今から会いに来て欲しいって」

「どうしたんだろ？」

「うん・・・なんか、私に会わせたい人がいるんだって。舞ちゃんにも会ってもらいたいつて」

「・・・会わせたい人？」

ヒナちゃんの顔が曇る。

最近疎遠気味だった彼氏に突然「会わせたい人がいる」って呼び出されるなんて・・・

おお、

彼氏いない暦15年の私でも、簡単に想像がつくぞ。

お兄ちゃんが物凄い美女を連れて現れて、いきなり、「こいつと結婚することにした」とか言ってヒナちゃんを泣かせるんだ。

で、その美女は、

「ごめんなさいね。でも、あなたより私の方が、この人に合うと思うの」とかしれつと言った。

私の役回りとしては、泣くヒナちゃんを慰めるってところだろう。

でも、この舞様はそんなじゃあ、納まらないぞ。
その美女に右アッパーをお見舞いしてやる！

ついでにお兄ちゃんにも、膝蹴りだ！！！！

第3部 第9話

シュツシュツ！

「・・・舞。何、ファイティングポーズ取ってんだ」
「別に」

新宿からお兄ちゃんに呼び出されたホテルまで電車と徒歩で45分。
遠路はるばる来てやった。

が！！！！！！

ラウンジのソファで、長くて綺麗な足を組んでいたのは、私が頭の中で描いていた美女そのものだった。

お兄ちゃんと言えば、その横でまさに「しれっ」と座っている。

くそう。

なんて絵になる2人なんだ。

私とヒナちゃんは、2人の素人離れたオーラにすっかりヤラれてしまった。

「お兄ちゃん。話の内容によっちゃあ、兄妹の縁切るからね！」
「おお。それは願ったり叶ったりだな」

・・・別の手を考えよう。

じゃあ、やっぱりコレか。

シュツシュツ！

「・・・ごめんな、桜子。変な妹で」

「ううん。ユニークで素敵な妹さんね」

そう言う笑顔にも全く嫌味がなく、見とれそうになる。

いかん、いかん。

私は、なんとか「桜子」さんの欠点を探そうと、全身をジロジロ見る。

上品なピンクベージュの巻き髪。

つけまつげやエクステではない、自然に長くボリウムのあるまつげ。

その下の魅力的な瞳。

筋の通った鼻に、魅惑的な唇。

透き通るような白い肌。

そして豊かな胸とくびれたウエスト。

か、完璧だ。

しかも「桜子」って。

どっかのご令嬢か？

「あ・・・もしかして、本竜桜子ほんりゅうおんこさん？」

「あら。私のこと、ご存知？」

ヒナちゃんの質問に、桜子さんが頷く。

ほんりゆうさくらこ。

やっぱり、どこぞのご令嬢に違いない。

「なんだ、ヒナ。知り合いか？」

「ううん。大学で有名だったから。凄く綺麗な人が医学部にいるって」

お兄ちゃんとヒナちゃんの通う大学は、かなりマンモスな大学だ。その文学部だったヒナちゃんが医学部の桜子さんを知っているくらいなのだから、よっぽど有名なのに違いない。

こんな人をヒナちゃんに紹介したいだなんて、お兄ちゃん、何のもりだろう。

私とヒナちゃんが顔を見合わせたとき、桜子さんが優雅な笑みを浮かべて言った。

「私、三浦君とこれからの人生を一緒に歩みたいと思ってるの」

は？

あまりに想像通り事が運ぶと、人間逆にあっけに取られるもんだ。

私は右アッパーも忘れて、啞然とした。

たぶん、私の横のヒナちゃんも同じ顔をしてると思う。

お兄ちゃんが焦る。

「桜子！誤解招くような言い方するなよ！ヒナはともかく、妹は凶暴だから！」

なぬ！？

「ふふ、ごめんなさい。私のこと、敵視してるみたいだから、ちょっとからかってみたくなっただけ。
でも、ある意味間違っではないでしょ？」

「ま、まあな」

からかってみた？

ある意味間違っではない？

なんじゃ、そりゃ。

でも、一つだけ確かなことがある。

それは、お兄ちゃんがこの桜子さんには素を見せてるということ。
つまり、お兄ちゃんにとって心許せる人であるってことだ。

まあ、これからの人生と一緒に歩むんだったらそうだろう。

とつとどっかへ歩んで行ってしまえ。

「・・・三浦君」

「ヒナ。ごめんな、誤解するなよ？」

「うん・・・」

ヒナちゃんが小さくため息をつく。

落ち込んでるというより、自分を落ち着かせるためのようだ。

「さあ、三浦君。どう説明しましょうか？」

「そうだな……。ヒナ、俺さ、この桜子と将来一緒に働こうと思ってるんだ」

「え？」

私とヒナちゃんが一緒に声を上げる。

桜子さんが、鞆からパンフレットらしき物を取り出し、私とヒナちゃんの前に置いた。

そこには可愛い文字で「マミーホスピタル」と書かれてある。

「マミーホスピタル？」

「ここ、桜子のお父さんがやってる病院なんだ」

「へ??？」

お兄ちゃんの説明によると。

桜子さんのお父さんがやっているこの「マミーホスピタル」は、産婦人科と小児科がある病院で、桜子さんのお父さんは院長であり小児科の代表者でもある。

産婦人科の方の代表は別のお医者さんがやっているらしい。

で、桜子さんは、小児科のお医者さんになり、この病院を継ぐ予定なのだから。

「じゃあ、お兄ちゃんはここで産婦人科の先生をやるの？」

「ああ。前に一度見学させてもらったことがあって、その時から気

に入ってたんだ」

「・・・ふーん」

そういうことか。

それで「これからの人生と一緒に歩む」なんて言い方をしたわけね？

「それで、ヒナにお願いがあるんだ」

「私に？」

そこからは桜子さんが引き継いだ。

「飯島さんって保育園の先生なのよね？」

「はい」

「うちの病院内に、近々託児所を作る予定なの。母親が診察の時に、子供を預かる為にね。」

それで、もしよければ、飯島さんにそこで保母さんをやって欲しいの」

「え？保母さん？私が？」

ヒナちゃんはかなりビックリしている様子だ。

まさかこんな話だとは思いもしなかったんだろう。

もちろん私もだ。

「2人目の出産のために診察に来ているお母さんって、たいてい上の子供も連れてくるのよね。」

でも、待ち時間とか診察時間とか、子供は大人しくしてられないし、お母さんも妊娠中なのに、

ゆっくりできないし。分娩中も、誰かが上の子を見ておかないといけないじゃない？」

ヒナちゃんが頷く。

「小児科の方も、例えば子供が2人いて、1人が風邪を引いて診察してる時に、

もう1人を託児所に預けられれば、風邪が移る心配もないし」

桜子さんがパンフレットを開く。

その真ん中辺りに「来春、託児所開設予定」の文字が大きく出ている。

「三浦君にこの話をしたら、『彼女が保育士やってる』って教えてくれて。どうかしら？」

「どうって・・・でも、今の保育園は辞めないといけないのよね？」

「それはそうね。もちろん強制はしないわ。飯島さんが、やってもいいと思ってくれるなら、

是非来て欲しいの。それに、」

桜子さんが笑顔でチラッとお兄ちゃんを見た。

「飯島さん、いずれ三浦君と結婚するんでしょう？2人が同じ病院で働いていたら、何かと便利だと思うけど」

第3部 第10話

「で、答えがこうなる」

「・・・」

「おい、三浦！聞いてるか？」

「・・・」

森田は諦めたのか、ニヤニヤする私を無視して、自分の宿題へ関心を戻した。

お兄ちゃんつてば、あんなこと考えてたんだ！
やるなあ！

でも私のニヤニヤの原因は、お兄ちゃんの就職先や、
ヒナちゃんの引き抜きに関してだけじゃない。

なんと、あの次の日、お兄ちゃんは正式にヒナちゃんにプロポーズ
したらしい！

しかもヒナちゃんは、

「まだ、いいよ。三浦君が本当に結婚したくなったらしよう」と返
事したのだ！！

どうやら、お兄ちゃんはヒナちゃんの浮気事件（誤解だけど）をき
っかけに、

本気で結婚を考え出したようだ。

よほどヒナちゃんを手放したくないらしい。

桜子さんの病院の託児所にヒナちゃんを誘う件は前々から考えていて、

結婚とは直接関係はないらしいけど、
やっぱり、将来結婚しようと思ってるからこそ、誘おうなんて思ってたんだろ。

以前のヒナちゃんなら、間違いなく泣いて喜んでプロポーズを受け
たはずだ。

でも、今のお兄ちゃんは、結婚したいという気持ち半分・焦り半分、
だということ
ヒナちゃんはきちんと分かっている、「まだ、いい」と返事したの
だ。

お兄ちゃんが本当にヒナちゃんと結婚したいと心から思える日まで、
ヒナちゃんは待つと言う。

ヒナちゃんは、
「三浦君がお医者さんになるまでは、そんな日は来ないんじゃない
かなあ」

と言っていたけど、その言葉の裏には、
「私はその日を楽しみに待っている。それまで私は私で頑張る」
と言っている感じがした。

お兄ちゃんが、希望を産婦人科に変えたのも、
このところヒナちゃんとのデートを減らしていたのも、
結婚や仕事に関するのことを、色々調べていたかららしい。

も！。

何よ。

私の心配を返してよ！

「ふふふ」

「・・・気持ち悪いぞ、三浦」

「男の人って、馬鹿よねえ」

「なんだ？俺に喧嘩売ってんのか？」

「何言ってるの。森田は、男の人ってゆーより、オスでしょ」

「メスに言われたくないけどな」

やっぱり？

結婚祝いの方も、西田さんのお陰で一段落し、

今日は森田と学校に来て宿題をやってる（とゆーか、手伝わせてる）
んだけど、

どーにもはかどらない。

これと言うのも、お兄ちゃんのせいだ！

「あ！森田！じゃなかった、サル！」

「・・・森田で間違ってたないぞ」

「先生達が子供を作らないことって、みんなに言っというた方がいい
んじゃないかな？」

「え？なんでだ？」

森田が机から顔を上げる。

私は、ヒナちゃんが心配していたことを告げた。

「ふーん。三浦の兄ちゃんと同級生はともかく、俺らの同級生には黙ってよーぜ」

「え、でも・・・」

「大丈夫だつて」

何故か自信満々の森田。

つて、何に自信があるのか。

でも、森田は先生と和歌さんのことなら何でも分かっているようだ。
森田が大丈夫って言っただから、大丈夫なんだろう。

「ねえ。どうして先生達は結婚式しないんだろう」

「昔から先生は『結婚式の準備なんて面倒臭くってやってらんねー』
って言ってたよ。
でもそれは多分、和歌さんの身体を気遣って、そう言ってるんだと思う」

「和歌さんの身体って、そんなに弱ってるの!？」

森田は、ゲラゲラ笑った。

「全然！すげー、元気だよ。なんも心配しないでいいのに、先生が勝手に心配してるんだ。」

「やっぱ昔、目の前で和歌さんが倒れるのを見てるから、怖いんだろ」
「・・・そうね」

あの豪快な先生でも臆病になることがあるんだ。

それだけ和歌さんのことが好きで、心配ってことなのかな。

もし、今私がここで倒れたら、森田はどうするだろう。

人並みには心配してくれるだろうけど、それは、

先生の和歌さんに対する心配や、

お兄ちゃんのヒナちゃんに対する心配とは、全くの別物だ。

逆に私はどうだろう？

絶対の絶対の絶対にありえないけど、もし森田が倒れたら、先生が和歌さんを心配するように、心配できるかな？

自分が森田を好きだってことは認めざるをえないけど、この気持ちがどこまで深いものなのか、正直自信ない。

万一、森田に子供ができないなんてことがあったら、それでも私は「結婚したいくらい好き！」と胸を張って言えるだろうか。

「・・・ねえ、森田。森田って好きな女の子、いるんだよね？」

「な、なんだよ急に」

「その子のこと、どれくらい好き？その子が和歌さんみたいに倒れたら心配する？」

その子が、子供できないとしても好きでいられる？」

「・・・」

森田は心底嫌そうに「はあ！？」と言う顔をする。

「なんで、そんなこと聞くんだよ」

「私、そこまで誰かを好きになれるのかなあ、と思って」

「・・・うるさい。そんな心配する前に、宿題が終わるかどうかを心配しろ！」

何故か森田が怒りだし、私の教科書をバンバンと叩いた。

第3部 第11話

2学期の始業式の日。

どうやら本城先生は校長先生に、結婚することを報告したようだ。

大人の世界のことはよく分からないけど、

こーゆーことは、あまり生徒には情報が流れないようにするもんだと思う。

普通は。

でも、私が、本城先生が校長先生に結婚の報告をしたらしい、ということを知っていることから分かるように、先生が結婚するというニュースは、始業式が終わる頃には全生徒の間に広まっていた。

なんでかって？

それは、我らが愉快的保志校長先生が、

「どうせ本城先生の女性関係のことは、いつもすぐに噂で広まるので」と言っ

て、始業式場で、先生の結婚を発表したから。

なんだその「いつも」って。

本城先生って、そんなに女性関係の話題が多いのか。多そうだけど。

とにかく校長先生の話に、生徒はもちろん教師の間にも衝撃が走った。

どうやら先生達もまだ知らなかったらしい。

そして体育館はすぐに、お祝いの拍手とがっかりのため息に包まれた。

本城先生も、まさかこの場で大々的に発表されるとは思ってもいなかったのか、

校長先生の話の最中、真っ青になっていたけど、あちこちから「おめでとうございます！」と声をかけられると、照れくさそうな笑顔になった。

ちなみに、校長先生もさすがに結婚相手が朝日ヶ丘の卒業生ということは言わなかった。

でも、これもそのうち広まるかもしれない。

「なんだよ、先生！彼女どこるか婚約者がいるならいるって言えよ！」

「おめでとー！」

始業式の後、HRのために教室へ入ってきた本城先生に早速お祝いと非難(?)の嵐が浴びせられる。

うちのクラスの生徒はみんな、先生が結婚することを夏休みの間に

森田のメールで知っているけど、そこは、さっき知ったばかり、という風を装った。

「お、おう・・・」

さすがの本城先生もタジタジだ。

森田は頬杖をついて、笑いを噛み殺している。

「相手ってどんな人!？」

「ほつといってくれ・・・」

「ダメ!年上?年下?」

「・・・下」

「いくつ?」

「・・・6つ」

教室からどよめきが起きる。

「若っ!犯罪だぞ!」

「な、なんでだ!どこがだ!」

30歳と24歳だと犯罪じゃないですけどね。

23歳と17歳だと犯罪じゃないですかね。

しかも教師と生徒だし。

「早く子供作って、見せろよなー」

誰かが言った何気ないその一言に、私の心臓はドキッと音を立てた。

やっぱり！

こういうこと、言う奴がいる！

・・・でも、普通に考えれば当然だよな。

言った生徒は、悪気がないのはもちろん、祝福のつもりなんだろう。

私は、冷や冷やししながら先生を見た。

でも先生は、バツの悪そうな顔をするでもなく、相変わらずうつとうしそくに答えた。

「お前らみたいに手のかかる芋栗かぼちゃの世話してたら、自分の子供なんて育てる気力なくなる」

みんなが弾けたように笑う。

「ひでー！なんだよ、その芋栗かぼちゃって！-」

「お前は芋だな」

「うわ！」

・・・。

私は森田を見た。

森田も私を振り返る。

「な。心配いらないだろ？」とその目は言っている。

本当だ。

心配なかった。

いつもの先生だ。

そして、なんて先生らしい答えなんだ。

私は、ホッとして、みんなの笑いに加わった。

その後、先生は必死で結婚から話題を逸らそうとしたけど、さすがに生徒も食いついて離れない。

やれ、どこで出会ったんだ、とか（ここです）、
やれ、どーゆーところ好きになったんだ、とか、
やれ、プロポーズはいつどこでしたんだ、とか、

とにかくみんな、思いつく限りのことを質問しまくった。

「あ、それ私も知りたい！」というような質問もあったけど、森田を通じて知ることできるから、今は勘弁してあげよう。

そう思い、先生から視線を外して、なんとなく窓の外を見た。

だから、たまたま気づいた。

窓際で、暗い目をしている女子生徒に。

その子は、市川明菜^{いちかわあきな}という子で、
私は挨拶する程度の仲だ。

と言うのも、市川さんは余り社交的とは言えない性格で、多分私みたいにいるさい女は嫌いだから。

前髪をぱつつんと揃えていて、日本人形を思わせる容姿。
そのせいか、見た目悪くないんだけど、ちょっと暗いイメージで近づき難い。

口数も少なく、笑うことも余りない。

そんな市川さんが、みんなにからかわれて照れている先生をじっと見ている。

笑うでもなく、軽蔑するでもなく。

なんか・・・ねつとりとした、嫌な視線だ。

私は、市川さんから目が離せなかった。

第3部 第12話

「梅昆布茶」

「・・・ここはファミレスじゃないんだぞ」

先生はそう言いながら、放課後、職員室に遊びに来た私に梅昆布茶を出してくれた。

相変わらず、美味しい。

「なんだ？勉強の質問か？」

「まさか」

「・・・。そう言えば三浦、まだ夏休みの宿題が出てないぞ」

「そんなのありましたっけ？」

「お前の周りには三浦兄とか森田がいるのに、なんでそんなに勉強がはかどらないんだ」

「本人のやる気の問題」

「その通りだ、バカヤロウ」

私は梅昆布茶が入った紙コップを口につけながら、目だけ先生に向ける。

心なしか、疲れているようだ。

「・・・先生」

「ん？」

「何か仕事してていいですよ。私、ここで勝手にお茶飲んでますから」

「お前は、ここをなんだと思ってるんだ」

「梅昆布茶カフェ」

「・・・」

先生は、もう何も言うまいと決めたのか、仕事を始めた。

今度は目を、職員室の入り口に向けてみる。

そこには、こちらの様子を伺っている市川さんが1人、立っていた。さつき、市川さんが数学の教科書を抱えて教室を出て行ったから、私は鞆を掴んで猛ダッシュ、とまではいかないまでも、大急ぎで先生のところへやってきた。

先回り成功だ。

市川さんは、それでもここまで来ようかどうか、職員室の前で悩んでいるようだったけど、

私が中々立ち去りそうにないと諦めたのか、ようやく戻って行った。

でも、まだ教室で機会を伺ってるかもしれない。

職員室の窓からは校門が見えるから、市川さんが下校するのを見届けるまで、

ここで静かに粘ろう。

私はゆっくりと梅昆布茶を飲んだ。

「三浦」

「はい」

「ありがとな」

「・・・気づいてたんですか」

「ああ」

先生は机から顔を上げると、誰もいなくなった職員室の入り口を見て、ため息をついた。

「モテるつても楽しじゃありませんね」

「そうだな」

先生は謙遜しなかった。

でも自慢してる訳でもない。

今の先生にはモテることが、本当に「楽しじゃない」のだ。

始業式の日以来、私は市川さんを気をつけて見ていた。

市川さんは、教師と関わりを持ちたがらないタイプの生徒であるにもかかわらず、

以前から本城先生とだけはよく話していたし、職員室へ質問なんかにも行っていた。

前まで、私はそれは単に本城先生が話しやすい先生だし担任だからだと思ってた。

でも、そうじゃないみたいだ。

ここ数日、市川さんの先生に対する態度は目に余る。

と言っても、先生に明らかに失礼な態度を取っている、とかではない。

職員室へ質問へ行くという生徒としては当たり前前の行動を取っているだけだ。

ただし、頻繁に。

ううん、頻繁どころじゃない。
だから先生も困っている。

とにかく普通の休み時間にしろ、お昼休みにしろ、放課後にしろ、
時間さえあれば、市川さんは本城先生のところへ質問へ行く。

おかげで、先生は自分の仕事が全くできず、
毎日毎日、市川さんが下校してから随分遅くまで残業しているよう
だ。

だけど先生も、生徒に「質問があるんです」と言われれば拒むわけ
にいかない。

本当に先生に用事がある他の生徒もいるから、職員室から逃げるわ
けにもいかない。

しかも市川さんは頭が良く、いや、ずるがしこく、他の先生や生徒
の目につかないように、
こういうことをやってるのだ。

早い話が、ストーカーである。

先生の結婚に嫉妬してのことだろう。

「もっとズバツと『やめてくれ』とか、せめて『もっとまとめて質
問に來い』とか言ったらどうですか？」

「お前みたいは何の下心もなく仕事の邪魔しに來る生徒になら言え
るけどな。」

ああいう生徒には、そうハッキリと言えないんだ」

「どうして？」

「市川みたいな奴は初めてじゃない。昔、『付き合ってくれないなら自殺する』とか言ってきた生徒もいる」

「・・・」

「俺があんまりきついこと言っつて、何か取り返しのつかないようなことになったら大変だからな」

「楽じゃない」どころの騒ぎじゃないようだ。

先生は「でも、」と言った。

「ちよつと市川はやりすぎだな・・・学校内だけならともかく」

「え？学校の外でも？」

「ああ。最近、家の周りでも視線を感じる。どこかに隠れてるのか、姿は見えないけど」

こ、怖すぎる！！！！

正真正銘犯罪だ！！！！

「最初は俺の気のせいかと思ったんだけど、月島も『なんだか駅からつけられてる気がする』って、

言っつた」

「先生！警察に話した方がいいですよ！」

「そんなことできる訳ないだろ。市川は俺の生徒だ。月島も、

『これくらいのこととは覚悟してたから平気です』って言ってくれてるし、市川の気が済むまでほっとくよ」

その前に先生の体力の限界が来そうだ。

それに、万が一ってこともある。

そうだ！

「先生、邪魔。もう少し右に寄ってください」
「は？」

私は先生の椅子を強引に右に押しやり、別の椅子を先生の横に押し込んだ。

そして、鞆から夏休みの宿題を取り出し、先生の机の端っこに置く。
数学・英語・生物、選びたい放題だ。

「なんだ？」

「私、これから毎日放課後ここで夏休みの宿題をします」

市川さん除けだ。

黙っていれば、先生の邪魔にはならないだろう。

先生も、私が横にいちやあんまり集中できないかもしれないけど、市川さんより遥かにマシだと思う。

「・・・三浦、ありがとう。でも、どんだけ宿題が残ってるんだ、お前」

「まーまー。このストックがある限り、先生は市川さんから逃げられるんだから！」

ゆっくりやります。数学は一番最後までいいでしょ？」

「・・・仕方ないな。でもサボるなよ」

「はい。ちゃんとやりますって！」

私は、のんびりと英語の教科書を開き、勉強の準備を始めた。

第3部 第13話

「お。今日も本城先生にしごかれてるな？頑張れよ」

「まだ夏休みの宿題、終わってないの？本城先生も大変ね」

「なんだ三浦。押しかけ女房か？」

・・・

毎日放課後、本城先生の隣で夏休みの宿題をしている私を見て、色んな先生がご心配して下さる。

ほっといてくれ。

「ま、もう9月も7日目なのに、まだ夏休みの宿題が終わってないのは事実だな」

「そうですねー。先生、これ教えてください」

「なんだ、英語か。どれどれ？」

私は本城先生に英語のプリントを差し出した。

それにしても、学校の先生の横で宿題をすると、こうもはかどるものなのか。

あつと言つ間に、残すは英語ちよつとと数学のみとなった。

だって、本城先生。数学はもちろん、他の科目でも私レベルの質問には答えられるようで、

いつの間にやら家庭教師と化している。

「たく、これじゃ市川と変わらないじゃないか・・・」

「まーまー！下心がない分、楽でしょ？」

「そうだな。そーいや三浦、森田とはどうなったん、」
「しー！！！！」

私は慌てて先生の口を手でふさいだ。

「・・・んぐ。その分じゃ、全然進展はなさそうだな」

「ほっといてください。先生こそ和歌さんとどうなんですか」

「どうって、どうもないぞ」

「また喧嘩したりしてません？」

「・・・前の喧嘩は誰のせいだと思ってるんだ」

先生が私を睨んだその時、職員室の中が「お、来たぞ」と騒がしくなった。

私と先生も、他の先生の視線の方向・・・窓の外の校門の方を見た。

「なんですか、あれ？」

「大型バス」

それは見れば分かる。

三輪車じゃないことは確かだ。

「なんで、大型バスがあんなにいっぱい・・・1、2、3、4・・・
7台も学校の前に来たんですか？」

「2年生が羽田空港から戻ってきたんだろ。今日まで修学旅行だったからな」

修学旅行！！
そっか！！

朝日ヶ丘高校の修学旅行は、2年の9月に2泊3日で行われる。行き先は、北海道か沖縄のどちらか希望するほうに行けるのだ。

お兄ちゃんとヒナちゃんは沖縄だった。

「昔は、羽田空港で解散だったのに、最近は学校まで戻ってくるようになったな」

「え？どうしてですか？」

「『遠足は、家に着くまでが遠足です』って小学校の頃に習ったのを忘れて、

羽田からの帰り道、寄り道する生徒が続出したから」

「・・・」

「三浦なんかも、例に漏れず寄り道するタイプだろ？」

もちろんですとも。

朝日ヶ丘高校は都心から離れていて、放課後に遊びに出るには不便だ。

せっかく友達と一緒に羽田から電車で帰れるなら、寄り道しない手はない！

・・・なるほど。

私みたいなのがいるから、バスで学校まで戻ってくるようになったのね。

納得。

「和歌さんは北海道と沖縄、どっちに行っただんですか？」

「北海道。暑いのは苦手らしい」

「あー。分かる気がする。先生も北海道？」

「いや、その年は俺は沖縄だった」

「えー？和歌さんと一緒じゃなかったんですか？せっかくの修学旅行なのに？」

「・・・俺は教師だぞ」

そうでしたっけ？

森田は・・・どっちに行くんだろう。

本城先生が行く方に行くのかな？

それとも敢えて逆にするかな？

私はどっちでもいいけど、できれば森田と同じ方がいいな。

あ、でもその前に、2年になったらクラスだってわかれるかもしれない。

・・・それは、嫌だなあ・・・

「先生」

「ん？」

「この前の京都の梅昆布茶、美味しかったですか？」

「おお！美味かったぞ！！さすが1缶千円！」

「あれ、毎年同じ人がお中元でくれるんです。来年も欲しいですか？」

「・・・ほしい、けど・・・三浦、なんか企んでるな？」

「いえ、来年も先生のクラスだったらあげようかなー、と思って」

「先生のクラスだったら」を強調してみる。

先生はピンと来たようで、頷きながら言った。

「わかった。お前は俺のクラスにしよう。森田は杉崎先生のクラスにでも放り込むか」

「やっぱり梅昆布茶あげません」

先生はゲラゲラ笑いながら、目を机の上の書類に戻した。

私も英語の宿題に戻る。

いつまでもおしゃべりしてたんじゃ、本当に市川さんと変わらない。

だけど、またしても邪魔が入った。

「先生。日誌」

「お。サンキュ。そっか、今日は森田が日直か」

森田は軽く頷いて私を見た。

「三浦。あんだだけ俺と一緒に宿題やったのに、まだ終わってないのかよ」

「森田とやってた時以外は宿題してなかったから」

エヘツとかわいこぶって舌を出してみる。

「・・・さいなら」

「なんだ、森田。三浦が俺と一緒にいるから妬いてるのか？」

先生がニヤニヤしながら森田を見る。

もちろん冗談だろうけど、森田の反応がちょっと気になって、私は黙っていた。

が、森田も負けていない。

いや、今回は森田の勝ちだ。

「そーだな。じゃあ、俺は代わりに和歌さんの手料理食ってくるよ」
「は？」

「さっき、『友達から仙台土産に牛タン貰ったから、食べに来ない？どうせ、先生は遅いし』って、メール来たから、今から行って来るわ」

「な、何をそんな嘘を・・・」

先生が言い終わる前に、森田が自分の携帯を差し出す。

私も先生と一緒にになって見てみると、確かに今森田が言ったのと同じ文面のメールが表示されている。
差出人は間違いなく和歌さんだ。

私は、さっさと帰り支度を始めた。

「三浦・・・まさかお前まで・・・」

「森田。一緒に行つていいでしょ？」

「ああ。和歌さんに『三浦も行くかも』って返事しといた。仙台の牛タンは美味いぞー」

「やったあ！」

「お、お前ら!!」

「先生、さようならー」

私と森田は仲良く合唱して、職員室を出た。

第3部 第14話

「うまい!!」

「美味しいー!!」

夕方の職員室に続き、本城先生の家でも私と森田は仲良く合唱した。もともと、家の主はまだお仕事中だけど。

「すごい！何これ！？これが牛タン！？」

「な？仙台の牛タンは美味いだろ？」

「うん、美味しい！って、森田が自慢するな。和歌さん、ありがとう！」

細くていかにも小食です、という見た目に反して、

私と森田に負けず劣らずモリモリと牛タンを食べている和歌さんが（本当に焼肉好きらしい）、

一旦手と口を止めて微笑む。

今日の和歌さんは、部屋着なのか柔らかそうな紺の布ワンピだ。大人っぽい人だと思ってたけど、こういう格好だと、随分若く見える。

せいぜい二十歳くらいだ。

「私ももらい物だから。遠慮なく食べてね。先生はまだ遅くなりそうだった？」

「はい」

私が邪魔しましたから。

「それじゃ、全部食べちゃっていいわよ」

「いいんですか!？」

「ラッキー!」

「あ、タン刺しもあるけど、食べる？」

「おお!食べる、食べる!」

「タン刺し!？何それ!？食べたいです!」

私と森田に遠慮と言う言葉は存在しない。

牛タンの焼肉はもちろん、タン刺しや、その他和歌さんが作ってくれた料理を次々に平らげ、

「いただきます!」と言った40分後には、テーブルの上のお皿は綺麗になっていた。

危うくお皿まで食べそうな勢いだ。

「美味かったー。ごちそうさま」

「ごちそうさま、和歌さん!」

「ふふ、どういたしまして。さすがに現役高校生が2人もいると、凄い勢だね」

いや、和歌さんも負けてませんから。

森田は、テーブルを立つとソファにポテツと引っくり返った。

「和歌さん。今日、泊まっていいい?」

「うん」

和歌さんの返事を待たず、森田はもう携帯でメールを打ち始めている。

親に打ってるんだろう。

「舞ちゃんも泊まる？」

え？本城先生の家に？森田と？

そ、それは、是非、泊まりたい・・・けど。

「帰ります。お兄ちゃんがうるさいんで」

お父さんよりお母さんより、何よりお兄ちゃんがうるさい。
とくに最近は。

森田が一緒だなんて知ったら、例え先生の家でも大目玉だろう。

「あ！そういえば、先生から聞いたんだけど、舞ちゃんてあの三浦君の妹さんって本当？」

「あの」って。

お兄ちゃん、高校時代なんかしでかしたのか。

「はい。三浦翔の妹です」

「すごい偶然ね。歩君が先生の生徒になっただけでも驚いたけど、三浦君の妹さんまで同じクラスにいるなんて！」

「お兄ちゃんもビックリしてました。あ、もしかして、和歌さんてお兄ちゃんと結構仲良かったですか？」

「え？うん。どうして？」

「お兄ちゃんて、西田さんのこと好きだったって聞いたから」

和歌さんと西田さんは仲良しだもんね。

「あの」お兄ちゃんのことだ。

もしかしたら、和歌さんに近づいて西田さんとの接触を図ったかもしれない。

（なんか警察みたいだな）

和歌さんが「あれ」という顔になる。

「舞ちゃん、穂波のこと知ってるの？」

しまった！！

私は助けを求めて森田を見たけど・・・サル野郎め。
既に夢の中だ。

「あ、う、えつと・・・あ！ヒナちゃんから聞いたんです！」

「ヒナちゃん？」

「お兄ちゃんの彼女！飯島雛子ちゃんです」

「ああ！飯島さん！」

とたんに和歌さんの顔がほころぶ。

お陰でそこからは、話がお兄ちゃんとヒナちゃんのこと逸れて行った。

ああ・・・助かった。

「じゃあ、ずっと付き合ってるのね？」

「はい。ラブラブです。でもお兄ちゃんはプロポーズを断られて若干凹んです」

「ええ？あはは、そうなの？」

「お兄ちゃんはまだ学生だし、

ヒナちゃんも次の春から職場を変えて一から頑張るって決めたみたいだから、

あの2人はまだまだ結婚できそうにありませんねー」

「一番最初に結婚しそうだったのに。わからないものね」

その時、玄関の扉が開く音がした。

「うわー！なんだ、これ！焼肉くさっ！！」

「あ」

和歌さんはいたずらっ子のようにちょっと舌を出して、廊下へ出て行った。

何やら「働く旦那をほっ」として、焼肉かよ」「私も働いてるんですけど」「まあな。俺より給料いいし」

「そうですよ」「……俺の分は？」「あります。少し」「……」

と、ラブラブ(?)な会話が寝室へと消えて行く。

私は笑いを噛み殺しながら、なんとなく立ち上がり、部屋を見渡してみる。

本当に豪華な部屋だし、多分家具も一緒に揃えたんだろう、うちの家具とはお値段が一桁くらい違いそうだ。

でも、それでいて何故か居心地がいい。

来る者を拒まない雰囲気ってゆーか、温かみがあるってゆーか。

先生と和歌さんの人柄の成せる業だろう。

だから森田も、こうやって……

まるで我が家のようにソファで眠りこける森田を覗き込む。

ぶ。ぶ。ぶ。

ポカンと口開けて、本当に気持ち良さそうに寝ちゃってる。
見ていて、こっちまで幸せな気分になってくるような寝顔だ。

思わず携帯で写真を撮って、しっかりと保護する。

それから、ソファの脇にかがんで、もう一度森田の寝顔を眺めた。

どちらかと言えば元々童顔の森田だけど、寝顔はますます子供っぽい。
い。

なんか、かわいらしい。
まるで小学生みたいだ。

相変わらずだなあ・・・

ん？

私は首を傾げた。

相変わらず？

私、森田の寝顔って見たことあったっけ？

しばらく考えてみたけど、森田の寝顔なんて見た記憶がない。
それなのに、なんだろう、この懐かしい感じは・・・

そうだ！

私は手をポンッと打った。

「温泉で居眠りしてるサルと同じ顔だ！」

「お、さすが三浦。的確な表現だな」

ちょうど、着替えた先生がダイニングに入ってきた。

「先生！おかえりなさい！ごちそうさまでした！」

「・・・俺はご馳走した覚えはないけどな」

「先生、見て！このアホ面！温泉のサルそのもの！」

「ほんとだなー。サルよりサルっぽい」

先生は、和歌さんがかろうじて確保していた残りの牛タンを、
見ている食欲がわくとも思えない森田の寝顔を眺めながら食べ始め
た・・・

第3部 第15話

「えー！？なんでだよ、泊めてくれよ！」

気持ちよく寝てたところを先生に叩き起こされてふくれっ面の森田。寝癖と寝ぼけ眼のせいで、本当に小学生に見える。

「僕？そろそろお家に帰る時間だから、お姉ちゃんとお手繋いで帰ろうね？」

「うん。わかったよ、お姉ちゃん・・・って、なんでやねん」

森田は勝手に乗り突っ込みをやった後、うーん、と言って思い切り背伸びをした。

その拍子に背骨がポキッと鳴る。

「あ。今、背が伸びた」

「そんな訳ないでしょ！」

「ほんとだつて。俺、今、第二成長期だから」

遅すぎないか。

森田が髪をぐしゃぐしゃと整えながら、私の真横にすっと立った。身体が触れ合うほど近くて思わずドキッとする。

「ほら。1センチくらい伸びてるだろ？」

「わ、わかるわけ、ないでしょ！」

こんなに近いの初めてだし！

・・・でも。

確かに、森田、ちょっと大きくなった気がする。
もちろん、今の背伸びで急に伸びたはずないけど・・・

春より、うつん、夏休みに海に行った時より、大きくなった、かも。

「歩。俺の横に立ってみろよ」

「おー」

森田が今度は先生の真横に立つ。

「お、本当に伸びてるぞ。俺が182センチだから・・・もう178くらいあるな。」

俺よりデカくなるつもりか。許さんぞ」

「許すも何も・・・」

「私も許さない！」

私は思わず言った。

先生も森田も「え？」と私の方を見る。

「なんで？」

「なんで、って・・・先生より大きいなんて、生意気だよ」

森田は「なんじゃ、そりゃ」と言って笑った。

178センチ。

お兄ちゃんの身長だ。

森田がそれを超える。

お兄ちゃん以上になる。

私は、森田を好きだと言いつつ、なんとなく「それでもお兄ちゃんの方が素敵だもん」と思ってきた。
というか、わざとそう思ってきた。

でないと、なんか、森田のことを物凄く好きになりそうで怖い。

森田の背がお兄ちゃんより高くなったところで、森田がお兄ちゃんより「素敵」になる訳じゃない。

でも、森田が何か一つでもお兄ちゃん以上の物を持つことで、私の中の「お兄ちゃんの方が素敵だもん」という縛りがなくなる気がする。

もし、森田のことを凄く好きになってしまってから振られたら、立ち直れない気がする。

多分もう、お兄ちゃん以上の人にも森田以上の人にも巡り会えない気がする。

私は、先生の横で「もうちょっとだ、もうちょっとだ」と馬鹿みたいに騒いでる森田を見た。

本当に、「もうちょっと」だ。

少し背伸びすれば、先生と同じくらいになってしまう。

初めて会った時は、もっと小さく見えたのに・・・

今は森田の何もかもが大きく見える。

「で、なんで帰らないといけないんだよ。さては2人の時間を邪魔されたくないんだな？」

「そんなもん、今まで散々邪魔してきただろ」

「そうだっけ？」

「とにかく。泊まってもいいけど、三浦を家まで送ってからもう一度来い」

「はあ？なんでそんな面倒臭いこと」

「もう夜だし、危ないだろ」

「危ないって言っても駅まですぐ・・・」

森田は言葉を切って、先生の顔を見た。

そこに何かいつもと違うものを感じたんだろう。

「真弥、なんかあったのか？」

「・・・最近は、物騒だろ、色々」

「物騒？」

いい勘してる。

先生も誤魔化せないと思ったのか、市川さんのことを説明した。

「・・・じゃあ、三浦が職員室で居残りしてるのも、市川を避けるため？」

「ああ。この辺にも来てるみたいだ」

「危ないだろ！警察に言えよ！」

森田は興奮したけど、先生と和歌さんがなだめて、とにかく今日は、先生と和歌さんが一緒に私達を駅まで送ってくれることになった。

「歩は、三浦を家まで送っていけよ」
「・・・わかったよ」

森田は渋々という感じで、帰り支度を始めた。

4人で専用エレベーターで一階に下り、エントランスを出て駅へ向かう。

私は、なんとなく緊張して辺りを見回した。

特に怪しい人影はない。

それでも、思わず市川さんの姿を探してしまう。

関係のない私でもこうなんだから、先生と和歌さんはもっと気が休まらないだろう。

現に、2人は普通に話しているけど、
先生は目をあちこちに向け、少し和歌さんの前を歩いている。

森田は・・・何を考えているのか、私の横で押し黙ったままだ。

気まずくて、私は先生に話しかけた。

「先生。そう言えば、『付き合ってくれないと自殺する』って言うてた生徒はどうなったんですか？」
「ん？ああ、どうしようもなく、取り合えず何回か言われるままにデートした」

「デート！？うわあ、大変ですね、それ」

「そうだなー」

「和歌さんも・・・嫌な思いしましたね」
「う。うん」

何故か小さくなる和歌さん。

そしてそんな和歌さんをチラッと睨む先生。
？普通、逆だと思っんですが？

「それからどうしたんですか？」

「それがさ、突然どっかの大学生がその女子生徒に告白して、
女子生徒の方もその男が気になり始めて俺のことはどうでもよくな
ったみたいだ」

先生が「どっかの大学生」の部分を強調すると、和歌さんがますます
小さくなる。

なんだ、なんだ。どうしたんだ。

でも、聞いても答えてくれそうにないので、ここは取り合えず本題
から逸れないことにしよう。

「でも、よかったじゃないですか。市川さんもそうだといいですね」

「そうだな」

「んじゃ、俺が告白してみようか？」

突然の森田の声に、先生も私も固まった。

「・・・何言ってるんだよ、歩。そんなことしないでいいって」

「何、本気にしてんだよ。冗談に決まってるだろ」

「・・・だよな」

なんだ、冗談か・・・

ビックリさせないでよ、もう。

「それより、市川のストーキングのことだけど、」
「ん？」

「真弥の家の周りにも来てるって・・・」

そう言いかけて、森田が唐突に足を止めた。
私もつられて、一歩先で立ち止まる。

「森田？」

森田の目は、駅の改札に向けられている。

もしかして、市川さんが！？

私も目を凝らして改札の方を見たけど、それらしい女性は見当たらない。

「森田、驚かせないでよ。いないじゃない」
「・・・」

だけど森田はまだ動こうとしない。

先生と和歌さんも立ち止まり、森田を見る。

「歩？」
「歩君？」

2人が声を揃えてそう言った時。

「危ないっ！！！！」

森田が走り出した。

第3部 第16話

森田が私の横を走り抜け、先生と和歌さんの前に・・・
いや、先生の前に立ちふさがった。

市川さん！？

・・・違う！

女の人の姿はどこにもない。

でも。

若い男の人の姿があった。

それも、いつの間にか先生の目の前に。

「歩！！」

「森田！！！！」

先生も私も叫んだけど、何もできなかった。
だって、それは一瞬だったから。

でも、私の目にはスローモーションのように映った。

ポケットに突っ込んであった男の手が上にあがり、ポケットから光る物がヌツと出てくる。

一度先生の前で立ち止まった森田が、男めがけてまた走り出す。
森田が男の腕を掴もうとする。

男がそれを振り払うかのように、腕を大きく横に振る。

赤い物が飛び散った。

「森田！！！」

「歩君！！！」

私と和歌さんは、倒れるようにしゃがみこんだ森田に駆け寄った。
森田の右腕から鮮血が溢れ出す。

先生は、私と和歌さんが動き出すより一瞬早く我に返り、
ナイフが握られた男の右手を掴んでねじ上げた。

こんな時なのに、感心してしまうくらい、素早くて凄い力だ。

男はあっさりとナイフを落とし、悲鳴を上げた。

「月島！救急車！それと警察！！！」

「はい！」

和歌さんが急いで携帯を取り出す。

私は・・・何もできず、ただ森田の左腕にしがみついた。

「も、もりたあ」

「つてえー・・・なんで三浦が泣くんだよ、泣きたいのはこっちだ
つて・・・」

「森田が死んじゃう」

「こんなんじゃ死ぬかよ・・・」

でも、この暗闇でも分かるくらい、森田の顔からみるみる血の気が引いていく。

それに比例するように、腕から血が流れる。

それでも森田は、左腕を私の手から抜き取ると、それを私の背中に回して摩ってくれた。

「大丈夫だつて」

「・・・うん」

ガッ!!

鈍い音に顔を上げると、先生が男を殴っていた。

怒って殴りまくってるのではなく、縛ることも押さえておくこともできず、

仕方なく一発殴って気絶させた感じだ。

男は先生の目論見通り、きちんと気絶している。

よく見るとスーツ姿だ。

一体、何者なんだろう。

「歩！大丈夫か！？」

「痛い・・・」

「当たり前だ！たく、無茶して・・・」

先生は森田を地面に寝かせ、ハンカチで傷口を縛った。

「救急車来るからな。頑張れよ」

「真弥・・・」

「ん？」

「牛タン、食いてえ・・・」

「・・・大丈夫そうだな」

先生は、少し微笑んだ。

でも、私の涙は止まらなかった。

病院では大騒動だった。

森田のご両親はもちろん、警察や朝日ヶ丘の校長先生と教頭先生も駆けつけた。

そして。

「真弥！和歌さん！」

うるさい訳ではなく、だけど良く響き、独特の威圧感のある声が力ーテンの向こうから聞こえた。

誰？と、思ふ必要もない。

先生のお父さんだ。

先生の声には威圧感はないけど、似てる。きつと顔も似てるんだろう。

「切られた子は？」

「今、そっちの処置室にいる」

「大丈夫なのか？」

先生が軽く頷いているのが、影でわかる。

「つて」

「森田！大丈夫？」

森田が小さく呻いて、左手で私の右手を強く握った。
その力が本当に強くて、私も思わず顔をしかめる。

「あ。ごめん……」

「うっん」

私が両手で森田の左手を軽く握り返すと、
森田は目を瞑って、頷くように下を向いた。

森田の傷は、浅いものの結構長く切られていて、8針ほど縫う必要があるとのことだった。

ちょうど今、青い紙の衝立の向こうでお医者さんが森田の右腕を縫っている。

局部麻酔はしてるらしいけど、痛みはあるようだ。

傷口に当てられている強い光が、熱いはずもないのに熱く感じる。

「森田……頑張つて」

「うん」

こんな処置室の中まで私が付き添う必要はないんだけど、

森田が切られてからずっと、私は何故か森田の左腕から離れられず、ここまで入ってきてしまった。

でも、誰も、

森田も、止めなかった。

「・・・今度、ワンピース着るね」

「は？」

「前ね・・・白くてかわいいワンピース買ったんだ。森田が死ぬ前に着てるところを見せてあげる」

私が涙声でそう言うと、

森田は苦笑して「だから死なないって」と言いながら、私の手を強く握った。

でもさつきみたいな強さじゃなく・・・
なんだか優しい強さだった。

「・・・よしっ、終わった。よく頑張ったね」

お医者さんの声に森田がため息混じりに「ありがとうございました」と言った。

私はまた涙が出てきた。

「真弥」

「歩！大丈夫か！？」

「ああ、もう終わった。これでしばらく鉛筆持てないから学校行か

なくていいか？」

「・・・お前は・・・」

先生は泣きそうになりながら森田に走り寄り、森田の頭をグリグリと撫でた。

「よかった・・・」

「おう。こんくらい、へっちゃらだ」

「・・・さっきまで、死にそうな顔してたくせに」

私が軽く突っ込むと、森田も反撃してきた。

「人のこと言えるかよ。まだ泣いてるくせに」

泣いてない、と言いたかったけど、まだ森田から離れられずにいる私は、あまり強いことを言えない。
諦めて、口を噤む。

すると。

頭の上から声がした。

「森田歩君だね？」

「え？」

私と森田は同時に顔を上げた。

先生のお父さんだ。

間違いない。

やっぱり顔も似てる。

さすがに歳はいつてるけど、なんて渋くてかつこいい人だろう。
しかも、重役の風格だ。

だけど、その重役さんが深々と森田に頭を下げた。

「息子と和歌さんを助けてくれて本当にありがとう。そして、本当に申し訳ない」

「いえ、大丈夫です」

・・・？

「ありがとう」は分かるけど、何が「申し訳ない」んだろう。

でも、先生も申し訳なさそうな顔をしている。

「歩。お前を刺した男だけど・・・」

「ああ。和歌さんのストーカーだろ？」

「気づいてたのか？」

「うん」

和歌さんのストーカー！？

何、それ！

森田は、「どうせ三浦は訳わかんないだろう」とでもいうように、私に向かって言った。

「市川が真弥の家の周りをウロウロしてるって聞いて、おかしいと思ったんだ。」

市川は・・・生徒は教師の家なんて知らないだろ？しかも真弥は引越したばかりだし」

「あつ」

「だからもしかしたら、真弥のストーカーじゃなくて和歌さんのストーカーかも、って思ったんだ。

和歌さんの職場の人とかなら、和歌さんの新居の住所を知っててもおかしくないから」

「うん」

「まあ、朝日ヶ丘の教師が真弥のストーカーやってる可能性もあるけどな。

うちの高校にそんな教師がいるとは思いたくないし。で、さっきも『変な男がいるかも』って注意してたんだ」

なるほど。

私は、多分先生と和歌さんも、女の人ばかり意識していて、男の人なんて見てなかった。

本当のストーカーは男で、和歌さんを付回してたんだ！

「その通りだ」

先生のお父さんは頷いた。

「和歌さんは、うちの法律事務所で働いている。そして、君を刺した男も・・・うちの事務所の人間だ」

第3部 第17話

「本当に申し訳ありませんでした」

先生が、森田のご両親に深く頭を下げた。
和歌さんも先生の隣でそれにならう。

和歌さんと森田のご両親はさっきまで、
警察に事情を聞かれたり、説明を受けたりしていて、
今、森田のいる病室に来たところだ。

病室の中には、私達と森田のご両親の他に、校長先生と教頭先生がいる。

先生のお父さんは、森田のご両親にお詫びを言った後、ストーカー男がいる警察へ行った。

「僕がついていながら、いや、僕のせいで歩に怪我をさせてしまつて、申し訳ありません」

「僕達のせい」じゃなくて「僕のせい」と言うところが先生らしい。
和歌さんに気を使っているのだろう。

「いいんだよ、本城先生。本城先生や月島が悪い訳じゃないんだし」「そうですよ。そんなに謝らないでください。歩の怪我なんて年中のことですから」

森田のご両親は、病院へ駆けつけた時こそ取り乱していたけど、
森田の怪我が大したことない（それでも8針も縫ったけど）と知つて、

今は穏やかな雰囲気だ。

森田はお母さん似で、笑顔はそっくりだなあ、なんて、思える余裕が私にも出てきた。

ちなみに、さすがにもう私は森田にへばりついていない。

それでも、自分でも何様だと思いながら、森田の隣3センチのところに座っている。

「いえ。もつと僕が気をつけていたら、こんなことには・・・」

「本城先生。どんなに気をつけていても防げないことはあるよ。それに、もし歩がいなかったら、それこそ本城先生や月島が大怪我か・・・命に関わるようなことになつてたかもしれないし」

「はい・・・」

先生は頭を上げ、今度は森田を見た。

「歩、ありがとう。巻き込んで悪かったな」

「おう。来年からお年玉は1万円にしろよ」

どこまでも口の減らない奴だ。

でも、森田のこの軽口のお陰で、もう何回も重苦しい空気が払拭されている。

私も助けられた。

今度もまた、病室にホツとした空気が流れた。

けど。

「本城先生」

校長先生が、言いにくそうに、でもきっぱりとした口調で先生を呼んだ。

いつもの優しい感じじゃない。

「昔からの知り合いとは言え、生徒を自分の家に呼び、その帰りに生徒が刺された、

これは問題ですよ」

「・・・はい」

私と森田は驚いて顔を見合わせた。

でも、先生と森田のご両親はこの言葉を予想していたのか、動揺した様子はない。

先生に至っては、まるで何かを覚悟しているようだ。

和歌さんは・・・さつきからずっと俯いたままで何も話さない。

「今までも、本城先生はちょっとした女性関係のトラブルなんかはありましたか、

今回は生徒が怪我をしている。しかも、傷害事件です」

「はい」

「この件は、理事長と話し合います。何らかの処分が・・・」

「ちょっと待ってください!」

森田が2人の話に割って入った。

後1秒遅ければ、私が入っていたところだ。

森田は椅子から立ち上がり、校長先生に詰め寄った。

「校長先生。俺は、真弥に・・・本城先生に呼ばれて、先生の家に
行ったんじゃないません。」

俺の友達である月島和歌さんと一緒に飯を食ってただけです」

そうだ、そうだ！

私は心の中で森田を応援する。

「先生と和歌さんだって被害者です。なんで先生が処分されないとい
けないんですか」

そうだ、そうだ！

「森田君。君の気持ちは分かるけどね・・・」

「先生を処分する暇があつたら、俺を表彰でもしてくださいよ！俺、
怪我してまで人助けしたんですよ？」

私は思わず笑ってしまった。

全くその通りだと思う。

相手が誰であれ、森田は人助けをした。

褒められて当然だ。

「俺の表彰と先生の処分で、チャラにしましょう」

「あのね、森田君、」

「校長先生。私達も歩も、犯人を訴えたりする気はありません」

森田のお父さんが穏やかに言った。

「もちろん朝日ヶ丘高校にも本城先生にも、何か言うつもりありません。

ですから、今回のことはどうか穏便に済ませてください」

この時ほど、「穏便に済ませる」という言葉が良い意味に聞こえたことはない。

穏便万歳！

「それに・・・本城先生と月島は、もうすぐ結婚します。変なことで水を差したくないんです。お願いします」

森田のご両親が、校長先生と教頭先生に丁寧に頭を下げる。

森田と私も、慌てて勢い良くお辞儀する。

さすがに、校長先生達も困っていたけど、やがてため息をついて笑った。

「本城先生は、いつも誰かに助けられますね」

「・・・はい」

先生の声が少し詰まる。

「これも人徳とすれば、本城先生の日頃の行いや努力の結果でしょう」

「・・・」

「わかりました。今回は、」

「待って下さい」

校長先生の声が遮られる。

「月島さん？」

「待って下さい、校長先生。私は穩便に済ませるつもりはありません」

え？

和歌さん！？

和歌さんの目がキラツと光る。

それは涙のせいでもあるけど・・・それだけじゃない。

和歌さん、怒ってるんだ。

和歌さんは本城先生の方を見た。

「先生、ごめんなさい。例え学校で先生の立場が悪くなるようなことになっても、

私、犯人を訴えます」

「月島・・・」

「私、自分がストーキングされてることに気づかず、先生を危ない目にあわせてしまつて・・・

しかも歩君にとばっちりでこんな怪我までさせてしまいました。自分も犯人も許せません」

和歌さんの強く光る瞳は、その意思が決して変わらないことを示しているかのようだ。

私も、他の人も息ができず、空気が張り詰める。

でも、小さなため息でそれはすぐに解けた。

「月島らしいな。いいよ、好きにして」

「先生・・・」

「俺のことは気にするな。大丈夫だから」
「・・・ごめんなさい」

それから和歌さんは校長先生と教頭先生に向かって頭を下げた。

「申し訳ありません。学校名や個人名がでるようなことはしませんので、どうか許してください」

校長先生と教頭先生は少し驚いていたけど、こちらもすぐに笑顔になった。

「月島さんは弁護士になったんですね？正義感の強い月島さんらしい職業だ。」

納得が行くよう、じゅうぶんにやりなさい」

和歌さんは「ありがとうございます」と言って、もう一度大きくお辞儀をした。

第3部 第18話

「腹減った・・・」

「さつき、牛タンたらふく食べたじゃない！」

「血を流したら、また腹減った。おい、真弥、なんかご馳走してくれるんだろうな」

「・・・お前も懲りない奴だな。今日はもう帰って寝ろ」

今から犯人のいる警察に行くと言う和歌さんが乗ったタクシーと、校長先生と教頭先生が乗ったタクシーを見送って、私と森田、本城先生、それに森田のご両親は病院の夜間出入り口で、ようやく息をついた。

「そうだぞ、歩。今日はもう帰ろう」

「ちえっ」

お父さんにも止められて、森田が不貞腐れると、先生が苦笑いしながら言った。

「週末に何か食わしてやるよ」

「焼肉！」

「・・・またかよ。三浦も悪かったな、遅くまで付き合わせて」
「全然大丈夫です」

私はVサインをして見せる。

それを見た先生の笑い声で、私も心から安心できた。

和歌さんをストーカーしてた男は、
和歌さん同様、本城先生の実家である法律事務所で働いている男だった。

でも、その法律事務所はかなり大きいらしく、和歌さんも知っている社員なんてごく一部だそうだ。

しかも犯人の男は正社員ではなくアルバイトの人で、和歌さんは名前も顔も知らないという。

つまり犯人は、和歌さんの知らないうちに勝手に和歌さんに惚れ、和歌さんが婚約したことをどこかで聞きつけ勝手に怒って勝手にストーカーして・・・

なんたる自己完結ぶり。

そのまま勝手に完結してくれてたらよかったのに。

私なら、こんな超自己完結男に1秒でも時間を割くのはもったいないけど、

和歌さんは絶対に許さない、と全力で訴えるようだ。
凄い。

（そう言えば、弁護士である和歌さんの弁護って誰がするんだろうか？自分？）

でももつと凄いのは先生だ。

和歌さんがストーカー男を訴えることで、事件を周囲に知られたりしたら、

先生は本当に何か処分を受けるかもしれないのに、先生は和歌さんを温かく見守っている。

結婚も控えてて、一番波風立てたくない時期だろうに・・・

「そつだ、先生！今回のことで、結婚を延期したりしませんよね！？」

「ああ、そのことか」

先生がニヤツと笑う。

「月島のことだから『今回の件が決着つくまで、結婚は延期します！』とか言いそうだと思って、

先手を打つといた」

「先手？」

「うん。俺から『延期しようか』って言った。そしたら月島の奴、珍しくウルウルしながら、

『それとこれとは別です！』とか言ってたよ」

「あはは。じゃあ、延期しないんですね」

「ああ。しない」

よかった・・・

こんなことで、せっかく決まった結婚が延期とかになったら嫌だもんね。

私と森田は、同時に安堵のため息をついた。

森田のお父さんが、遠慮する先生と遠慮しない私を車に押し込み、エンジンをかける。

「えっと、まずはその女の子から送った方がいいよね？」

「はい、お願いします」

先生が頷く。

森田のお父さんが、バックミラー越しに私を見て訊ねた。

「家はどこ？」

「M駅の近くですから、M駅前でもいいです」

「そうはいかないよ。もう12時回ってるしね。家まで送るよ」

確かに。

私は素直に甘えることにした。

車の中は、ウトウトしている森田を除き、妙に盛り上がった。

なぜなら、本城先生が私のことを「三浦翔の妹だ」と森田のお父さんに紹介したからだ。

以前、朝日ヶ丘高校で教師をしていた森田のお父さんは、お兄ちゃんを教えたこともあるらしく、しきりに懐かしがっていた。

そしてやっぱり、お兄ちゃんとヒナちゃんがまだ続いていることも、とても喜んでくれた。

もつと話していたかったけど、残念なことに病院から私の家までは車でほんの15分ほど。
あっという間に到着だ。

「三浦。ちよつとご両親に挨拶させてくれ」

「娘さんをください！とか、言ってくれるんですか？」

「アホ。遅くなった事情を説明して謝りたいんだよ」

という訳で、車を見てなきやいけない森田のお父さんを残し、全員

で車を降りた。

寝てればいいのに、何故か森田も一緒だ。

私は家の鍵を持ってないので、仕方なくインターホンを押す……と、

3秒程で玄関が開いた。

開けたのは言うまでもなくお兄ちゃん。

「舞!!遅すぎるぞ!!!」

「うるさいなー、近所迷惑だよ。事情があって遅くなるってメールしたでしょ?」

「事情って何だよ、もっと詳しく……あれ?先生?」

「三浦、悪いな。ご両親は?」

「寝てます」

……娘の心配とかしなのか。

「じゃあ、いいや。明日、電話いれるよ」

「何かあつたんですか?」

「俺の家で飯食った帰りに、男に襲われそうになって……」

「ええ!?!」

お兄ちゃんが私の両肩を掴んだ。

「ま、舞!お前、まさか!」

「あのね。襲われそうになったのは、私じゃなくて、先生」
「え?」

お兄ちゃんは、今度は先生の全身をジロジロ見る。

「・・・先生って、男に襲われるのが趣味なんですか？」

「おい」

「だって、昔も・・・」

「う、うるさい！」

ほえ？

「とにかく！俺が襲われそうになって、こいつが助けてくれたんだ！」

先生はそう言っ、森田の頭をポンと叩く。

「で、怪我して今まで病院に行ってたんだ。三浦妹はこの森田にずっと付き添ってくれてた」

「・・・」

先生。その言い方はちょっと・・・

案の定、お兄ちゃんは今までになく険悪オーラ全開で森田を睨んだ。

「お前、もしかして焼肉男か？」

「え？」

お兄ちゃんがいつの「焼肉」のことを言っているのかはわからないけど、

今日、焼肉を食べたのは事実だ。

森田は「はい。多分」と答えた。

って、ダメだった！

更に目つきが鋭くなるお兄ちゃん。

森田の右腕に包帯がなければ、胸倉でも掴みそうな勢いだ。

森田も、初対面の人間にここまで睨まれたらいい気はしないだろう。さらに森田は、睨まれてすごすごと引き下がる奴でもない。

なんか文句あんのかよ？と言わんばかりにお兄ちゃんを睨み返した。

何の意味があるのかわからないけど（いや、何の意味もないけど）、二人の間にバチバチと火花が散る。

オロオロする森田のお母さん。

ニヤニヤする先生。

先生・・・わざと変な言い方しましたね？

私は火花を散らすお兄ちゃんと森田を見比べた。

2人とも同じくらいの身長だ。

ううん、髪型や靴の関係かもしれないけど、森田の方が大きいかもしれない。

でも、それを見ても私は何も感じなかった。

森田がお兄ちゃんより背が高くなったくらいじゃ、私の森田に対する気持ちは変わらないみたいだ。

それって、やっぱり絶対的にお兄ちゃんのほうが素敵だからだろうか。

それとも・・・

既に私は、森田のことを後戻りできないくらい好きになってしまっ

てるってことなんだろうか。

「お兄ちゃん。森田のご両親が、ここまで車で送ってくれたんだよ」
「・・・そうか」

さすがにお兄ちゃんも子供じゃない。

森田から目を離すと、森田のお母さんに「ありがとうございました」
とお辞儀した。

森田のお母さんは逆に、「遅くまで申し訳ありませんでした」と謝る。

森田だけが、相変わらず面白くなさそうにお兄ちゃんを睨んでいた。

第3部 第19話

今日も放課後は、一目散に職員室へ・・・ではない。
私は、校庭の端に市川さん呼び出した。

「どうして森田がついてくるのよ」

下足室へ向かう階段をおりていると、当然のように森田がくっついてきた。

「市川と話すんだろ？」

「そうだけど。森田はこなくていいよ。怪我してるし」
「怪我してるとか関係ねーだろ」

確かに関係ねーけど、

森田について来てもらっても仕方ない。

まあ、一緒に来てもらっても構わないけど。

私が指定した場所に、市川さんは既に来ていた。
ここだったら、校舎の影で人目につきにくいし、話を聞かれることもない。

市川さんは急に呼び出されて不満そうな顔で立っていたけど、
やって来たのが私だけでなく、私と森田の2人だったからかますます顔をしかめた。

「何？話って」

「わかってるでしょ」
「・・・」

このところ放課後は毎日、私が市川さんより早く本城先生のところへ行っているから、

市川さんは本城先生に近づけていない。

もちろんお昼休みとかまでは、阻止しきれないけど、

市川さんからすれば、私は大いに邪魔者なはずだ。

私がわざとそうしてることも気づいているはず。

「本城先生、迷惑してるよ。本当に好きなら、先生が困るようなこととはやめなよ」

「三浦さんには関係ないでしょ」
「ないけど」

今まで私は、市川さんに直接苦情を言うつもりはなかった。

本城先生もそんなことは望んでなかったし、私もクラスメイトと敢えて気まづくなったりはしたくない。

でも、和歌さんのストーカー男の一件で考え直した。

市川さんの行為は、先生にとってだけでなく和歌さんにとっても迷惑だし、

何より市川さん自身にもよくない。

こんなの、相手も自分も傷つけるだけだ。

「市川さん以外にも、先生が婚約してがっかりしてる人はたくさんいるよ。」

でもみんな、先生のことが好きだからお祝いしてるんだよ。

市川さんも、一緒にお祝いしてあげよう?」

「・・・」

市川さんは俯いた・・・けど、目だけは私と森田をじっと睨んでいる。

「三浦さんと森田君で付き合ってるの？」

は？

「ううん」

森田も軽く首を振る。

「そう。じゃあ、森田君がキスしてくれたら先生のことは諦めるわ」

「はあ？」

私と森田は同時に変な声を出した。

なんじゃそりゃ。

それこそ何の関係があるっていの？

・・・ああ、そうか。関係ないからだ。

何の関係もない森田に、無茶な要求を吹っかけて私達を困らせてるんだ。

つまり、先生のことを諦めるつもりはないってことね？

実際、市川さんは「どう？できっこないでしょ？」と言わんばかりに胸を張っている。

「三浦」

「何？」

「あっち行つてろ」

「え？なんで」

「いいから」

森田が、顎で校門の方をさした。

私にこの場を離れろってことか。

それって、つまり、どーゆーことなんだ。

それって、つまり・・・

「ちよつと、森田！何考えてんのよ！？いくらなんでも、森田がそこまでしないでいいでしょ！」

「そこまで、って程のことじゃねーだろ」

あるだろ！！！！

言い出した市川さん本人も動揺している。

先生のことが好きなのに、他の男なんかにキスされたらたまつたもんじゃないだろう。

「だ、ダメよ！三浦さんの前でしなさいよ！」

焦って市川さんが叫ぶ。

市川さんとしては、要求のレベルを上げたつもりなんだろうけど、そんなのサルには通用しないらしい。

森田はスタスタと市川さんに歩み寄り、

何の迷いもなく簡単に、市川さんの唇にチュツとキスをした。

・・・は？

「市川、約束は守れよ。もう先生を付回したりすんな」
「・・・」

呆然、とはこのことだ。

市川さんも私も言葉が出てこない。

「三浦。帰ろーぜ」

再びスタスタと市川さんの前を離れ、校門へ向かう森田。

私は市川さんと顔を見合わせた後、慌てて森田を追いかけた。

そして、森田の一步後ろを歩きながら、

森田の背中を見ながら、

ぐちゃぐちゃした頭で考える。

キスした。

森田が、

市川さんに、

キスした。

なんで？

「三浦？」

「・・・」

「何、黙りこくってんだよ？」

「・・・なんで？」

「は？」

「なんで、市川さんにキスしたの？」

「なんでって・・・それで市川が真弥に付きまとうのやめるって言ったから」

「なんで、あそこまでのするの？キスなんて・・・」

なんだか涙が出てきそうで、私は言葉を切った。

森田が立ち止まり、呆れたように私を振り返る。

「あんなのキスって言わないだろ」

「・・・」

確かに、時間としては0.1秒くらいだったし、ただちょっと唇と唇が触れました、って感じだった。森田は両手をポケットに突っ込んだままだったし、市川さんもボーっと立ってただけだった。

でも・・・

キスはキスだ。

テレビとか以外で、人がキスしてるのなんて初めて見た。しかも、それが森田だなんて。

「・・・森田は平気なの？好きでもない女の子とキスなんかして」
「だから。あんなのキスだなんて思ってたねーし」

・・・もしかして。

「初めてじゃないの？」

森田は、彼女なんていないって言ってたけど、それは高校に入ってからの話で、中学の時はいたかもしれない。そうなら、キスくらいしてるかもしれない。

森田は、わざと驚いた顔をして笑った。

「三浦も女子なんだなー。初めてとか初めてじゃないとか気にするんだな。」

男はそんなこと、気しねーぞ？」

だから何なのよ。
答えになってないし。

「とにかく。あんくらいで市川が真弥のこと諦めるなら、全然いいだよ。」

ナイフで切られるより、遥かにお得だ」

森田は本気で言ってる。

信じられない。

何よ、「あんくらい」って。

「じゃあ、森田にとってのキスってどんななのよ？」

「え？うーん、どんなのって言われてもなー」

森田は首を傾げて、これまた本気で悩みだした。

「キス」の定義ってそんな難しいものなのか。

唇と唇・・・ううん、唇が相手の身体のどこかに触れれば、それって「キス」でしょ。

森田は、私の怒りと軽蔑の視線に全く気づかず、まだ悩んでる。ほんと、信じられない。

でも。

森田は突然、「こんなのが本当のキスかな」と独り言を言いながら・・・

私に「キス」をした。

第3部 第20話

男の人の家の前で、待ち伏せ。
これぞ、ストーリー。

自分がこんなことする日が来るなんて。

茜は天野とデートみたいだし、
なんとなくこんなこと、話しにくい。
話しにくい、てゆーか、コレを聞いてもらう相手は茜より適任者が
いると思った。

「舞ちゃん？」

「・・・和歌さん」

どれくらい時間がたったのか。
和歌さんが、本城先生と和歌さんのマンションの前でしゃがみこん
でる私を見つけてくれた時には、
辺りはすっかり真っ暗だった。

「どうしたの？もう9時よ？」

「え・・・もう9時ですか？」

和歌さんは仕事帰りなのか、地味目な紺のスーツ姿。
その襟には金色のバッチが光ってる。

もしかしたら、昨日の男の件で出掛けていたのかもしれない。

「先生に用事？」

「はい……」

なかなかドラマのようにかつこよくはいかない。

森田にキスされた私は、泣いて喜ぶでもなく、怒って引つ叩くでもなく……

ただ、普通に「何するのよ」と言っただけだった。

それに対して森田は、「だって三浦が、キスってどんなのって聞くからさ」としれつと答えた。

本当は魂が抜けたみたいに呆然としたところを、

「バカバカしい」って態度を取るのが精一杯だった。

そしてそのまま森田と駅まで普通に歩き、そこで別れて……私は一目散にここへやってきた。

先生と会ってどうするって訳じゃない。

ただ愚痴りたかった。

軽々しく誰にでもあんなことをする森田のことを愚痴りたかった。

ついでに、なんでもっとしっかり教育してくれなかったんだと、文句の一つでも言ってやりたい。

いや……もしかしたら本城先生の場合、今の森田こそが「教育の結果」なのかもしれない。

それに、よく考えたら（考えなくても）先生は男の人だ。

男の人である先生より、女の人である和歌さんの方が遙かに話しやすい。

「和歌さん！」

「なに？」

「愚痴つていいですか！？」

「・・・どうぞ」

和歌さんは苦笑いしながら、私を家に上げてくれた。

「死ぬ、サル！！けちよんけちよんにしてやる！！」と大興奮の私の話を聞いた和歌さんは、

烈火のごとく怒り・・・は、しなかった。

「けちよんけちよん、って」と、相変わらずの苦笑いである。

しゃべりまくっていた私は喉が渇き、和歌さんが出してくれた梅昆布茶を（これまた美味しい！）

一口飲んで息をついた。

「怒ったり呆れたりしないんですか？」

「そうね。先生のことを追い掛け回してた市川さんって子が、歩君に無茶苦茶な要求をしたことには呆れちゃっけど」

和歌さんは申し訳なさそうに言った。

「先生の代わりに、私が舞ちゃんに謝るわ。ごめんなさいね」

「え？何がですか？」

「歩君が舞ちゃんと市川さんに簡単にキスしたこと。」

と、言うか、簡単にそんなことをできるようになっちゃったこと」

・・・嫌な予感。

「先生ってね、キスが好きで・・・その・・・結構、辺り構わず私にそういうことしてくるの・・・」

婚約者なんだし、照れる必要もないだろうに和歌さんは真つ赤だ。声も小さくなる。

「歩君の前でも、平気でね。歩君、そんな先生を小学生の頃から見てるから、

キスに対して、あんまり照れとかがないみたいなの」

あああああ！

やっぱり！！！！

本城先生のバカ！！！！

「照れがない、って・・・誰にでも平気でキスしちゃうんですか？」

「そんなことないよ！歩君、そんな軽い子じゃないから！

ただ、相手が彼女だったら、先生みたいに人前でも平気って言うか・

私も、歩君が彼女にキスしてるの見たことあるし」

「・・・」

「あ、昔の話ね。歩君が中学校の時の話よ？今は彼女いないはずだし」

慌てて弁解する和歌さん。

私が森田を好きだって、気づいてるらしい。

もしや、先生。話したな？

もう、絶対許さないんだから！！

不機嫌オーラ全開の私に、和歌さんは更に謝る。

「先生にも気をつけるように言っとくから。あと、歩君にも」

「いえ、いいんですけど・・・和歌さんは、嫌じゃないんですか？

先生がそーゆー人だと」

「イヤ」

おお。バツサリ切り捨てましたな。

「でも、もう諦めたわ。先生って子供の頃、アメリカに住んでたらしいの。

向こうではキスなんて挨拶代わりだから、その時の癖が抜けないんだって」

「言い訳だ！」

「ほんとよね。でも、先生の弟さんはもつとひどいらしいの。

彼女じゃなくても・・・男の人にでも女の人にでも、キスしたくなったらキスしちゃうれしいから」

「・・・」

先生の弟って・・・

ああ、あの「高スペック&未婚の父」な弟ね。

もしや、キス癖が原因で嫁に逃げられたか？

「それに比べたら、先生はまだマシよね」

「・・・わかりませんよ」

「え？」

私はわざと意地悪く言った。

「先生、和歌さんの前では控えてるだけで、実は和歌さんのいないところじゃ誰彼構わずキスしてるかも」

「!!!!」

「先生にキスされて、嫌がる女の人はいませんもんね。もしかしたら、うちの高校にも・・・」

「まさか！」

「心当たり、ありません？」

腕を組んで考える和歌さん。
眉間に皺が寄っていく。

つて、心当たりあるんかい。

「・・・」

「和歌さん。先生の夕ご飯、しばらく無しでいいですよ」
「そうね」

和歌さんは頷いてすくつと立ち上がると、
キッチンへ入り、冷蔵庫から何やら取り出してきた。

「昨日はお肉だったから、今日はお魚にしようと思ってお刺身買ってきたの。」

一緒に食べちゃいましょう」

「やった！」

ふふん！

先生、ざまあみろ！

森田への怒りが、いつの間にやら先生へとシフトし、
しかもそこに和歌さんの怒りも加わり・・・

私達は、お刺身を大いに楽しんだ。

第3部 第21話

「三浦。この後、職員室に来い」

「嫌です」

「・・・お前は教師に逆らうのか」

「先生、その言い方はパワハラです。校長先生に訴えて・・・」

「お前、どっかの誰かに似てきたな。とつとと職員室に来い」

ちえつ。

仕方ない。

私は3限の本城先生の授業の後、職員室へ向かった。

何よ、何よ。なんで私が呼び出されなきゃ、いけないのよ！

でも、職員室では、私以上に不機嫌な本城先生が待ち構えていた。

「用件はわかってるな？」

「森田の再教育について」

「違う。俺の夕飯についてだ」

「そんなこと、生徒の私に言わないでください。全く、これだから近頃の教師は」

「・・・」

先生は、本気で怒りながら、でも小声で私に言った。

「昨日の俺の夕飯が何か知ってるか!？」

「あれ？あつたんですか？」
「なかった」

やっぱり。

「なんで俺があんなオシオキされなきゃいけないんだ！？俺、なんかしたか！？」

「胸に手を当ててよ～～～く考えてください」

本当に胸に手を当てる先生。

私は、催眠術師のように、まったりした声で言った。

「あれは、10数年前・・・まだ、和歌さんと出会っ前・・・ほら、あの女の人のこと、覚えてますか？」

「・・・うん・・・」

「じゃあ、あっちの女の人？こっちの女の人？ほくら、まだいる、まだいる・・・」

「・・・うん・・・」

「今まで、散々遊んできたツケが、今『夕ご飯抜き』という形で現れて・・・」

「・・・うん・・・、ってそんな訳ねーだろ！！！！」

教科書で思いつき頭を叩かれた。
結構痛いゾ。

「お前は！あいつに何を吹き込んだんだ、何を！」

「別に何も吹き込んでませんよ。事実を述べただけです」

「たくつ。好きな男とキスできたんだから、それでいいだろ。俺を巻き込むな」

「なっ！ひどい！！」

私が口を尖らせて怒ると、先生は笑った。

「おお。怒る元気があるなら大丈夫だな。落ち込んでたらどうしようかと思ったぞ」

「・・・」

なんだ・・・心配してくれてたんだ。

だったら、「大丈夫か？」とか聞けばいいのに。
素直じゃないなあ、先生も。

「まあ、三浦はどうでもいい」

なんだ、どうでもいいって。

「かわいそうなのは市川だ。キスしてみろ、なんて冗談のつもりで言っただろうけど、

相手が悪かったな。まさか本当にされるなんて思ってもみなかっただろう」

「でも、自業自得ですよ。これで先生のこと、諦めてくれるといいですけど」

私と先生は、なんとなく職員室の入り口の方を見る。
特に誰かいる気配はない。

「今日はまだ、一度も市川に話しかけられてないんだ。森田のお陰で、

本当に諦めてくれたのかもな。怪我のことも含めて、森田にまた礼しないとな」

「昨日のことは、お礼なんてしなくていいんじゃないですか？

案外、森田も喜んでやったのかもしれないし」

私が嫌味タラタラで言うと、

先生は、「そんなこと言う余裕があるんだな」と言っただけでまた笑った。

でも、もし昨日和歌さんに会っていないければ、そんな余裕なんて微塵もなかっただろう。

和歌さんは、先生の面白い話をいっぱい聞かせてくれた。でもそれは、決して先生を馬鹿にしたりするような内容ではなく、純粹に笑える話ばかりだった。

私は、教室へ戻りながら、昨日の和歌さんとの会話を思い出した。

「へー。じゃあ、和歌さんが修学旅行の時、本城先生が沖縄だったのは、

北海道組と沖縄組の生徒が本城先生を取り合いしてクジで決めた結果だったんですねー」

「そうなの。大騒ぎだったのよ」

来年もそうなりそうな気がする。

「それ以来、『本城先生は沖縄に行く』って暗黙の了解みたいなのができちゃって、

修学旅行の引率をする時は、必ず沖縄に行かされてるの。沖縄の方

が、教師にとっては大変なんだって」

「へえええ」

「一度は北海道に行ってみたい、ってずっと言ってるんだけどね、
いつも学年主任に却下されてる。」

『本城先生みたいに体力がある人は、涼しい北海道より暑い沖縄で
生徒と戯れてきなさい』って」

「へえええええ」

そんな裏話があるんだ・・・
面白過ぎる。

「でも、先生と和歌さんは別々の行き先でよかったかもしれませ
ね。」

修学旅行中にキスなんてされたら大変ですからね」

「な、何言ってるのよ」

和歌さんが赤くなる。

「その頃はまだ付き合ってないわよ。教師と生徒なんだから・・・」
「ぶっちゃけ、いつから付き合ってたんですか？和歌さんが高校生
の時から？」

「・・・・・・・・」

わかりやすいなー、なんて思ってたら、和歌さんが反撃に出た。

「そういえば、歩君はどうして急に舞ちゃんにキスしたのかしらね」
「・・・・・・・・」

「どんなのがキスかって聞かれたからって、それで舞ちゃんにキス
しちゃうなんて、
いくら歩君でも飛躍しすぎよね」

そうなのだ。

そして、和歌さんにも恥ずかしくて言えないけど、もう一つわからないことがある。

それは「キス」そのもの。

森田は、市川さんにしたキスを「あんなのキスって言わない」と言っ
た。

だから私は、じゃあ森田にとってのキスってどんなの？と聞いたの
だが・・・

森田が「こんなのが本当のキスかな」と言っ
て私にしたキスは、市川さんにしたキスと同じものだった。

ポケットに手をつ込んだままの、0・1秒のキス。

訳が分からない。

やっぱり、私なんかには本当のキスをするのは躊躇いがあったのかな。

自分のファーストキスがこんな変な形で終わってしまい、

本当なら悶々とした夜を過ごさなきゃいけないところだったけど、

和歌さんの話と、森田のキスの謎（？）のお陰で、クヨクヨせずに済んだ。

もちろん、まだ森田に腹は立つ。

でも、あんまり怒ったら逆に「何？キスしたことなかったのかよ？」
とかって、

森田に馬鹿にされそうだから、やめておこう。

あれは事故みたいなもんだ。

唇が相手の身体のどこかに触れればキスだ、と思ってたけど、あんなのは、キスじゃない。

さっさと忘れるに限る。

それに・・・腹は立つけど、森田を嫌いにはなれない。

ちよつと嬉しかったりもする。

ただ、森田が何の気持ちもなく、平気で私にあんなことをしたのは、悲しい。

森田にとつては何でもないことでも、私はこんなに振り回されてるんだってことをわからせてやりたい。

そのためには、森田に告白しないといけないんだけど・・・それは無理だ。

自分が誰かに告白してるところなんて、想像つかない。

だから、早く忘れよう。

そう決心しつつ、やっぱりショックが大きすぎて忘れられないんじゃないか、という心配はあった。

けど。

ほんの1時間後。

私は、昨日のキスなど綺麗さっぱり忘れるくらい衝撃的な光景に出くわすことになる。

第3部 第22話

「あ。森田君だ」

茜が学食の入りを顎でしゃくった。

普通なら指をさすところだけど、私も茜もおうどんをすすっている最中だったので、

そうでしなかつたんだろう。

加えて説明すると、茜が「森田君だ」と言っただけには訳がある。

森田も毎日学食でご飯を食べてるけど、

一昨日の怪我のせいで、右腕が思うように使えないらしく、

昨日の昼は購買でパンを買って教室で食べたようだ。

でも、今更第2成長期の森田はそれではやっぱり足りないのか、今日は学食へやってきた。

だから茜は敢えて「森田君だ」と言っただけだ。

「森田君、右手使えるのかな？」

「大丈夫なんじゃない？骨が折れてるわけじゃないし、鉛筆とかも普通に使ってるし」

「ふふ、詳しいのね。森田君と何かあったの？」

「・・・別に」

茜には、昨日のキスのことだけじゃなく、森田と先生のことまで話していない。

茜がそうだとは思わないけど、

教師と生徒が兄弟のように仲が良いなんて知ったら、いい気のしない生徒もいるだろう。

それに、一昨日のストーカー男事件のことが広まったら、せつかく校長先生が今のところ「穏便に」済ましてくれてるのに、台無しだ。

森田の怪我也、自転車で転んだということにしてある。

本当のことは、誰にも秘密にしておこう。

私は、目だけ井から上げて、森田を見た。

森田の右腕は、一応普通には動かせるみたいだけど、激しく動かしたり重い物を持ったりはできないのか、体育は見学してた。

今も、お盆相手に格闘している。

ここはキスのことは忘れて、いっちょ手伝ってやるか、と思ったけど、

森田は友達に恵まれているのか、すぐに周りの男子が「持ってやるよ」とか「おかず、どれにする？」と世話を焼いている。

そーゆー仕事は（下心のある）女子に取っというてよね。

という訳で、私は一心不乱におうどんを頂こうと思ったけど、変なところで遠慮深い森田は友達の申し出を断り、なんとか自分でおかずをお盆に乗せて運ぼうとしている。

こんなところで遠慮する前に、誰彼構わずキスすることを遠慮しろ、と、言ってやりたい。

そうだ、言ってやろう。

うん、言ってやろう。
一言、言ってやろう。

あくまでそう言うだけだ。

何も手伝ってやる訳じゃないんだ。

まあ、ついでにちよこつとくらいお盆を持ってやってもいいけど。

「茜。私、森田に文句言ってくる」

「は？手伝うんじゃないくて？」

「うん。文句言うだけ」

訳が分からん、という顔の茜を放置し、

私は、まだおかずコーナーの前でモタモタしている森田に近づいた。
そして、声をかけようと口を開いた瞬間・・・

「森田君」

え？誰？誰が森田を呼んだの？

森田が顔を上げた方向に私がいたから、

森田と私の目が合ったけど、森田はそのまま声のしたほうに顔をスライドさせた。

私も同じ方向を向く。

「市川？」

「お盆、持ってあげる」

えっ。

ダメ！

それ、私の仕事！！

って言いたかったけど、さすがにそこまで堂々とはできない。だって、私、別に森田の彼女でもなんでもないし。

「いいよ。こんくらい自分で持てる」

「でも、右腕痛いんでしょ？」

「痛いけど、平気だって」

森田はそう言ったけど、市川さんは構わず森田の手からお盆を取った。

そして、森田と私に向かって言った。

「私、反省したの」

「反省？」

「昨日三浦さん、私に言ったでしょ？本当に好きなら、迷惑になるようなことはしちゃいけないって」

言った。

私は頷いた。

「だから、これからは好きな人の為になるようなことしようと思っ
て」

市川さんは、森田を見た。

森田と私、ではなく、森田だけを。

「森田君の怪我が治るまで、お盆運ばせて欲しいんだ。迷惑かな？」

・・・かわいい。

女の私から見ても、この市川さんはかわいい。

今までのどことなく暗い雰囲気も、最近のジメツとした雰囲気も全くなく、

恋する乙女のキラキラオーラ全開だ。

しかも、元々かわいい顔立ちをしている。

これは、本当にかわいい。

い、いや、そんなことに感心してる場合じゃないゾ！

「別に、迷惑じゃないけど・・・」

おい！森田！照れるな！！

だけど、森田の言葉に市川さんは心底嬉しそうに微笑むと、

「ありがとう」と言って、森田がいつも一緒に食べている友達のところへ森田のお盆を運んでいった。

しかも引き際もちゃんと心得ていて、「一緒に食べよう」とは言わず、

自分の友達のところへさっさと行ってしまった。

もはやストーカー女の面影もない。

「・・・真弥のことは諦めたみたいだな」

「・・・うん」

「で、次は俺か」

「・・・みたいだね」

市川さんの後姿を見ながら、私と森田は啞然としてたけど・・・急に森田がニヤツと笑った。

「俺も、真弥から女を取れるようになったのか。成長したなあ」

「第2成長期だもんね」

「おう。そうだったな。第3成長期になったら真弥よりモテるかな」

そんなもん、人間には存在しないだろう。

いや、サルにはあるのか？

「市川かー。まあ、悪くない」

「悪くないって、あんた、何様のつもり？」

「ふふん。言ってる、言ってる」

「はあ？何調子こいてんの」

私は軽口を叩きながらも、内心ドキドキしていた。

さっきの市川さんは本当にかわいかった。

森田が市川さんのことを好きになる、なんてこともありうる。

そして、もし2人が付き合うようなことになったら・・・

「そーだ。三浦」

「・・・何よ」

「昨日のことだけど」

・・・え。

キス、のこと？

私の胸は、また別のドキドキを始めた。

「真弥から『俺の刺身を返せ』ってメールが来たんだけど、どーゆー意味かわかるか？」

「.....」

第3部 第23話

区役所の近くの駅前で、

森田と2人、ガードレールに腰掛ける。

会話はない。

私は別に、意識して何も話そうとしていない訳ではないけど、森田が何も話さないから、それに合わせてる。

と言っても、森田は不機嫌な訳ではない。

むしろその表情は、穏やかだ。

そして、ちよつと緊張しているのか、瞬きもせずじっとアスファルトを見つめている。

9月中旬にしては、夏の制服では少し肌寒い朝。でも、いい天気でよかった。

見上げると、心なしか空が高く見える。

秋の空だ。

「来た」

森田がガードレールから地面に降りた。

私も、森田の視線の先を確認して、ゆっくりと森田の横に立つ。

向こうもこちらに気づき、手を振りながら近づいてきた。

「あれ。日曜なのになんで2人とも制服なんだ？」

「それより！ちゃんと済ませてきたのかよ？」

先生と和歌さんが照れくさそうに微笑み、小さく頷いた。
森田が、大きくため息をつく。

「はあ、よかった・・・」

「なんだよ、それ」

「真弥と和歌さんのことだから、直前にまた問題が起きるんじゃないかと思って冷や冷やしてたんだぞ」

「んな訳、ないだろ」

そうは言いつつ、先生も心底ホッとしているようだ。

「先生、和歌さん・・・ご結婚、おめでとーございます」

私は胸が熱くなり、なんとかそれだけ言った。

「ああ。ありがとな」

「ありがとー、舞ちゃん」

今日、9月12日。

和歌さんの24歳の誕生日。

先生と和歌さんは、結婚した。

2人と出会ってまだ間もない私でも、これだけ感慨深いんだから、ずっと昔から2人を見守ってきた森田は、どんな気持ちだろう。

チラッと右隣を見ると、森田は気の抜けたような笑顔だ。
こんな森田は初めて見る。

本当に2人のことを心配してたんだ。

「あ、先生。もう結婚したんだから、和歌さんのこと『月島』なんて呼んじゃダメですよ」

「お、そーだな。もう『月島』じゃないもんな。和歌さんも、いい加減『先生』はやめろよな」

「えっ……」

先生と和歌さんは、2人して固まる。

そして顔を見合わせて、はにかみながら「どうしよう……」とやっている。

もう何年も付き合ってるのに、なんなんだこの初々しさは。
勝手にしてちょうだい。

森田も同感らしい。

「いちゃいちゃするのは後にしてくれ。時間がないから、行こーぜ」

「え？どこに？」

「お祝いするって言っただろ」

先生と和歌さんが首を傾げる。

私達がお祝いに何か「物」をくれると思っていたようだ。

ふふふ、違うんだな、これが。

私と森田は、戸惑う二人を待たせてあったタクシーに押し込み、一路目的地へ向かう。

「おいおい。なんだよ、どこ行くんだよ」

「内緒」

「・・・歩が俺をタクシーに無理矢理乗せるって・・・月島が手術で大阪に行った日みたいだな。」

「なんか、いい予感はしないんだけど」

「まーまー」

しきりに行き先を知りたがる二人をなんとか20分ほどかわし続けていると、

ようやくタクシーが止まった。

運賃は、先生達が気にしないでいいように、最初に少し多目に支払っている。

タクシーから降りた先生と和歌さんは、目の前のモノを呆然と見上げた。

「歩、ここ・・・」

「さーさー、急いで。三浦、和歌さんを頼むぞ」
「任せて」

森田は先生を、私は和歌さんを別々の方向へ引っ張って行った。

「ま、舞ちゃん・・・！」

よほど驚いたのか、先生と離れて1分ほどしてから和歌さんがようやく口を開いた。

「ここ、何？」

「見たらわかるでしょ？」

「・・・教会」

「ピンポーン」

正確に言うと、教会ではない。

でも建物が教会の形をしているから、和歌さんはそう思ったのだらう。

ここは、結婚式場。

と言っても、きちんとした結婚式場じゃない。

披露宴会場はなく、あるのはチャペルとお庭と控え室だけ。

私はこんな所があるなんて知らなかったけど、

「披露宴はしなくていいから式だけ挙げたい」というカップルに人気の式場らしい。

費用も、どんな式にするかによって変わるけど、一番シンプルなプランだと5万円ほどで挙げれる。

先生と和歌さんは結婚式をしないと書いていた。

それは多分、結婚式の準備はとても大変だから、先生が和歌さんの身体を気遣って、行わないことにしたのだろう。

確かに、今回私も手伝ってみてよくわかったけど、本当に大変だった。

決めなきゃいけないこと、選ばなきゃいけない物が多すぎる。披露宴をやるなら尚更だろう。

和歌さんはもう元気だけど、先生はきつと、この大変さを知っているから、無理をしてまで結婚式をしなくていいと思ったんだ。

だから森田は、2人の代わりに・・・いや、2人へのお祝いとして1人でこの結婚式を準備しようとしていた。お金も、お小遣いや貯金でなんとかしようとしたみたいだ。

でもやっぱり、飾るお花や和歌さんのドレスに関することは、男の森田じゃ手に余る。だから、私も手伝うことにしたのだ。

新婦用の控え室に入ると、

中には既に、メイクをしてくれる人が待っていた。和歌さんと同じ歳くらいの若い女の人だ。

「今日は、まことにおめでとうございます」

メイクさんは丁寧にお辞儀をしてくれたけど、和歌さんはまだイマイチ事情を飲み込めていないのか、

「え、あ、はい・・・」と、曖昧な返事をしている。

ただメイクさんには、これがサプライズの結婚式だとあらかじめ説明してあるので、

テキパキと作業を進めてくれた。

「ドレスはどれになさいますか？」

「えっ・・・」

壁に綺麗に掛けられた5着のドレスを見て、和歌さんが目を見開く。どれもタイプの違うドレスだけど、和歌さんに似合いそうなものばかりだ。

「和歌さん。これ全部、西田穂波さんが選んでくれたんです」

「・・・穂波が？」

「はい」

ドレスだけじゃない。

アクセサリーやヴェールも、西田さんが和歌さんのために選んでくれた。

先生の方のタキシードは森田が1着選んだ。

西田さんは、まずそれを見てから、

「コレを着た先生に合うドレスじゃなきゃね」と言っ
て、3時間以上もかけて選んでくれたのだ。

「・・・」

「あはは、和歌さん。泣くには早いですよ？まだ何にもしてないじゃないですか」

「うん・・・」

和歌さんは涙ぐみながら、そつと一着のドレスに手を伸ばした。

第3部 第24話

私が1人で教会の中に入ると、白いタキシード姿の先生がすぐに私に近づいてきた。

「三浦！」

「うわ、先生！かっこいい！」

お世辞じゃない。

先生は顔もかっこいいし背も高いから、こっぴどい格好が本当によく似合う。

特に、森田が選んだこのタキシードは先生のイメージにピッタリだ。

でも先生。和歌さんも負けてませんよ、と言いかけて、ぐっと堪える。

「三浦・・・ありがとうな」

「いえいえ。先生のその格好見ただけでじゅっぶんです」

「・・・照れくさいな」

「ふふふ」

先生は自分を見下ろして、頭を掻いた。
本当に照れくさそうだ。

そんな先生の背中を、森田がドンと叩いた。

「じゃ、始めよーぜ」

「ああ・・・って、どうしたらいいんだ？」

「和歌さんが、教会の外で待ってるから真弥が迎えに行っちゃって。」

で、2人で教会の中に入って挙式するんだ」

本当なら、新郎は祭壇の前で、新婦とお父さんが腕を組んで入ってくるのを待つてるんだけど、

今日は、先生の親族も和歌さんの親族も招待していない。

親戚関係と呼んできると切りがないし、これはあくまで私達からのただのプレゼントだから。

「わかった。お前らは？中にいるのか？」

「いていいのか？」

「・・・」

「真弥と和歌さんのことだから、どーせ恥ずかしくて見て欲しくないだろ？」

俺達は式の間は外で待つてるよ」

「・・・助かる」

ぷぷぷ。

本当は凄く見たいけど、森田の言う通り、私達に見られてたんじゃ、先生達の性格からして落ち着かないだろう。

先生と和歌さんの式なんだから、2人のしたいようにさせてあげよう。

私と森田が先生に段取りを説明していると、牧師さんが笑顔でやって来た。

外人さんだけど、綺麗な日本語を話せる人だ。

「本日は、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「結婚式を生徒達に準備してもらえるなんて、あなたは人としても教師としても、とても幸せですね」

「はい・・・」

先生が私と森田の方を見て微笑む。

本当に幸せそうなその笑顔に、思わず私も微笑み返した。

「これをどうぞ」

牧師さんが先生の手になかを握らせた。

白い花で作られたかわいいブーケだ。

「ブーケの由来を知っていますか？」

「いえ・・・」

「昔ある男が、花を摘んで花束を作り、それを渡しながら恋人にプロポーズしました。

それがブーケの始まりです」

「・・・」

「ですから、このブーケを持って、彼女を迎えに行ってあげてください」

「・・・はい」

牧師さんは「では、行きましょう」と、バージンロードを教会の入り口に向かって歩き出した。

それに先生が続き、更に森田と私が続いた。

誰もいないシンとした教会に、私達4人の足音だけが響く。

私は、自分が結婚するわけでもないのに、意味もなく緊張した。

いつか、私もバージンロードを花嫁として歩く日が来るのかな。
その先に待っているのは、誰なんだろう。

目の前の森田の背中を見してみる。

もし、そこに待っているのが森田だったら・・・

「さあ、どうぞ」

牧師さんが、ゆっくりと教会の扉を開いた。
薄暗い教会の中に、光がさし、私は眩しくて目を細める。

先生も立ち止まり、目が慣れるのを待つ。

そして・・・

「・・・」

先生は言葉もなく、扉の向こうに立つ和歌さんに近づいた。

森田が私を振り返り「すげーな」と目で言う。

私も「でしょ？」と目で言う。胸を張った。

「・・・月島・・・」

「先生・・・ど、どうですか？変じゃないですか・・・？」

和歌さんが自信なさ気に肩をすぼめる。

和歌さんが選んだのは、5着のうちで一番シンプルなマーメイドラインのドレスだった。

西田さんが「多分、和歌はこれを選ぶんじゃないかな」と言っていたドレスだ。

光沢があり、それでいて派手でない生地が、白い和歌さんの肌に自然と馴染んでいる。

本当に・・・本当に、よく似合う。

メイクも、濃すぎず薄すぎず、上手に和歌さんの綺麗さを引き立ててる。

メイクさんは、今日初めて和歌さんを見たはずなのに、凄い。

美しい、って言葉以外出てこない。

「びつくりした・・・綺麗だよ」

「・・・本当ですか？」

先生はそれ以上、何も言わなかった。

でもその温かい眼差しを見れば、思っていることは簡単に分かる。

「歩君、舞ちゃん。本当にありがとう」

「礼はいいから。ほら、早く入りなよ。牧師さんが待ってる」

「うん・・・」

先生が和歌さんの目を見ながら、相変わらず何も言わずにブーケを渡した。

和歌さんも先生の目を見ながら、ブーケを受け取る。

・・・何を伝え合ってるんだろう。

私と森田じゃ、さっきの「すげーな」「でしょ？」くらいが関の山だけど、

先生と和歌さんは、きっと目を見るだけで、たくさんの会話ができるんだ。

羨ましい、と思った。

2人が結婚したことよりも、そんな信頼関係を築けていることが羨ましい。

辛いことを乗り越えて来たからこそ、今の2人があるんだろう。

「月島」

「はい」

「・・・行こうか」

「はい」

2人は腕を組み、教会の中へと入って行った。

第3部 第25話

歓声と共に、無数の花びらと羽が空を舞う。
青い空にその白い色がとても良く映える。

が。

その中央に立つ2人の表情はぎこちない。
というか、驚きのあまり、固まってる。

「せんせー、おめでとう！」

「・・・」

「先生と月島が付き合ってたなんて知らなかった！しかも、結婚するなんてな！おめでとう！」

「・・・」

「その人が噂の先生の彼女？ってゆーか、奥さんかあ。綺麗な人ですね！」

「・・・」

「ぶぶ、タキシード、似合ってますよ」

「・・・」

「月島さんも、すっごい綺麗！あ、もう月島和歌じゃなくて、本城和歌なんだね」

「・・・」

2人きりの式を終え、先生と和歌さんが教会から出てきたとたんにこの大騒ぎ。

顔の一つも引きつらせたくなるだろう。

「歩・・・三浦・・・なんだ、これは・・・」

「ははは。なんか、大袈裟になっちゃってさ」

最初は、森田１人でこの結婚式を準備するつもりだった。

そこに私に加わり、お兄ちゃんを巻き込んだ。

更に、お兄ちゃんと同級生である元３年５組の人たちが加わった。

そして、どうせなら言うことで、現在の１年２組の生徒たちにも声を掛けた。

結果。

最初の予定より、かなり豪華な式を準備することができた。

そして式の間に、こっそりここに集まった人の数は、７０を下らない。

２人の人柄の成せる業だろう。

「先生、奥さん、こっち向いて！写メ撮るから！」

「や、やめろ」

「ダメ。・・・よし！バッチリ！他のクラスの子にも送っとくね！」

「やめろ！！！」

「あ。杉崎先生が絶対送ってって、アドレス教えてくれたんですけど、送っていいですか？」

「ぜつつつたいやめろ！！！」

もう２人を囲んでお祭り騒ぎだ。

そしてその人ごみを掻き分けて、１人の女の人が和歌さんに抱きついた。

「和歌ー！おめでとうー！」

「穂波！・・・ありがとう。このドレス、凄く気に入ったわ」

「うんうん、似合ってる・・・よかったあ〜」

「そんなに泣かないでよ・・・お腹の子に障るわよ？あ、またこんなところで陣痛起こさないでね」

「もう・・・まだ大丈夫よ。予定日までまだ2週間あるし」

「に、にしゅうかん！？何やってるのよ！」

「だつて〜〜ううう」

ふふ、相変わらずだなあ、西田さん。

私と森田は、少し離れたところでそんな光景を眺めていた。

もちろん、お兄ちゃんとヒナちゃんの姿もその中にある。

お兄ちゃんの代の人たちは、先生だけでなく和歌さんのことも知ってるから、

一様に「この2人が結婚するなんてすごい！」と言った感じだ。

制服姿で携帯片手に騒いでいるのは、1年2組の生徒たち。

任意にもかかわらず全員参加だ。

みんなは和歌さんのことは知らないけど、

とにかく「本城先生が結婚した！」と言うことと、先生のタキシード姿に大興奮している。

そして、最初はかなりぎこちなかった先生と和歌さんも次第になれてきたのか、

写真撮影に応じたりしている。

「頑張つて準備した甲斐があつたね。2人とも幸せそう」

「ああ。いいもんだな、結婚式って」

「・・・うん」

森田は何気なく言ったんだろうけど、妙に意識してしまう私。
馬鹿だな、と自分で突っ込んでおこう。

その時、人だかりの中から、和歌さんが出てきて私達の方へ歩いてきた。

「舞ちゃん」

「はい」

「これ、舞ちゃんにあげる」

和歌さんはそう言って、私にブーケを差し出した。

「え、でも・・・」

「今日はありがとう。結婚式はするつもりなかったけど、やっぱりやってよかった。」

歩君と舞ちゃんのお陰よ。このブーケ、どうしても舞ちゃんに貰って欲しいの」

「・・・ありがとうございます」

私は白いブーケを和歌さんの手からそっと受け取った。

牧師さんのさっきの話だと、ブーケは本来、男の人が女の人にプロポーズする時に渡す物らしい。

つまり、先生から和歌さんへのプロポーズの証なんだ。

そんな大切なもの、私なんかがもらっちゃっていいのかな・・・

私が悩んでいると、森田が急に妙なことを言い出した。

「和歌さんから三浦へのプレゼントは二つ目だな」

「ふふ、そう言えばそうね」

和歌さんも相槌を打つ。

「え？私、和歌さんに何か貰いましたっけ？」

「そっか。舞ちゃんは知らないのね。」

小学校の頃、歩君からまりもキティちゃんのキーホルダー貰ったでしょ？

あれ、私が歩君に、修学旅行のお土産としてあげたもののなの」

は？

なに？

なんて？

私がポカンとしているのに気付かず、森田が何故か慌てて付け足す。

「でもさ、男の俺がそんなの持つてるのも変だろ？だから三浦にあげたんだよ」

「・・・」

「その時は、歩君がキーホルダーをあげた女の子が、三浦君の妹だなんて知らなかったけど。」

ほんと、すごい偶然よね。こないだ先生から聞いてビックリしちゃった」

「そっだよな。俺もまさか三浦の兄貴が和歌さんの同級生だとは思

わなかったよ」

和歌さんと森田は、「世の中狭いなー」とか言いながら笑い合う。

って、待て。

何それ。

「和歌ー！一緒に写真撮ろう！」

「うん！ちよっと待って！・・・じゃあ、後でね。本当にありがとう」

和歌さんはそう言って私にブーケを手渡すと、再びみんなの輪の中へ戻って行った。

いつも通りの森田と、全然いつも通りじゃない私の2人を残して。

第3部 第25話（後書き）

次回、最終話です。

第3部 第26話

「何、ボーっとしてんだよ」

「まりもキティちゃん・・・」

「ん？ああ、ビックリしただろ。あれ、和歌さんからの・・・」

「・・・違う」

「え？」

私は森田を全力で睨んだ。

「違う！・・・あれ、私にくれたのは森田じゃない！・・・ひばりのだに雲雀乃谷君だもん！・・・」

森田は「はあ？」と首を傾げた。

「まあ、そうだな。あの頃は俺、『雲雀乃谷』だったし」

「雲雀乃谷・・・」

「そう。ひばりのだにあゆむ雲雀乃谷歩。小4の時、母さんが再婚して『森田歩』に変わったけど」

「！！！！！！」

「そうだ！！！！」

「そうだった！！！！」

雲雀乃谷君の名前、「歩」だった！！！！

苗字のインパクトが強すぎて、名前なんて忘れてた！！！！

「じゃあ・・・」

「じゃあ・・・」

馬鹿みたいに口を開けてる私を見て、さすがに森田も感づいたらしい。

「おい、三浦・・・もしかして、気付いてなかったのか・・・？」

「・・・」

「・・・マジかよ」

森田が思いっきり顔をしかめてため息をつく。

「・・・信じらんねー・・・じゃあ、俺が雲雀乃谷だって知らずに、あんなこと言ってたのか・・・」

あんなこと？

私は、まだショックから立ち直らない頭をフル回転して、今まで森田に話したことを思い出そうとした。

でも、かろうじて思い出せたのは、初恋の人からまりもキティちゃんを貰った、と森田に話したことだけだった。

それだけでもじゅうぶん赤面物だ。

だって、さりげなく昔の恋心を本人に告白していたのだから。

しかも森田は、私が森田と雲雀乃谷君が同一人物だと分かっていると、思ってたらしい。

う、うわ・・・

私、他にも何か、とんでもないこと言ったんじゃない・・・

「も、森田はいつ、私だって気付いたのよ……って、そっか、名前でわかるよね……」

私は今も昔も「三浦舞」だ。

森田みたいに途中で名前が変わるなんてウルトラQはやってない。

「なんだ、そのウルトラQって。それを言うなら、ウルトラCだろ。ウルトラQってウルトラマンのことだぞ。」

それはともかく、俺、名前なんか聞く前から気付いてたし」

「え？」

「入学式の日、お前電車の中で転んでパンツ丸出しにしてただろ？昔もよく転んで、パンツ出して泣いてたもんな」

「……」

「それに顔見りやすぐわかったよ。『あ。小3まで一緒だった舞だ』って」

舞。

森田が言った「舞」と言う名前で、私の記憶は一気に小学校時代へ飛んだ。

そう。

森田……いや、雲雀乃谷君は私のことを「舞」って呼んだ。

声は変わってるけど、この発音、この感じ……
確かに雲雀乃谷君だ……

「……どうして、昔みたいに『舞』って呼んでくれなかったのよ」
そうしてくれたら、私もすぐにわかった、

かもしれないのに。

「お前だって俺のこと『森田』って苗字で呼び捨てするからさ。合
わせてただけ」

「・・・」

「はあああああ〜」

森田がまた大袈裟なため息をつく。

まあ、ため息の一つもつきなくなるだろう。

ごめんよ、鈍くって。

「あ！！！！！」

「・・・なんだよ、まだ何かあるのか？」

「どうしよう・・・私、まりもキティちゃん、捨てちゃった・・・」

「あー、そうだったな。酷い奴だよな、お前」

「だって！森田が『キモッ』とか言うから！！」

そうよ！

私が、「初恋の人（つまり森田）にもらった物だから」と何年も大
切に持ち歩いていたのに、

それを当の森田がなんで「キモッ」って言うのよ！！

・・・って、そっか。

本当に「キモ」かったんだ・・・だからそう言ったんだ。

私ってば、雲雀乃谷君本人に気持ち悪がられてたんだ・・・

私が落ち込んでると、森田が取り繕うようにボソボソと言った。

「あれは・・・その、ちょっと恥ずかしくなってさ・・・」

「え？」

「なんでもない！！あー、もう！なんなんだよ、お前！！！」

森田がグシャグシャと頭を掻きむしった。
相当イライラしてるらしい。

「はあ・・・」

「あの・・・なんか、ごめんね」

「ごめんね、じゃねー。はあ」

「ため息日和だね」

「あのな」

森田がもう一度ため息をつく。
でも、私もため息をつきたい。

だって、初恋の思い出だけでなく、今現在好きな森田からのプレゼントも捨ててしまったんだから・・・

「来年」

「え？」

「来年の修学旅行、北海道にしようぜ。今度は俺がまりもキティ買ってやるよ」

「ほんと！？」

森田は、先生と和歌さんの方を見たまま、小さな声で「うん」と言った。

・・・嬉しい。

森田がどういふつもりなのかは分からないけど、嬉しい。

「ありがとう、うれし・・・」
「森田君！」

っげ。

せつかく人が素直になろうと思ったのに、
とんだ邪魔者が乱入してきた。

「あ。市川」

「ねえ、森田君。この後一緒に昼ご飯食べない？」

「昼飯？」

「うん」

森田が困ったように頭を掻き、チラッと私を見た。

私は「絶対ダメ！」という視線を送ったけど・・・

「迷惑かな？」

市川さんがかわいらしく小首を傾げる。

おい、なんだ「小首」って。

チンパンジーにはそんなもん、存在しないぞ。

が、森田もこう言われると弱い。

気まずそうに私から目を逸らし、「いや、迷惑じゃないけど」とか
言い出した。

ならば私が代わりにズバッと言ってやろう！

「ダメ！！」

「三浦さんには関係ないでしょ？」

「ないけど、ダメ!!」

「ほっとしてよ。私と森田君の問題よ」

「ダメだったら、ダメだったら、ダメ!!!!」

女2人でギャーギャー言い合っている、さすがのサルもギブアップしたようだ。

「あー!もう!!!!うつさい、お前ら!!!!」

森田は私と市川さんを放置し、先生達の方へと走り出した。

「森田!!」

「森田君!!」

私と市川さんはバチバチと火花を散らし・・・森田を追いかけて、一緒に駆け出す。

私の右手の中で、白いブーケが笑うように揺れた。

—— 「お兄ちゃんと先生とアイツの彼女!」 完 ——

第3部 第26話（後書き）

*おまけのお話が3つあるので、完結設定にしております。

「お兄ちゃんと先生とアイツの彼女！」を最後まで読んで頂き、本当にありがとうございます。「先生の彼女！」と合わせて「○○の××！」シリーズのメインストーリーが一応完結いたしました。な、長かった……。でもまた書くかもしれません（笑）

このシリーズには、おいしいキャラが沢山出ているので、「○○の××！」シリーズ以外でも、タロウらしく活用していきたいと思います。

過去のお話は、時代が古い順に「私と彼の生きる道」「私の旦那様！」「王子様の片思い！」「あの子の恋愛事情！」「先生の彼女！」などがあります。

こちらもお楽しみ頂けると嬉しいです。

さて、これからですが、アイドル探偵と「男なんて大ツキライだっ！ー！」という強烈な題名のショートストーリーを挟んで久々にR18の長編に挑戦したいと思っています。題名は……。まだ考えてません。。タロウは小説の題名を考えるのが何より苦手です。どうしようかな……

ちなみに舞台は、舞の時代を基準にすると8年前の海光学園というところです。これだけで登場人物が分かった人は、相当なタロウマニアです……。

では、今後ともよろしくお願い致します。

おまけ1 お兄ちゃんのプロポーズ

9月の涼しい夕暮れ道を、俺とヒナは並んで歩いていた。

「月島さん、綺麗だったね」
「そうだな」

いつもの調子なら、俺の「そうだな」は適当な相槌だけど、今日は違う。

俺も心からヒナと同じ気持ちだ。

今日の月島は本当に綺麗だった。

元々美人だし、特に今日はウェディングドレス姿だったから、というもあるけど、

何よりその幸せそうな表情が「綺麗」だった。

そして、本城先生もそういう意味でかっこよかった。

いや、あの先生はいつもかっこいい。

顔だけじゃなく、人としても。

高校最後の1年、先生のクラスになれて本当によかった。

数学だけじゃなく、色々学ぶことができた。

特に、2学期の終業式の日先生がしてくれた話は、今でも鮮明に覚えている。

そうだ。

いい先生、といえば、あの先生も数学の先生だった。

「ヒナ。あの森田って奴だけど、」

「ああ、舞ちゃんの彼氏？」

「違う！彼氏じゃない！」

そう、断じて舞の彼氏なんかじゃない！

「ふふ、そう？近々そうなると思うけど」

「俺は思わない！・・・とにかく、森田先生って覚えてるか？
高校の時、本城先生と一緒に数学教えてくれてた森田先生」

「うん。覚えてるよ」

「あの森田って、森田先生の息子らしい。舞が言ってた」
「ええ！？そうなの！？」

ヒナはしばらく考えてから「似てないね」と言った。
そりゃそうだろう。

再婚相手の連れ子なんだから。

「そつかあ・・・森田先生の・・・あれ？」

ヒナが首を傾げた。

「そう言えば今日、先生、森田君のこと、步って呼んでたよね」

「そうだった？」

「うん。步って・・・ああ！そうだ！」

「な、なんだよ、急にデカイ声だして」

「ほら！高3の時！本城先生にボーリングに連れて行ってもらった
ことがあったでしょ？」

「え？・・・ああ、そう言えばそんなことあったな」

正確には先生に連れて行ってもらったんじゃない、俺らが強引に連れて行かせただけだ。

「あの時、先生、小学生の男の子を連れてきたじゃない？あの子も歩君って名前だったよ」

「えっ」

「私、あの時その子とペア組んでゲームしたから覚えてる。確かに歩君だった」

俺も覚えてる。

小学生のくせに、生意気でしっかりした奴だなと思ったから。

あの時の子供が、森田歩！？

舞の彼氏、じゃなかった、クラスメイト！？

そうか。

先生はあの小学生を自分の弟みたいに可愛がっていた。

だから、森田は先生のために結婚式なんて凄いものを用意したのか。

「披露宴無しとは言え、あれだけの準備、大変だったろうね」

「・・・そうだな」

悔しいが、今度も心からの同意だ。

俺はもちろん結婚式の準備なんかまだしたことないけど（断られたから）、

俺の周りには、結婚したやつもちらほらいる。

その話を聞くだけでも、結婚式の準備というのは物凄く大変そうだな。

金も時間も労力もいる。

高校からの友達の遠藤も、「とにかく喧嘩が絶えない」と苦笑いしてたっけ。

それを、あの森田って焼肉男は1人でやろうとしてた訳だ。
まあ・・・悪い奴じゃないのかもしれない。

結婚か。

正直、ヒナにプロポーズしたのは焦ってたからだ。

ヒナの、間宮って人との浮気事件（俺の勝手な誤解だったわけだが）のせいでもあるが、

桜子が「三浦君の彼女がうちの託児所に来てくれるなら、チーフとして働いてもらうことになるわ。何と言っても即戦力だし」と言ったせいでもある。

俺はまだ学生なのに、

ヒナはもう社会人2年目で、しかも来年からは大きな仕事を任されることになるかもしれない。

なんか・・・置いていかれる気がした。

ヒナも実は心のどこかで、俺なんかよりしっかりした男の方がいいと思ってるんじゃないかと、心配になった。

そんな俺にヒナは、俺が本当に結婚したくなるまで待つと言ってくれた。

でも、俺が本当に結婚したくなる、って・・・それはいつだろう？

本当に結婚したい、ってどんな気持ちなんだろう？

なんかピンと来ない。

俺はヒナを見下ろした。

俺とヒナは身長が30センチ近く違うから、本当に「見下ろす」という感じた。

その胸元には、大振りの石がいくつかついていたネックレスが揺れている。

今日は、森田から事前に「堅苦しい格好じゃなくていい」と言われていたから、

女はみんな、簡単なワンピースだった。

ちなみに男は俺も含めて全員、スーツにシルバータイ。

堅苦しいといえば堅苦しいけど、これが一番無難で簡単だ。

まあ、それはともかく。

ヒナも薄いブルーのワンピースにボレロを羽織っているだけで、髪も自分でまとめたみたいだ。

この格好には確かに今しているネックレスが合う。

いつもヒナがしているネックレスではなく。

高校1年のホワイトデー。俺はヒナに誕生石がついた指輪をプレゼントした。

確か2万円弱くらいだった。

バイトもしてない高校生にとっては、かなり高価なプレゼントだと思う。

でも一目見て、ヒナに似合うだろうと思い、それに決めた。

ただサイズが合わず、それ以来ヒナはその指輪をチェーンに通してネックレスとしていつも身につけている。

本当にいつも身につけている。

本当に・・・大切にしてくれている。

だけど、

高校生にとっては高価な物でも、社会人の女が肌身離さず付ける物としてはどうなんだ。

いい加減やめてもいいだろ。俺も恥ずかしい。

でも・・・今日こうやってヒナがあネックレスを身につけていないのを見ると、

寂しくもあり、なんかちょっと腹立たしくもある。

だって、ヒナがあれをつけてないなんて、初めてじゃないか？

俺も勝手だな。

「三浦君？どうしたの？」

「・・・別に」

だけど、ヒナに誤魔化しは通用しない。

俺が不機嫌な時は、いくら隠そうとしてもヒナは気付くし、その原因も簡単にばれてしまう。

今日もそうだ。

でも、いつもなら「ごめんね」と謝ってから「私、何かした？」と聞くヒナだけど、

今日は何故か得意げだ。

なんなんだよ、ったく。

「見て」

ヒナはそう言っ、俺の目の前に自分の右手を広げて見せた。
その薬指には・・・いつもはヒナの胸元にあるはずの指輪が光っている。

「え？」

「えへへ。最近ちよつと痩せたの。それで、なんとかこの指には入るようになったんだ」

「・・・」

ヒナは左利きだから、左の指より右の指の方が細い。
だから、左の薬指より先に右の薬指に入るようになったんだろう。

つて、え？痩せた？

「ダイエットでもしたのか？」

ヒナはお世辞にも細いとは言えない。
月島や舞と比べるともちろんだが、
平均から言っても、細くない。
ハッキリ言っ、ぽっちゃりしてる。

そもそもよく食う方だし、特に甘い物が好きと来てる。

食べ物の誘惑にも弱い。

これで細けりゃ、ダイエットしてる人に申し訳ない。

「うん。私、ダイエットできないの知ってるでしょ？」

よく、知ってる。

でも、俺は細過ぎる女は好きじゃない。

まあ、ヒナはもうちょっと痩せてもいいと思うけど、別にそんなこと、どうでもいい。

「最近仕事が忙しくて、気付いたら痩せてたの」

「忙しい？」

「うん。10月には運動会も遠足もあるから」

ヒナは右手を俺の前から下ろし、えへへ、と笑った。

「これが最後だから、頑張りたいの」

「・・・」

そっか、来年の4月からは、桜子の家の病院内託児所で働くんだもんな。

あそこは当然一時預かり専門の託児所だから、

運動会や遠足といったイベントはない。

もっというと、散歩とかもないんだろう。

ただ室内で何時間か遊ぶだけだ。

ヒナには少し物足りないかもしれない。

でも、今の保育園にはない大変さややりがいもあるだろう。だから、移ることを決めたんだ。

「ああ。頑張れよ。また折り紙とかで作るもんあったら、手伝うから。舞にも手伝わせるし」

「あはは、ありがとう」

「・・・」

俺は、笑うヒナの右手を取り、その薬指に光る指輪をジッと見た。

これが、右手ではなく、左手の薬指にはめられていたなら。これが、本物のエンゲージリングなら。

俺はどれだけ幸せで満足だろう。

・・・そうだ。

俺が本当に結婚したくなる日なんて、きっとずっと来ない。だって俺はもう、ヒナと結婚したいと本気で思ってる。ずっとそう思ってきた。

だから、そんな日は待ってても来ない。もう来てるのだから。

「ヒナ」

「なに？」

「結婚しよう」

ヒナがポカンとする。

「あ・・・うん。そうだね。三浦君がお医者さんになったら・・・」

「今、しよう」

「へ？」

「この近くに区役所あったよな。行こうぜ」

「ちょ、ちよっと待って」

ヒナが、歩き出そうとする俺を慌てて遮る。

「無理だよ！」

「なんで？」

「なんで、って・・・ほ、ほら、今日、日曜だし！」

「日曜でも婚姻届は出せるだろ。先生達だって、今日出したんだ」

「でも！私達、婚姻届の紙も持ってないし！」

「あ、そっか。それもそうだな」

「ね？」

ヒナがホッと胸をなでおろす。

「んじゃ、明日にしよう。取り合えず今日は今からヒナの親に挨拶に行くか」

「み、三浦君！！」

「ちようどスーツだし。シルバータイは変かな？ま、いつか」

「ちよっと！」

「ヒナの親、俺のこと結構気に入ってくれてるみたいだから問題ないだろ」

「ある！！」

「よし、行こーぜ」

「三浦君！！」

俺はヒナの右手を引き、駅に向かって歩き出した。

薬指の指輪の感触を確かめながら。

おまけ2 先生の決意

宴もたけなわになり、みんないい感じに酔っ払ってる。
立食形式の食事の皿も、ほとんど空だ。

が、俺は全然酔えない。

みんなに会うのも久々だからかなり飲んだけど、酔えない。

俺は、少し離れた場所で数人と談笑している「酔えない原因」を見つめた。

変わってないな。

もう37歳のはずなのに、あの頃のままだ。

小柄で細い体型も、綺麗な黒髪も・・・笑顔も。

その時、ふと彼女の周りから人がいなくなり、彼女が1人になった。
今日ずっと待ってたこのチャンスが、ようやく来た。

俺はそれを逃さないために、足早に彼女に近づいた。
彼女も俺にすぐ気づく。

「本城君！」

「・・・」

彼女のこと、なんて呼べばいいだろう。

昔みたいに、「神谷先生^{かみや}」？

でももう結婚してるから、「宇喜多先生」？

一瞬悩んだけど、答えが出なかったなので、俺は無難に「先生」とだけ言った。

「久しぶり！元気そうね」

「先生こそ」

「ふふ、元気だけが取り柄だから。・・・そうだ、本城君、結婚したんだってね。おめでとう」

あなたにそう言われるのは、凄く微妙ですけどね。と、言いかけてやめる。

「ありがとうございます」

「アノ本城君が結婚かあー。もっと遊んで年取ってから若い奥さんを貰うと思ってたのに、意外と早く落ち着いたわね」

「・・・それ、今日もう10回くらい言われてるんですけど」
「そりゃそうよ」

なんだ。俺ってそんなに遊んでそうか。

・・・まあ、確かに、昔は遊んでたけど。

俺が軽く先生を睨むと、先生は肩をすくめてさっさと話題を変えた。

「今日の同窓会の幹事、お疲れ様」

「俺は幹事じゃないですよ。幹事は宏です」

「あはは。和田君で合コン以外の幹事もするんだ」

宏の合コンか。

それも懐かしいな。

「俺は、同窓会の案内を配っただけです」

「それでも、高校3年の同窓会だから・・・12年ぶりくらい？全員に配るの大変だったでしょ」

「そうですね。あ。案内と言えば。変なのを投入してすみませんでした」

「変なの？ああ、あの2人ね」

同窓会の案内なんて、直接渡す必要は全然なかったけど、

せっかく偶然再会できたんだからちよつと2人の時間を作ってやる
うと思ひ、

敢えて歩と三浦に届けさせたのだ。

「メモ見て笑っちゃったわ。『初めてのおつかい、ならぬ、初めての
のデート、です』って。

あの2人は上手く行ってるの？」

「さあ・・・」

せっかく両想いだったのに、何やってんだあいつらは。

いつの間にやら市川が加わって、今じゃすっかり三角関係だ。

まあ、元はと言えば、三浦が歩のことを「雲雀乃谷歩」だとわから
なかったのが悪い。

俺ですら三浦のことを、

まりもキティと出身小学校で、「あ。歩の初恋の女だ」ってすぐに
わかったのに。

結婚式の夜、歩が「今更初夜も何もねーだろ！？」と、うちに乱入
してきた。

そして、延々と三浦の愚痴を言っていた。

この「もめごと」はしばらく続きそうだ。

そうそう、もめてると言えば、俺の弟の幸太ももめにもめてる。

幸太は、高校を卒業した頃、間宮財閥の一人娘と恋に落ち、あつと言つ間に子供を作つた。

俺なんて、月島に「高校卒業するまではイヤです」と散々待たされた挙句、結局卒業後も、なんだかんだで何ヶ月もお預けを食らつたというのに・・・

それはともかく。

幸太は、彼女の親に結婚を認めてもらえず、籍は入れてないものの、今は親子3人で幸せに暮らしている・・・
つて、あれ。全然もめてないな。

まあ、いつか。

「本城君？」

「あ。すみません・・・そうだ、先生。綾瀬学園はどうですか？」

「いい学校よ。ふふ、やりがいがあるわ」

先生の目が光る。

この熱血ぶりも変わってない。

俺は10年以上前、先生のこういう所に惚れたんだ。

そんな気持ちですら、今は懐かしく思える。

俺は、今日一番の目的を果たし、ようやく酒を味わうことができた。

同窓会から戻り、マンションのエレベーターに乗ると、独特の匂いが鼻を突いた。
煙草の匂いだ。

それも、かなりキツイやつ。

こんなのを吸うのは、あいつしかいない。

今晩はもう一度飲まなきゃいけないな、と思いながら玄関の扉を開いたが、
予想に反してあいつの靴はなかった。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま。なあ、月島、あいつは・・・」

言い終わらないうちに、月島が急ぎ足で廊下を戻り、リビングからガチャガチャと何かを持ってきた。

うわ・・・またやってしまった。

「はい！500円入れてください！」

「・・・わかったよ」

俺は財布を取り出し、月島、じゃなかった、「和歌」が差し出した

貯金箱に500円玉を入れようとした。

「あ、500円玉がない」

「じゃあ千円札でいいです」

「・・・こそつ」

仕方なく、千円札を折りたたんで貯金箱に入れる。

あーあ、もったいない・・・

これは、「500円玉でいっぱいになると50万円になる!」という傍迷惑な貯金箱である。

いつまでたっても「月島」「先生」と呼び合ってる俺達に業を煮やした歩が、

「月島とか先生とか言ったら、ここに500円入れる!」と、強制的にうちに置いていったのだ。

月・・・和歌が嬉しそうに貯金箱を耳の近くで振った。

「ふふ、結構貯まりましたね」

「50万円貯まったら、新婚旅行にでも行くか」

「はい!このペースだと、今年中に行けそうですね」

「・・・そうだな」

「半分以上は、先生が入れて・・・」

俺は和歌の手から貯金箱を引いたくった。

「はい。500円」

「さっき、せん・・・真弥さんが千円入れたから、それでいいことにしましょう」

ちゃっかりしてやがる。

俺はリビングに入り、部屋を見渡した。

「なあ、あいつ来なかったか？」

「はい、来ました。でも用事があるとかで、コレを置いてすぐに帰っちゃいました」

そう言つて和歌が俺に茶色い封筒を手渡した。

ペラペラだ。

中を覗くと紙が一枚だけ入っている。

それを見て、俺は驚いた。

小切手だ。

でも、そこに書かれた金額のゼロの多さに、更に驚いた。

「なんだ、こりゃ？あいつ、このマンションだけじゃ飽き足らず、こんなまでくれたのか！？」

そう。このマンションもあいつからの結婚祝いだ。

昔、俺が冗談で「結婚したら駅から5分の5LDKのペントハウスをくれよな」と言ったら、

あいつ、本当に用意しやがった。
信じられん。

でも、俺も自分で催促した手前、「こんなのさすがに貰えない」とも言えず、

ありがたく受け取ったのだが・・・なんだ、この小切手は。

「それは、私達にじゃないです。穂波の旦那さんにです」

「・・・ああ！絵の代金か！」

以前あいつが、うちのリビングに飾ってある西田の旦那さんが描いた絵を見て「俺も欲しい」と言い出したので、

西田に頼んで、旦那さんに描いてもらったのだ。

西田の旦那さんは、若手の中じゃ結構有名な画家だ。

特に子供をモデルにした絵は、人気がある。

でも西田は「先生の友達からの依頼だったら無料でいいですよ」と言ってくれた。

とは言え、そうもいかないだろう。

あいつは「できた絵を見て、いくら支払うか決める」と言っていたが・・・

それにしても、この小切手は高すぎないか。

・・・そうか。これで西田の旦那さんの絵の価値が全体的に上がる。それこそが、あいつからの本当の「絵の代金」なんだろう。

「んじゃ、この小切手は俺がもらってもよくないか？」

「何言ってるんですか。今度私が穂波に渡しときます」

やっぱり？

俺は苦笑いしながら、封筒を和歌に返し、リビングの大きな窓の方へ目を向けた。

この夜景は本当に素晴らしい。
さすがに、東京を一望、とはいかないが、かなり遠くまで見渡すことができる。

この家の、一番のお気に入りだ。

「どうぞ」

和歌が俺に湯のみを差し出した。
中からは梅昆布茶のいい香りがしている。

「ありがとう」

ちようと飲みたいと思ってたところだ。
和歌は、俺の気持ちをよくわかってくれる。

普通、こういう景色を眺めながら飲む物と言えば、高級ワインが定番だろうけど、
生憎俺も和歌もそういうキャラじゃない。
2人して梅昆布茶を飲むのが最高だ。

俺はお茶を飲みながら、すぐ眼下に広がっている暗闇を見つめた。
眩い夜景の中で、そこだけ真っ暗でぽかっと浮かんでいるように見える。

そこは、今は人がいないから単に電気がついていなくて暗いだけなのだが……

俺の目には何故か本当に「暗闇」に見える。

俺の中にある迷いが反映されているせいだろうか。

「あそこ・・・綾瀬学園ですよね」

「ああ」

和歌が俺に寄り添うようにして、一緒に綾瀬学園を見下ろした。

あいつが理事長をやってる、綾瀬学園を。

5年前に綾瀬学園が開校した時、あいつは俺に「朝日ヶ丘を辞めて移って来い」と言った。

でも、当時俺はまだ25歳で、朝日ヶ丘の教師になって3年しか経っていなかった。

もう少し、朝日ヶ丘で頑張りたかった。

だからあいつの誘いを断った。

でも、ちょうどその時、旦那さんの仕事の関係で地方にいた神谷先生が東京に戻ってくることになり、働ける学校を探していたので綾瀬学園を紹介したところ、そこで働くことになった。

また、歩の父親である森田先生も、新しい学校の立ち上げに興味を持ち、綾瀬学園へ移ることになった。その功績を買われ、今は若き教頭だ。

そして俺もまた・・・

予感はあつた。

俺もいつか、綾瀬学園に移るだろうという予感。

正直、興味はある。

俺もずっと小・中・高・大学とエスカレーター式の学校に通っていたから、

そういう一貫校の良い所も悪い所も知っている。

もし、小・中・高校一貫の綾瀬学園に勤めるなら、やってみたいこともある。

それに・・・

何より、俺が綾瀬学園に移ることを、あいつが望んでいる。

あいつは不思議な男だ。

決して強要することなく、でも、必ず自分の思い通りに事を運ぶ。そういう力を持っている。

三浦曰く、俺もそういうタイプらしいが、あいつとは格が違う。

幸太なんて、あいつのためなら命も投げ出すだろう。

「真弥さん」

「ん？」

「生徒にとつて、『先生』はいつまでたっても、どこにいても『先生』です」

「和歌・・・」

ほんと、なんで和歌は俺の考えてることがわかるんだろう。これが夫婦ってやつか？

でも、和歌は昔っからそうだもんな。

そう、昔から。

和歌と出会って、もう7年以上。
ようやく結婚することができた。

7年前・・・俺がまだ教師になりたての頃、歩は小学3年生だった。
その歩が、高校生になり、俺の生徒になった。
なんの偶然か、歩の初恋の女である三浦舞も俺の生徒だ。

不思議な縁を感じる。

この2人の卒業を見届けたら、俺も朝日ヶ丘での教師生活に一区切りつけてもいいかもしれない。

「和歌」

俺は和歌を見た。

「俺、やってみるよ」

和歌も俺を見上げ、満足そうに微笑む。

「なんだか楽しみですな。どんな学校なんでしょう？」

「あいつが理事長なんかやってるんだから、さぞかし胡散臭い学校だろうな」

「ふふ、そうですね」

俺は、もう一度綾瀬学園に目を向けた。
心なしか、さっきより明るく見える。

・・・さあ、始まるぞ！

おまけ3 アイツのキス

風呂からあがって、和歌さんが用意してくれたバスタオルで頭を拭きながらキッチンに入ると、真弥が俺を待っていた。

「これ。三浦に渡しといて」

そう言つて真弥が俺に差し出したのは、見覚えのある水色の携帯。三浦のだ。

「自分で渡せばいいだろ」

俺は頭だけ後ろに向け、廊下の向こうを顎でしゃくつた。

今日は、

結婚式だとか、ストーカー男から真弥を助けただとか、市川に真弥を諦めさせただとかの、

お礼をまとめてやってくれるということで、真弥と和歌さんの家に三浦と一緒に泊りがけでやってきた。

んで、さっきまで和歌さんの手料理をたらふく食べていたのだ。

真弥が教師じゃなけりゃ、酒の一つも飲んでただろう。

真弥は冗談半分（つまり半分は本気）で、

「三浦と同じ部屋に泊まるか？」と言ってきたが、丁重にお断りした。

やっぱ一応、人んちだもんな。

「んじゃ、俺が三浦の部屋に持っていくか。着替え中かもしれないけど」

「・・・やっぱり俺が持っていく」

「そーか。はい」

真弥は俺に携帯を手渡すと、ニヤニヤしながら自分の寝室へ入っていった。

別に俺は三浦なんて色気のない女の着替えには興味ない。

それでも、他の男に・・・例え真弥にでも、それを見られるかと思うと面白くないのも事実。

なんとなく不機嫌になりながら、三浦にあてがわれた部屋の扉をドンドンと叩く。

すると、多分叩き方で俺だとわかったのだろう、三浦が少しだけ扉を開いた。

って、本当に「少し」過ぎるぞ。

片目しか見えねえ。

「・・・何よ」

「もうちよっと、扉開けるよ」

「・・・もうパジャマだもん」

わずかな隙間から三浦の格好を見ると、

確かにさっきまでの服とは違うが、パジャマと言うよりジャージだ。もうちよっと色気のある格好とかできないのか。

俺はまりもキティではないストラップに人差し指を入れ、クルクルと携帯を回した。

三浦はそれを確認すると、もう少し扉を開け、携帯に手を伸ばす。

おい。礼もなしかよ。

すぐそのキッチンから持ってきたただけだ。

俺は扉の隙間から手を入れ、あっという間に部屋の中に滑り込むと後ろ手に扉を閉めた。

「な、何よ!」

三浦がちよつと俯き、顔を隠すように右手をかざす。

「何で、顔隠すんだよ」

「すっぴんだから」

「は?三浦っていつも化粧してたのか?」

「一応ね」

三浦の右手を強引にどけて、覗き込んでみる。

「やめてよ!」

「・・・いつもどこがどう違うんだ?」

「う、うるさい!」

三浦は俺の手を振りほどき、勢いよく後ずさる。でも6畳ほどの部屋だ。すぐに壁に背中がついた。

三浦の顔が強張る。

おいおい、なんだよ。

俺が取って食うとも思ってるのか？

見損なうなよな。

が、ここ最近、三浦は随分酷いことをしてくれている。ちよっとくらいイジメても罰は当たらないだろう。

俺は、わざとニヤつきながらゆっくり三浦に近づき、携帯を持った左手をポケットに入れ、右手で三浦の頬をなでた。三浦がぎょつとしたような表情になる。

おもしれー。

本気で嫌がつてるならやめるけど、多分三浦は俺のことが好きだ。だから嫌じゃないだろう。

今度は親指で唇を触ってみる。

・・・柔らかい。

前、キスした時もあったけど、三浦の唇は本当に柔らかい。物理的にそうなのか、俺がそう感じてるだけなのかはわからないけど。

夏休みに、俺は一度三浦に告白してる。俺が好きなのは、バカで鈍くて色気のないチンパンジーだ、ってちゃんと三浦に言ったんだ。

なのに、気付かずサラツと流しやがって。
どんだけ鈍いんだ。

だからこの前、三浦が、俺にとってのキスはどんなのだ、と聞いてきた時、チャンスだと思った。

もう一度告白なんてする気はなかったけど、これを上手く利用すれば・・・と思った。

んで、考えた結果、俺は敢えて市川にしたキスと同じキスを三浦にした。

同じキスでも、
市川にしたキスは「キスとは言わない」、
でも、三浦にしたキスは「本当のキス」だ。

同じキスでも、
する相手が違えば、本当のキスになるんだ。

わかるか？
ちよつと難し過ぎるか？

俺の心配は見事的中し、三浦はまたもや何も気付かなかった。

そのくせ、まりもキティを捨て、
「過去の恋は忘れるわ。これからは新しい恋に向かって走るの」と
か言つて、

俺のこと遠回しに振りやがって・・・

と思つてたけど、三浦は俺を雲雀乃谷だと気付いていなかった。
(これはこれで酷すぎるが)

俺はてつきり「過去の恋」というのは俺、つまり森田歩のことで、「新しい恋」というのは、どっかの誰かのことだと思っていたが、三浦としては「過去の恋」というのは雲雀乃谷歩のことで、「新しい恋」というのは、森田歩のことのつもりだったらしい。

どんだけ間抜けでどんだけ酷いんだ。

俺が落ち込んだ時間を返して欲しい。

俺は、顔を強張らせたままの三浦を見ながら思った。

昔から、俺は恋愛に冷めたところがある。

だから小3の時に「舞」のことを好きになったのは、俺にとっては画期的な出来事だった。

まりもキティのお礼に、と、舞がくれたギグレスターのトレカを
実はまだ捨てずに持つてゐることは、一生秘密だ。

それはともかく。

俺が恋愛に対して冷めてゐる原因は・・・

俺の本当の父親は、俺が赤ん坊の頃に病気で死んだらしい。

だから、俺は父親の顔を写真でしか知らない。

結婚前の写真や、結婚式の写真、生まれたての俺と一緒に写った写真。

どの写真の父さんも母さんも、幸せそうだ。

だけど、結局父さんは早くに死んで、母さんは女手一つで苦労して俺を育てた。

どんな幸せな恋愛をしても、
どんな幸せな結婚をしても、

これじゃ幸せだなんて言えないだろう。

それでも俺は、

真弥と和歌さんに出会い、

それに、今の父さんと再婚して幸せそうな母さんを見て、少しは「恋愛もいいかもな」と思うようになった。

けどやっぱり、世間一般レベルから言うと「冷めてる」らしい。

初めてキスしたのは、小学校の卒業式の日。

クラスメイトの女子に告られて、「恋愛とか付き合うとか興味ない」って言ったら、

じゃあキスして欲しい、と言われ、そんならいいか、と気軽な気持ちでキスした。

中学になると、「彼女ができた」だとか「告白された」だとか、一気にみんな色気づき始めた。

俺も、流行に乗って（？）彼女ができたけど、なんか違う。

俺にとつての「彼氏と彼女」ってのはイコール「真弥と和歌さん」だった。

俺と彼女は、真弥と和歌さんとはなんか違う。

真弥と和歌さんは、一緒にいて楽しそうだし幸せそうだ。

でも俺は彼女といても、そんなに楽しいと思わなかったし、ましてや幸せだなんて思ったことがない。

しかも、彼女はやらべタべタしたがるし「付き合ってるんだから！」ということを強調したがる。

和歌さんを見てみる、と言ってやりたかった。

和歌さんはそんなことしなくても、押しも押されぬ真弥の彼女だぞ。

俺も俺で、彼女というより友達や真弥という方が楽しくて、結局すぐに別れてしまった。

だけど、ちょっと反省した。

俺は彼女に「和歌さんとは違うなー」と思っていたけど、俺だって全然真弥とは違った。

だから、次に彼女ができた時は、真弥の真似を試してみた。

彼女を大切にしていって、彼女が喜びそうなことをして、彼女が望むことにはできるだけ応えた。

真弥が和歌さんにするみたいに、しょっちゅうキスもした。

彼女は随分喜んでくれたけど、俺は逆になんだか疲れてしまい、これも長続きしなかった。

一度真弥に相談したことがある。

「真弥と和歌さんで、なんでそんなに幸せそうなんだ？」

「歩は彼女について幸せじゃないのか？」

「全然」

「・・・でも、キスとかしてただろ」

「してたけど。したくてしてた訳じゃない」

「んじゃ、なんでしてたんだよ」

「こういう場面ではした方がいいかなー、と思って」

「・・・なんか、昔の俺みたいだな。って、百年はえーぞ。

歩はまだ、本気で誰かを好きになったことがないんだな」

「本気？」

「そう。本気で好きになったら、付き合いたい、てゅーか、一緒にいたい、とか、

キスしたい、とか思うようになる」

「ふーん。そーゆーもんか」

「そーゆーもんだ」

という訳で、俺は自然とそーゆー風になるのを待つことにした。

だけど不思議なもので、気を抜いてみると返って気になる女ができたりもしたが、

恋愛にまで発展することなく俺の中学時代は終わった。

で、高校に入り、このチンパンジーと再会したわけだ。

「な、何すんのよ」

ようやく三浦が口を開き、俺は我に返った。

「んー。何って別に。ちよつと遊んでただけ」

「なっ！ー酷い！ーからかわないでよ！ー！ー」

酷いのはどっちだ。

「なあ、三浦。俺とキスしたいって思う？」

「は？お、お、思う訳ないでしょ！ー！ー！ー」

思っんだな？

分かりやすい奴だ。

・・・ふーん、俺とキスしたいんだ。
素直にそう言えばいいのに。

「市川だったら、『したい!』って喜んで言いそうだな」
「!?!」

三浦が真っ赤になって、何か言おうと口をパクパクする。
金魚か、お前は。

さー、なんて言うつもりだ?
「私も!」って素直に言うか?
それとも・・・

「ふ、ふんっだ!」

三浦は思いつきりそう言っつて、そっぽを向いた。
やっぱり三浦は三浦だ。

俺が「付き合おう」と一言いえば、俺と三浦は付き合うことになる
と思う。

でも、三浦って和歌さんみたいなタイプじゃ全然ないしな。
俺と三浦が付き合ったとしても、真弥と和歌さんみたいになれると
は思わない。

でも・・・

俺は真弥じゃないし、三浦は和歌さんじゃない。
俺と三浦が、真弥と和歌さんみたいになれないのは当たり前だ。

俺は俺なりに幸せになれば、それでいいんじゃないか？

三浦の横顔を、その唇を見つめてみる。

俺はどうだろう？

俺は三浦とキスしたいんだろうか？

俺は三浦といれば、幸せになれるんだろうか？

三浦は俺といたら、幸せなんだろうか？

うーん・・・わからん。

「森田」

「なんだよ」

「携帯、返して」

あ。忘れてた。

「俺にキスできたら返してやるよ」

「・・・」

おお。死んでもやだ、って顔してるな、
と、思ったら。

三浦がいきなりこっちを向き・・・
俺にスッと近づき、すぐに離れた。

ん？今、頬に何か当たったような、当たらなかったような。

「し、したんだから、返してよね！-」

さつき以上に真っ赤な三浦。

湯気でも出てきそうだ。

「今のがキス？」

「そ、そ、そ、」

そうよ！とでも言いたいのか。

まあ・・・いつか。

三浦にしては頑張った方だ。

「ほれ」

「・・・」

俺が携帯を差し出すと、

三浦は腫れ物にでも触るように、おどおどと手を伸ばしてきた。

本当に面白い奴だ。

俺は伸びてきた手をぐいっと引っ張り、
三浦にキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922/>

お兄ちゃんと先生とアイツの彼女！

2010年10月9日12時14分発行